

魔法少女リリカルなのは ～彷徨える妖精～

拳を極めし者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

財宝を守護する妖精。

秩序と平和を守護する魔導師。

2人の守護者が邂逅した時、新たなる物語の幕が上がる。

目次

序章

幽霊島

1

第1章 始まりの妖精

目覚める妖精

1

8

目覚める妖精

2

12

目覚める妖精

3

16

目覚める妖精

4

20

妖精との出会いなの

23

高町士郎

1

28

高町士郎

2

31

高町士郎

3

35

高町士郎

4

39

格闘遊戯なの

1

42

格闘遊戯なの

2

48

リハビリなの

51

わたしの秘密なの

54

ユーノくんの秘密なの

58

妖精の秘密なの

61

世界の秘密なの

65

妖精の決意なの？

69

妖精の疑問なの？

73

妖精の怒りなの？

77

わたしの意志なの

81

妖精の驚愕なの

84

「魔法」の使い手なの？	87
妖精の見定めなの？	90
「魔法」の天才なの	92
魔法講座なの	95
魔法講座なの	100
A・Mスーツの秘密なの	104
男同士の秘密なの	108
宇宙人なの？	111
誰の記憶なの？	115
男同士の話し合い	118
第2章 雷の申し子	
チームの初陣なの	120
はじめての連携なの	125
2人目なの？	130
敗北なの？	133
雷神なの	137
無敵なの	141
アルバイト	145
それぞれの決意なの	148
始まりの合図なの？	151
妖精と雷神	154
牙を剥く獣	159
妖精の力	163
ライカンスロープ？	168
伝わらない思いなの	171

認め合う二人	174
油断	178
本能	181
救援	184
豹変	189
信頼し合う二人	193
芽生える黒き意志	198

序章

幽霊島

現代科学では遠く及ばない程の科学力を持っていた超古代文明が創り出した、人知を超える力を宿した遺産「オーパーツ」と、それが眠る遺跡。近年ではオーパーツをそのまま「遺跡」と呼ぶ者もいる。たった一つで世界のパワーバランスを崩壊させかねない力を秘めたそれを狙う者は後を絶たず、組織の枠を超えて国家レベルで奪い合う事態にまで発展する。

さながら水面下の世界大戦とも形容すべきこの争奪戦が世界を滅ぼしかねないことを予見していたのか、オーパーツが注目され始めてから程なくして遺跡を誰よりも早く発掘・確保・封印する者達が現れた。

その名は通称「第二のロックフェラー」とも呼ばれる、世界最大の財団として名を馳せる「アーカム財団」。アーカム財団は表向きは世界中に考古学研究所を設立し、遺跡の保護を目的としている。

しかし、裏では故・アーカム氏の遺言通り彼の莫大な遺産を使って、前述通り世界中の誰よりも先に遺跡を手に入れていたのだ。その中でも各分野の選りすぐりのエリートが集まって結成された組織、それが通称「スプリガン」と呼ばれる組織である。

遺跡を狙う者達は基本的にほぼ確実にスプリガンに邪魔されるため、他の組織とは敵対しない事があるどころか手を組んで遺跡の確保を急ぐ又はスプリガンを迎撃する事も珍しくない。

もつとも、手を組むとは言っても所詮は遺跡を独占しようと考えている者同士。手を組んだ相手を出し抜いて先行しようとする事や、ある程度事が運べばスプリガンごとまとめて相手を始末しようとする事もまた珍しい事ではない。つまりたった一回でも封印が遅れれば一つの遺跡を巡って三つ巴・四つ巴、或いはそれを超える凄惨な混戦が起こる事も決して珍しい事ではないのだ。

17歳という若きにしてスプリガンのS級特殊作業員として裏の

スペシャルエージェント

世界で知らぬ者はいないと言っても過言ではない実力者である「御神苗^{おみなえ} 優^{ゆう}」は、今日も今日とて遺跡を巡って敵対組織と戦いを繰り広げていた。

戦いの舞台は太平洋上で消失・出現を繰り返し、出現の度に体積を増やす謎の島「幽霊島」。

それを狙うのはスプリガン最大の難敵にして世界の兵器産業を牛耳る軍産複合体「三叉矛^{トライテント}」及び、かつて優の師を務めていた元スプリガンS級特殊工作員である老兵の男「ガルド・ゴア・ボーマン」。それに加えて一人でオーパーツを狙う、通称「遺跡荒らし^{モニユメントクラッシュヤー}」の少女「染井^{そめい} 芳乃^{よし}」。

この島はいつの日か来るべき大異変に備えて異空間を自由に往来する避難島として製造された人工島である。

ここには中央に位置する巨大ピラミッドがあり、地脈のエネルギーを吸収することで起動する動力装置となっていた。しかし大異変が予想より早く訪れ、それによりシステムが不完全なままやむなく起動させた為にシステムが暴走。暴走で島の民が全滅し無人と化したこの島は長きに渡り暴走を続け、集めたエネルギーと地球各地で飛行機や船舶・建造物や土地等をこの島へ空間移動させる事で体積を増やしてきたのだ。

当然空間移動も完全ではなく、一本道を走行中のトラックの荷台に固定もせずに載せた荷物が予期せぬ段差で跳ねて荷台を飛び出して落ちてしまうかの如く、切り取った空間の一部又は全部が移動中に通常空間へ放り出されてしまうものであった。

更には通常空間にいる間にピラミッドはエネルギーを際限なく集め続けており、現在では許容量の限界を突破して弾け飛ぶ寸前までになっていた。このエネルギーは周囲へ放出されれば日本や周辺国を含む太平洋一帯を飲み込み異空間へ飛ばしてしまう程に膨大なもので、止めるには動力装置であるピラミッドを破壊してエネルギーを異空間に逃がすしかなかった。

しかし超古代文明の技術で造られたピラミッドの破壊は容易ではなく、優は不本意ながらも第二次世界大戦末期に行方不明となってい

た原子爆弾搭載戦闘機を使い、一時休戦していたボーマンと共に破壊を敢行した。

「よし、セット完了だ。あとはこいつがうまく爆発してくれるかな…」

ボーマンが原子爆弾に時限信管をセットしてあとは島を脱出するのみとなり、問題は解決したものと思われた。ところが勝利の余韻にも似た安堵の時間を引き裂くかのようにボーマンがアタッシュケースを持った芳乃を捕らえ、優に取り引きを持ちかける。

「そのケースの中にはこの島の動力の秘密が書かれているデータプレートがあるはずだ。私の任務はそのプレートを島から持ち出し、トライデントに献上する事だな。」

なに、素直にケースを渡せば手荒な事はしない…。だが、渡さなければお嬢ちゃんを殺し…お前も殺す!!」

ボーマンは本気だった。その目には微塵の迷いもなく、「徹底した非情さ」を覗かせている。その目にはかつての自分の師の面影は残っていない。優は芳乃を助ける為にケースを渡すよう芳乃に促し、なんとか彼女を取り戻した。

「教官とは戦いたくなかったが…オレもスプリガンだ。スプリガンとして、トライデントに遺跡が悪用されるのを見逃すわけにはいかねえ…!」

「ちよ、ちよつとやめなよあんた達! そんな事やってる場合じゃ…」

「うるせーな! てめーはとつと消えろ!!」

「もー!! バカちゃん!! じゃあとつと消えるわよ!! あんたなんか幽霊島と一緒に幽霊にでもなっちゃえばいいのよ!!」

一時間半後に島が消えるという運命を前にしてスプリガンの使命を全うしようとする優を止めようとする芳乃。しかし優はそれを跳ね除け、暗に先に脱出するよう促すのだった。

「教官…教えてください…」

長年培った戦闘経験とナイフ捌き、そしてアーカムの知る限り世界中でも彼しか使えない特殊能力を駆使して敵を欺き屠るボーマンの老獪な戦術で徐々に追い詰められていく優だったが、窮地における天性の見切りによってボーマンのナイフと特殊能力を破り、ボーマンの胸にナイフを突き立てる事で辛くも勝利を収めた。

「何故アーカムから急に姿を消したんですか!？」

優は吠えた。

かつての師に。

今は敵である老兵に。

優は信じているのだ。自分の素質を認め、己の全てを自分に託してくれた師を。そして…

「アーカムの中でもあれほど使命感が強かったあなたが…何故…」

誰よりも仲間を愛し、平和を愛していた男の正義を。

「ふふ…お前にも…いつかわかる…」

ボーマンは答えない。しかしその目は我が子の成長を喜ぶ親そのものだった。

「しかし…本当に強くなったなあ、優…。こんなに逞しくなった教え子と…最後に戦えて…私は幸せだったよ…」

優はボーマンと目が会うと、やりきれない思いから目を逸らす。だが…

「だが…アーカムが必ずしも…正しい事をしている…とは…限らな…い…」

「!？」

聞き覚えのあるボーマンの言葉に思わず振り返る。

以前、優は怨霊と死者の蠢く「帰らずの森」で、止むを得ずトライデント行動部隊長の「あかつきいわお暁巖」と一時休戦・共闘した直後にこんな忠告をされた事がある。

「アーカムが必ず正義だとは言えまい。集めた遺産を使い、突然明日には世界の支配者になるかもしれないんだぜ」

優自身もその可能性を全く考えていないわけではなかった。むしろ世界の支配すら可能な力を幾つも目撃・接触すれば、早かれ遅かれ良からぬ欲望に目覚める者が現れるのは必然とさえ言える。

帰らずの森へ赴く前に上司の山本にも「今回のアーカムのやり方には賛同しかねている」と言われ、一抹の不安が過ぎったのもまた事実。だが「そんな事ありえない」と自分に言い聞かせて心の隅に追いやっていたのだ。

それを暁によつて掘り起こされた時、優は反論の言葉一つすら出せずにただ肯定するしかなかった。何故ならば一個人や一つの組織が大きすぎる力を手に入れた場合、高確率で力の乱用・悪用・暴走が付き纏うのは世の必然だからだ。これは力を手に入れた者が善悪どちらでも関係なく起こりうる。

強大で制御困難な力を持つという事は、無邪気な子供に拳銃を持たせて遊ばせる事にも似た危険性があるのだ。

例えば、人類史上最大の罪が形を成した兵器である核兵器を、社会人にもなればこの世で知らぬ者はいないだろう。小国ならばたった1発で滅ぼしてしまう威力を持つその禁忌の爆弾を、現在人類は世界中で製造・保持している。

しかしながらそれが実際に使われたのはたったの2発のみ。日本国内に落とされた2発の厄災は、それを使った者達でさえ目を覆いたくなるような悲劇を生み出した。その悲劇に恐怖した各国は、同じ悲劇に見舞われる恐怖から逃れるべく最善とも最悪とも言い難い方策を実行した。

それが「核兵器の大量保有」だ。

何故そのような危険な発想に至ったのか？

答えは単純明快。仮に核兵器を持つ国が世界で1ヶ国だけだった場合、世界中の国は死の炎に怯えながらその国に従うしかなくなってしまうだろう。

だがそれを複数の国が持つていれば話が違う。「撃てば撃ち返される」と相手に思わせれば対等の立場になれる。つまり「相手と同等の

力を持てば相手を抑え込める」と考えたからだ。これは現代に限らず、人類有史以来から現在まで繰り返されてきた自然な流れである。今や世界の平和は核兵器保有国の睨み合いという危険な均衡により保たれている。

このように人類は常に強大すぎる力が一点に集まる事を恐れ、均衡を保つ為に同等かそれを上回る力を生み出し続けた結果が現代の軍の姿である。

しかしその均衡も近年では、核兵器以外の軍事力によって崩れつつある。

だが軍事力すら持たない小国や、より高い軍事力を欲する国々が目を付けたのが、物によつては核兵器すらも上回る脅威となるオーパーツという訳だ。

そんな物を一組織が独占するなど本来は許されるはずもなく、アーカムはむしろ現在まで邪な人間が現れなかったのが奇跡と言えるだろう。

暁にそれを指摘された優は肯定するしかなかったが、それと同時に「その時は自分の手でアーカムを叩き潰す」と宣言してみせた。

それは口に出す事により自分に言い聞かせるための宣言であり、同時に「自分がいる限り、そんな事はさせない」という決意の表れでもあった。

ところがそれもボーマンの裏切りという信じ難い事実によつて揺らいでしまった。

疑惑が確信に変わってしまったのだ。

「お前は……お前は己の正しいと思つた事を……全う……し………」

「……!!!」

絶句。声にならない叫び。恩師は今、静かに瞳を閉じた。

だが悲しんでいる時間は無い。

爆発までの残り時間も数分となり、優は急ぎ海岸へ向かうが、そこに仲間の船の姿は無かった。

途方に暮れた優がこの島で最期を迎える覚悟を決めようとしたところ、岸壁の陰から聞こえる人の声。その声の正体はなんと、優に脱出を促されて先に島を出たはずの芳乃であった。

芳乃は優を信じて小型ボートで待っていたのだ。優は希望に打ち震える間もなくボートに乗って脱出を図るが、遂にタイムリミットが訪れ、原子爆弾が爆発。

原子爆弾によるものか、それとも幽霊島の起動によるものか……どちらとも判別できない謎の光に2人は飲み込まれ、幽霊島は再び世界から何かを奪いながらその姿を消した。

第1章 始まりの妖精

目覚める妖精 | 1

(教官……オレは……)

罪の意識と信じていたものに抱いてしまった不信感にうなされながら目を覚ます優。

「……………」

朦朧とした意識の中、ぼやけた視界で辺りを見回すと、ここはブルック塀で区切られた夜の住宅街の一角だった。家の造りや立っている標識を見る限り、どう考えてもここは日本のどこかである事が伺える。

優は考えた。

幽霊島付近にいたはずの自分が何故、日本の住宅街の中で気絶していたのか？

幽霊島の暴走は止められたのか？

船長達は無事に逃げられたのか？

あれから何時間、あるいは何日経ったのか？

これらはいずれも大事な問題だ。だがそれらにも負けないくらい大きな問題がもう一つあった。

「芳乃……芳乃は!？」

己の身をも顧みずに自分を助けようとしてくれた女の事を思い出し、辺りを再び見回しながら同時に気配も探る。

「……………」

周りには人はおろか野良猫の一匹すら見当たらず、風も無く、動いている生物の気配すら感じられない。住宅の明かりも全く見えないところを見ると、どうやら現在の時間帯は深夜。正に草木も眠る丑三つ時というやつだ。

街中とはいえ、一般市民ならば殆どの者が眠っているであろうこの時間帯は、街灯が夜道を明々と照らしながらも不気味なほどに静まりかえっている。

(待つてろ……借りは必ず返す……!)

優は直ぐさま立ち上がり、芳乃を探すために気配を探りながら走り始めようとした瞬間、周辺が異様な気配に包まれるのを感じ取った。(この感じ……結界か?しかもこれは……)

優は以前、「今世紀最悪の黒魔術師」と呼ばれる「ヘウンリー・バレス」という男の手によって闇の世界に閉じ込められた事がある。その際に使われたのが、結界内の影を異空間への扉に変え、その影に触れた者を飲み込むというものだ。

闇の世界は闇の亡者(死者の怨念が悪霊となったもの)と生者を閉じ込めるものだったが、この結界はそれと似た気配で、闇の亡者に似た何かを閉じ込めようとしているようだ。また闇の世界は通常空間から隔絶された異空間にあるが、この結界は空間自体は移動していない。それにも関わらず、この結界はその何かを残して人のみを中から消してしまっている。

優は走りながらこの結界の詳細を分析する。

(まさかこの一帯の人を位相をズラして隠したつてののか!?)

ありえない結論だった。

結界術は発動条件が厳しく発動に要する時間も長いため、基本的には遠隔で発動するか、止むを得ず近距離になる場合は発動まで他者に守ってもらう必要がある。今回の場合は近くに人はいないので遠隔発動ということになる。

また結界の範囲は相当広く、走り始めてから既に数百メートルは走っているのに結界の端に当たらない。

善悪は抜きにして魔術師としては極めて優れたヘウンリー・バレスでさえも、短時間で発動する場合は触媒を用いて近距離にいる者のみ限定で範囲内の対象を同時に異空間に飛ばすので精一杯。結界内限定だとしても、これ程の広範囲の空間そのものを加工して数十人から下手をすれば百人単位で同時に隠してしまうなど到底人の為せる業とは思えないものだったからだ。

厳密に言えば完全に不可能という訳ではないが、実現するにはヘウンリー・バレス並みの魔術師十数人と莫大なエネルギー、そして強力

な魔術用触媒が大量に必要だろう。……もつとも、何らかの遺跡の力を使えば大掛かりな準備をしなくとも、1人でも不可能ではないだろうが……。

(とんでもねえ魔術師がいたもんだ。……だがなんでオレは残されたんだ?)

優の疑問は当然のものだ。結界内に特定のもののみ閉じ込める場合は、展開時にその特定のものに合致する条件を満たしたもののみを閉じ込める又は結界から弾き出すようプログラミングしておく必要がある。

だが優は当然ながらただの人間だ。霊的な存在と合致する条件などある筈がない。

(とりあえずそいつに会わなきゃ話になら……)

《助けて!》

「!?」

考えている最中、突如優の頭を叩く少年の声。優は慌てて立ち止まり、気配を探りながら辺りを見回す。

(やっぱり辺りに人の気配はねえ……ってことは頭に直接声が……!)

当然ながらこの結界内には優以外の人間はいない……筈だ。他にいとすれば、この結界を展開した人物以外にはありえない。

(テレパシストが実際にいるなんて聞いたことねえぞ! つーかなんで同時に使ってやがんだ!?)

優は仕事柄命懸けの戦いを数多く経験しており、それ故に特殊な能力を持つ者と戦った回数も多い。その者達は、超能力者や魔術師・霊媒師、獣人やサイボーグなど様々だ。しかしそれらの全ては各々の分野の延長線上の領分でしか能力を使えない。魔術師は例外的に系統の違う複数の力(魔術)を使えるが、同時に複数の力を使える者は一部の例外を除いて存在しない。

ところがこの結界の主は全く系統の違う能力を同時に使用している。こんな能力の使い方は本来絶対に有り得ない、ヒトの領分を超えた所業だ。それも人間一人では到底不可能な結界を展開しながらとなると、その人物がどうやってそのような不可能を可能にしたのか

はつきりと見えてくる。

(何かの遺跡の力を使ってやがるな…！)

仮にその人物がその力を悪事に使っていないならそれに越したことは無い。実際にわざわざ民間人を避難させた上で悪意ある何かを閉じ込め、助けを求めている経緯を見ると悪事を働いているとは思えず、助けを求めるということは結界内にいる可能性が高い。

しかしながらその力を悪用する可能性も無いとはいえないため、優は万が一の時を想定しながら結界内にいるであろう結界の主を探す事にした。

(さて、臆ほど正確じゃねえが…試してみるか)

優は気配の通りを良くするために民家の屋根の上に飛び乗り、極限まで意識を集中すると……

(…よし、いた！)

遠くに微かな一つの生物の気配を感じた。それを辿るべく屋根から屋根へ飛び移ってショートカットしながらそこへ向かう。

(ん？閉じ込めようとしたのはこの気配の主か…！)

動き出して数秒ののち、突如現れたもう一つの気配がそのせいぶの向かう方向と同じ方向へ急速接近しているのを感知した。

優が感じたのは妖気。恐らくはほぼ自我を持たずに一つの意志のみで暴威を振るう悪霊の気配だ。悪霊は思いの外速く飛んでおり、あまりにも突然の出来事に反応が遅れてしまった優はそれを後追いつるが、追いつく前に暴れ出して建物を破壊してしまう。

(やべえ、気配のある方に向かってやがる！それに建物も…！被害が広がる前に何とかしねえと…！)

こうなれば残された猶予は多くない。優は屋根から屋根へと飛び移りながら必死に悪霊を追って行った。

目覚める妖精 — 2

(ヤロウ、追いついたぜー！)

やっと被害を受けた建物の近くまでやってきた優。しかし安堵する時間など1秒もない。

「きやつー！」

(こ、子供!?)

突如建物のある敷地内からイタチらしき動物を胸に抱えながら飛び出す少女が現れる。少女はまだあどけなさが顔に残る茶髪ツインテールで、大きく見積もっても中学生になっているかどうかといった年齢だ。いや、もしかしたら10歳にもなっていないかもしれない。(イタチ、か…。気配が弱々しいな。さつき気配を感じなかったのはあの子供が抱えてたせいで弱い気配が隠れちゃったってわけか。それにしても…)

優は一瞬だけ考えた。「子供が何故深夜の街を徘徊していたのか？」と。

子供が深夜に外へ出回る理由はそう多くはない。考えられる大まかな理由は、子供ながらの冒険心かもしくは何らかの不平・不満による家出といったところだろう。

だが今はそんなことは些細な問題だ。なんの抵抗もなく悪霊から逃げているのを鑑みると、どうやらこの少女は結界の主ではないらしい。そもそもこの若さでこれ程の魔術を使うなどあり得ないという話ではあるが。

では結界の主はどこにいますか？というのだろうか？もしや自分だけは被害に遭わないよう気配を消して逃げ回っているのだろうか？それとも結界の外にいるのだろうか？

これが本当にそうであればただの臆病者に見えるかもしれないが、結界を展開している人物であるならば（加えて戦闘能力がないならば）、結界が破られる危険を避けるためにはそれが賢明ではあるので責めることはできない。

しかし目の前の少女の命が危機に晒されているのは間違いなく、悪

霊はそれなりの移動速度に加えて物理的破壊力も大きいため、迅速に仕留めなければ被害は瞬く間に街中に広がってしまうだろう。

「グオオオオ!!」

「いやっ!」

黒い眼球に赤い瞳孔の入った目と大きく開いた口を持つ白濁色のスライムのような軟体の悪霊が、一時的に動きが止まったと思いきや再び動き出して少女を襲う。

しかしその時、優の腕から破裂音と共に流線型の小型金属塊が飛んでいった。

「ガッ!」

金属塊の命中した触手が弾け、それに驚いたのか悪霊が触手を引っ込めて後退する。

「て、鉄砲?」

「バカヤロー!早く逃げろ!」

「は、はい!」

優は手に持った拳銃を悪霊へ向けながら、へたり込む少女を一喝。少女はイタチを大事に抱えながら必死にその場を走り去っていった。

「グルルル…」

(さーて、どうすつかな)

霊的存在は物理的な干渉が可能なものも数多く存在する。しかし、その多くはただ干渉できるだけで、ダメージを与えられないことが多い。

殴ろうが蹴ろうが切ろうが砕こうが貫こうが焼こうが爆破しようが、基本的には短時間で元に戻ってしまう。先ほど優の撃った弾丸もその例外ではないということだ。

(見たところ実体は無い。つてことは…)

物理的干渉が可能な霊的存在は基本的に行動範囲が狭く、自ら霊質の違う土地へ移動することはない。理由は、それが存在する土地で縛り(結界や未練など)により妖怪や霊、又は人や動物の怨念などが大量に留まることにより生まれるエネルギー(霊気や妖気)を大量に取り込むことで大きな力を得た結果、霊体が実体に近い性質に変化する

からだ。

逆に言えばその土地を離れると弱体化し、エネルギーの無い場所では最悪の場合消滅してしまうということでもある。だが当然ながら例外も存在する。

この一帯からは霊的なエネルギーが微塵も感じられない：：：ということは本来そこには強力な霊的存在はいないということだ。だと言うのに今、優の目の前にはそれがいる。ならば答えは例外の一つ：：：（依り代か）

依り代とは霊的存在を降ろす際、その器として用いられる道具の事だ。降ろすと言っても実際には何も無いところから降ろすことはほとんど無く、周辺又は任意の場所に存在するものを降ろす。その種類は霊木・宝石・動物など非常に多く、降ろした依り代の用途は大別して：：

○顕現させる：：呼び出して使役する。

○隷属させる：：従わせ、命令通りに動かす又は術者が能力を借りて行使する。

○封印する：：中に閉じ込める。

この三つで、この中でもとりわけ多いのが封印の用途である。

依り代は用途に関わらず小さいものが多く、理由も「持ち運びやすい」「隠しやすい」という実に単純なものだ。だが残念ながらデメリットもある。持ち運びやすいということは盗まれやすいということでもあり、隠しやすいということは盗まれても気付きにくいということでもある。

逆に大きいものは不便な分監視しやすく、物によつては人力で運ぶのが困難な場合も多いので盗むのも難しい。

このような長短から危険度の高いものは大きい依り代、低いものは小さい依り代を用いるのが通例だ。ただし、依り代は用途によって使役できるものが限られている場合があり、またデメリット以上にメリットの方が大きい場合が多いので、現代ではできる限り小さい依り代を使ったがる者が多数を占める。

それらを踏まえて目の前の悪霊の事を考えてみよう。

この悪霊はまともな自我を持たず、優に追隨する速度で飛行し、実体が無いにも関わらずコンクリート製の建物を体当たり一撃で粉碎するパワーも持っており、そのエネルギーは常に安定している。これは霊的エネルギーの無い土地では有り得ないことであり、それを可能にしているのが依り代だ。

(これ以上建物を壊されるわけにはいかねえ…)

降ろしたものは依り代の中にいる限り消耗することはなく、優れた依り代や相性の良い依り代は様々な特殊効果を持つものもある。

エネルギーが安定しているという事ことはエネルギーが減っていないことになり、エネルギー減っていないという事は常に依り代の中にいるということ。

また降ろしたものは依り代の中にいる限り、一部の例外を除いて力を使えない。つまりこの悪霊はその例外：「依り代の中にいながらも力を振るえる」ということになる。

(それにこの結界が絶対に破れないとも言切れねえ。そうなれば一般人に被害が出ちまう。だったら…)

作戦を考えながらスーツの首の裏に付いているスイッチを押すと内側に空気が入り込んで肌とスーツが完全に密着し、優が気合を入れるとスーツが数倍に膨張。

「速攻だ！」

ここに妖精VS悪霊の戦いの火蓋が切って落とされた。

目覚める妖精 — 3

「いくぜスライムもどき!!」

「グオオオオ!!」

優の着ているスーツはアーカム財団開発部が開発したA・Mアーマード マッスルスーツと呼ばれる優専用の全身装着型装甲強化服だ。

精神感応金属をベースとした合金によって作られた特殊繊維と人工筋肉が組み込まれており、装着者の精神作用によって発生するエネルギー障壁「パワーフィールド」が超常的な耐圧・耐熱・絶縁性と霊気・妖気耐性を生み出し、そして最大の特徴として通常時の30倍以上の筋力を引き出せるという、正に史上最強の戦闘服と言っても過言ではない性能を誇っている。

単純な身体能力でも数トンの重量を持ち上げ、助走無しで10メートルの壁を飛び越え、走れば最高で時速100kmを軽く超えるなど文字通りの超人的数値だ……とはいえA・Mスーツは常時この性能を発揮している訳ではない。

普段は機能を停止しており、起動には肌と密着させて装着者が起動の意思を強く抱く必要がある。起動すると人工筋肉の肥大化によりスーツが膨張し、シルエットだけで見れば文字通り極端な筋肉質になったような見た目となる。

ただし、これを着ただけで誰もが優のように強くなれる訳ではない。

スーツで覆えるのは首から下だけなのでスーツとは別に精神感応金属製のヘッドギアを装着しているものの、頭部の動きや視界を制限しないために面積を最小限に抑えてあるので絶対安全とは言えず、それ故に頭部は極力被弾しないよう自分で守る必要がある。

そしてスーツにより生み出されるパワーとスピードを制御するには相応の精神的・肉体的な負担がかかり、並の者では身体の動きに思考が追いつかないため、スプリガンの中でもこれを着て戦える者は優しかないのだ。

しかし近年ではA・Mスーツの防御を無効化する攻撃を行なう者

や、対A・Mスーツ用の武器の開発、果てには本家には劣るものの優との戦闘で蓄積したデータから他の組織もA・Mスーツの開発に成功するなどアーカム製A・Mスーツの優位性が大きく揺らいでいる。このためアーカム製A・Mスーツを持つてしても決して安心はできない状況になっているのだ。

(周りを引っぺがして依り代をぶっ壊す！)

依り代がどんな物かまではわからないが、少なくとも手で掴める程度のサイズであろう事は悪霊の大きさから推測できる。なので優は悪霊のスライム状の身体を蹴散らし、依り代を破壊して悪霊の本体が飛び出したところをある方法で倒そうと考えた。

「!!」

「おっとー!」

50歳を越えてもなお世界で五指に入る程の腕前だったボーマンの迅速・正確・変幻自在なナイフ捌きに比べれば、大抵の攻撃は兎戯のようなものだ。

優は槍のように伸ばしてきた触手の連撃をスウエーとダツキングで次々と回避しながら接近すると、あっという間に悪霊の数メートル手前まで到達。

「そらよー!」

「!!」

あらかじめ用意しておいた手榴弾を放り投げ、着弾と同時に完璧なタイミングで爆発させた。

(よしー!)

爆音と共に四散する白濁色のスライム。身体が大部分が吹き飛び、中から菱形の青い宝石が現れる。

「スラッシュキーーーーーック!!」

A・Mスーツの力により人間を遥かに超えた加速力・跳躍力で飛び出した優は、人間では決してあり得ない大ジャンプで青い宝石を飛び蹴りでスライム状の身体ごと蹴り抜いた。

なお優のこの攻撃は、彼が好きな格闘ゲームのキャラの技を名前もそのままに真似たものである。

「なにっ!？」

そう、確かに優は蹴り抜いた。それも宝石は疎か巨岩を砕く破壊力のキックでだ。だが宝石は砕けることなくスライム状の身体を突き抜け、斜め上に飛び出していったのだ。

(爆発で依り代の宝石が完全に露出するくらい挟られたつてのにヒビ一つ入ってねえから変だとは思ったが…)

つまりこの宝石は優の力では破壊が不可能ということだ。

(こくなつたら一か八か、直接サイコ…ぐっ!)

あれこれ考えているうちに宝石から伸びたスライム状の触手が飛び散った毛玉を集め始め、瞬く間に元の身体を形成していった。

「なっ…」

「ガアツ!!」

呆気にとられているのも束の間、形成の完了した悪霊は先ほどの触手攻撃より遥かに速い体当たりで優を襲う。

「がはあッー」

ボーマンに負わされた傷の痛みと悪霊の予想外の攻撃に反応の遅れた優はそれを回避できず、に直撃を受けてしまった。蹴られたサッカーボールのように吹っ飛び地面を跳ねながら転がっていく優は、20メートルほど吹き飛んだところでようやく動きを止める。

(油断…したぜ…。これじゃあ…スーツはともかく…生身がもたねえ…)

体当たりは幸い頭部には当たらなかったものの、吹っ飛ばされている最中に何度か地面に打ち付けており、深刻なダメージを負っていた。更にボーマンとの戦いで負った傷からの出血が体力を奪っていく。

(でも…)

それでも優は諦めない。諦めるわけにはいかない。

(オレは…守りたいものが…帰る場所が…あるんだ…)

だから優は立ち上がる。立ち上がる姿は生まれたての子鹿のように弱々しく、しかしその目は飢えた虎の如く鋭く。

「だからオレは!!」

だから優は戦える。どんな敵にも立ち向えるのだ。

「ガアアアア!!」

「ちいっ……いっ！」

悪霊が繰り出すのは単純な刺突連撃。傍目から見れば手数が多い事を除けば先ほどと変わらない、実に安直な攻撃だ。

先ほどの攻撃を回避できる者ならばまず当たる事はないだろう。では優本人から見てもそれは同じだろうか？

「アアアアアア!!」

「くっ……いっ！」

答えは否。優の身体は頭部へのダメージと出血によって既に限界が近かったからだ。刺突は次第に優の肩・腕・頭部を掠めていき、やがて次々と身体の芯を捉え始めた。

「アアアアアア!!」

「ぐううっ……!!」

こうなってしまうてはただの走るサンドバッグ。優は覚悟を決めて両腕で頭部を防御しながらひたすらに突き進んだ。

「!?」

嵐が去ったかのように刺突の雨が止み、困惑と同時に過る悪寒。両腕のガードを解いて身を翻そうとした瞬間……

「ガアッ!!」

「うわっ！」

優の目を通り過ぎ、胸を掠めて横切る黒い塊。その直後、背後数メートル先の地面が爆発したかのように飛び散り、冷や汗をかく。

(あ、危なかった……。でもこれで！)

何たる僥倖。攻守逆転、千載一遇のチャンスが訪れた。悪霊は地面に深く突き刺さってしまったため、地面から出るのに時間がかかりそうだ。

「ブオアアア!!」

悪霊が地面を抜けるまでに3秒。

「オラア!!」

悪霊が空中に飛び出すまでに1秒。

「オオオオ!!」

悪霊が優を発見して触手で刺突を繰り返すまでに1秒。

「時間だ」

「!？」

いつの間にか悪霊にくっついていた金属球が、懐で耳を劈く音と共に衝撃波と鉄片を撒き散らす。飛び散るものが家屋に穴を開け、コンクリートの壁を穿ち、アスファルトを抉り、送電線を断ち切る。

「やつと…お出ましたな…」

スライムが跡形もなく飛び散ると、青い宝石だけが怪しげな輝きを放ちながら宙に漂っていた。

「じゃあ…オレのスーパーサイコブローで…!」

だが青い宝石は即座にスライムを集め始める。

「ケリをつけてやる!!」

優はそれを睨みつつ両掌から光の靄を出し、両掌を合わせてから抱えるように開くと、光の靄が両掌を合わせた分の数倍に膨張する。

これが、装着者の精神波を増幅し、手の平に集めて撃ち出すA・Mスーツの機能の一つ「サイコブロー」…その強化版である。

「くらいやがれえええ!!」

優は先ほどの跳躍に負けない程の勢いで飛び出し、両腕を振りかぶってそれを宝石に叩き付けた。

「ヴオオオオオオオ!!」

悪霊のエネルギーとの反発力で優は浮き上がり、同時に宝石の中から悪霊の顔が飛び出して怖気の走る阿鼻叫喚の様相を呈する。

「オオオオオオ……」

「……………」

間もなく反発力に負けた優は弾き飛ばされるが、悪霊は次第に声が掠れ文字通り霧散していく。やがて悪霊が完全に消滅すると宝石は輝きを失い、静かに地面へ落下。

（今の…叫びは……）

後から落下した優はサイコブローによって気力を使い果たし、遠の

く意識の中で受け身も取れずに背中から地面に激突。同時に頭部を強打してそのまま意識を失ってしまうのだった。

妖精との出会いなの

「……………」

閉じた瞼に光が差し込んで眩しさを感じ、手で目元に影を作りながらゆっくりと目を開く。

上に天井が見えるということはここは屋内という事だ。外ではスズメが鳴いており、今は早朝であることが伺える。肝心の自分はどうと、A・Mスーツと各種武装がどこへ消えたのか頭と身体には包帯が巻かれ、和式の寝具一式に包まれて眠っていたらしい。

またしても気絶中に移動していたことを情けなく思いながらも、ここがどこなのかを調べるために起き上がろうと上半身を半分ほど起こした時、腹部に妙な重みを感じた。何が自分の腹の上に乗っているのかと視線を向けると……

（誰だこいつ…）

「ん……………」

そこには茶髪ツインテールの女の子が顔を伏せて眠っていた。

「あ、おはようござ……………じゃなくてよかった！目を覚ましたんですね！おとうさーん！あの人が起きたよー！」

（あ、こいつ昨日悪霊に襲われてた…）

枕代わりになっていた場所が傾いたことで目が覚めた女の子は飛び跳ねるかの如く起き上がり、父へ報告しに部屋を飛び出していく。

「おはよう、怪我の具合は悪くなさそうだな。話はなのはに聞いたよ。暴漢からなのはを助けてくれたんだってね。で、キミを心配したなのはがその場所に戻ったらキミが倒れていたそうだ」

「は、はあ…。（あいつ、そういうことにしたのか。まあ、その方がこっちとしても手間にならなくていいけどな）」

「だったらしっかり食べて早く治さないとさあ、食べてくれ！」

再び部屋へ戻ってきた女の子に無理矢理引っ張られて案内された

のは食事の並べられた食卓。どうやらこの家族の父親らしき人物に朝食を勧められているようだ。

「んー、今朝も美味しいな……。特にこのスクランブルエッグが！」

その人物の名は高町士郎。とは言っても「らしき」ではなくて歴とした父親であるが。

「ほんとー？トッピングのトマトとチーズとそれからバジルが隠し味なの♪」

士郎の妻である桃子。元々美人であるが、とても幸せそうな笑顔がその美貌を一層引き立てている。

「みんなアレだぞ〜！こんな料理上手なおかーさんを持って幸せだぞ〜！」

「あーん☆も〜やだあなたたつたら〜！」

満面の笑みでスクランブルエッグを食べながら桃子をベタ褒めする士郎の姿は、見ていると胸焼けしそうなほどの惚気のろけっぷりだ。

「もー、わかっているよー。ねーなのは」

「うん！おねえちゃん！」

「飽きないよなー、このやり取り」

その夫婦の子供である3人の人物。上から長男で大学一年生の恭也、長女で高校二年生の美由希、そして一晩中付きっ切りで優を看病していた（と言っても途中で寝てしまったが）のが末っ子で小学三年生のなのはだそうだ。

「おとーさん、こぼしたわよ」

「おおーさすがおかーさん、気が効くなあ！みんなアレだぞ〜！こんな気の利くおかーさんを持って幸せだぞ〜！」

「あ、これは新パターンだね。言っていることはほとんど変わらないけど」

（この夫婦、新婚……じゃねえんだよな？）

もちろんその通り。長男の恭也が現在19歳なので19年はこんな状態だということになる。優は「いったいどうすればこんな長期に渡って新婚気分を維持できるんだ？」とちよつと真剣に悩んだ。

「そこでだ！キミにも……えーとまだ名前を聞いてなかったな。す

まない、教えてもらえるかな?」

「御神苗 優…です」

「よし!で、御神苗くんにもそんな幸せをおすそ分けしようという訳だ!ってわけでどんどん食べてくれよ!」

「は、はい…」

本当はあまり食が進まない優だったが、士郎の押しに負けて渋々食べ始める。

「いやあ、いい食べっぷりだ。かなりおなかが減ってたみたいだね」

「まあ…そうですね」

ここで優は再び幽霊島のことを思い出す。

アーカム日本支部を出た時は午前中で昼食も取っておらず、それから幽霊島で爆弾を爆発させるまでの時間でも暗くはなっていないかった(もつとも幽霊島周辺は幽霊島のエネルギーの影響で曇天ではあったが)。

もし仮に長時間海を漂っていた場合、気絶しながら何日も生きていられるなどあり得ない。なので恐らくは幽霊島の爆発で吹き飛ばされて気絶してから間も無く誰かに拾われてその日のうちにここに来たと考えるのが自然だ………とりたいところだが、それだと誰かに拾われたのに道路で倒れていた理由の説明がつかない。

ここにいた理由については推測すらできないが、腹の減り具合を考えると少なくともあの爆発から長くとも1日程度であろうという結論は出せる。要するに優は前日の昼食から何も口にしていなかった訳だ。腹が減るのも当然である。

「ごちそうさまでした」

士郎の言う通りスクランブルエッグが思いの外美味く、気付いたらライスのおかわりもして満腹になるまで食べてしまった。

「わたしの料理をこんなに食べてくるなんてうれしいわ!ありがとうね、御神苗くん!」

「い、いえ…オレの方こそ…。(芳乃……。あいつもどつかでメシ食ってるかな……)」

食事を終えて一息吐くと一人の少女の事が頭を過っていった。

「よし、彼も元気なことだし心配もなくなったな。じゃあなのはは学校……」

「お、お父さん……それなんだけど……」

「ん？どうした？」

全員の食事が終わり、食卓を片付け終わるとなのはがモジモジしながら士郎に何か言いたげにしていた。たつぷり30秒ほどかけてやつの思いでなのはが言い出したのは……

「わたし、今日は休ませてほしいの……」

「……なのは、気持ちはわかるけど学業をおろそかにしちゃ……」

士郎は察した。前日なのはに事のあらましを聞き、優が暴漢から助けてくれた恩人であるらしいということは分かっていた。

なのはは優しい子であると同時に頑固なまでに一途に思いを貫くという意志の強い子でもある。故になのは優にその恩を返そうとしているのだと気付いたのだ。だが……

「でも！わたしまだおみなえさんになんにもお礼してないし……！」

「それはまた別の話……」

「おみなえさんはわたしの恩人なの！」

「うー……」

（オレのために……学校を……！）

娘を休ませたくない父、恩人に恩を返したくて涙ぐんで必死に訴える娘。

学校生活を何よりも大切に行っている優は、なのはの優しさに感謝すると同時に申し訳なさで胸を痛めた。

「で、でもオレは知り合いに連絡すればすぐ迎……」

「おみなえさんは黙ってて！」

「ぐっ……」

なのはを休ませる訳にはいかないと考えた優は直ぐにこの家を出ようとしたが、なのはのあまりの迫力に思わず声を詰まらせてしまう。

「お父さん、お願い！」

「うーん……………」

(さ、さっきの瞬間……いつの顔が秋葉ねーちゃんとダブったぜ……)

士郎が困り果てた顔で呻きながら答えあぐねていると、そこへ助け船が現れる。

「そうねえ。このままじゃ学校に言っても御神苗くんの事が気になつて授業にも集中できないんじゃないかしら」

「それにそんな状態で街中を歩いたら危なそうだし……………」

「なのはがこんな真剣に頼み事するなんて珍しいし……………。一度くらいなら許してあげてもいいと思うけどな、俺は」

「お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん……………」

助け船は士郎ではなくなのはの方であつた。如何に一家の大黒柱といえど、家族にとことん甘い上に家族全員の意見が一致してしまつてはもう反論の余地はない。

「はあ……………」

士郎は深いため息をついてから顔を上げ……

「仕方ないな。わかつた、学校には風邪で休むって伝えておこう」

「お父さん……………ありがとう！」

「でもこういうことはこれっきりだ。いいね？」

「はい！」

涙を拭いて元気いっぱいに返事をするなのは。満開の花が咲いたような可愛らしいなのはの笑顔を見た士郎はこの判断に僅かながら後悔しつつも、「この笑顔が見られたならこれは間違いじゃない」と彼もまた笑みを浮かべるのだった。

「それじゃあなのは、御神苗くんの寝ていた部屋を片付けてきてくれ。母さんは来客用の寝室の用意を頼む」

「はい！じゃあ片付けてくるね！」

「わかったわ。じゃあお店は午後からにしましょう」

「え!?で、でも何日も世話になるわけにはいかか…」

「怪我人を放り出すわけにはいかないよ」

「どうか…どうかお礼させてください！」

「そうそう、だから遠慮しなくていいのよ」

「……………」

果たして1日で済むのか、それとも数日かかるのか。こうして優は高町家の世話になるはめになった。

そうと決まれば行動の早い高町家。恭也と美由希は学校、なのはは優の寝床、桃子は新たな寝室を片付けるために足早に駆け出していた。

先程の賑やかさが嘘のように静まり返る。優はその静寂に、祭りが終わった後のような寂しさを感じた。

優と士郎以外に誰もいなくなったりリビングルームで、士郎が徐に口を開く。

「さて、少し暇になったな。御神苗くん、少し2人きりで話をしようか」

(……………ん?)

人は嘘をつく時、無意識に特定の言動を行ってしまう癖が存在する。

殆どの人は自身でそれに気付けるケースは少なく、気付くのは他人である事が殆どだ。

もし仮に自分の癖が判明しそれを隠すための言動を行おうとしても、それがかえって不自然さを生み出し、結果的に嘘である事を露呈

させてしまう場合がある。

それを見破るのは相手の出した様々なサインから心を読む心理学の基本の1つであるが、そのような知識が無くともそれらのサインに「なんとなくおかしい」で気付いてしまう者も存在する。

優はそんな勘のいい人間であった。

「場所を変えようか。ついて来てくれ」

「……はい」

にこやかに言葉を発する土郎。だが優はそれに違和感を感じていた。

笑顔自体は先程となんら変わりはない。口調も非常に落ち着いている。

しかしその表情は取って外せてしまえる仮面のような無機質さを感じた。

その言葉は相手を誘うような…目的のために本心を抑えているような、そんな誘い文句に聞こえた。

そして気配の感知に長けた優が一瞬だけ感じたのは……

「うちは朝から賑やかだろう？毎朝こうなわけじゃないんだけどね。こういうのは独り身じゃわからない幸せだよ」

「……」

無言で土郎について行く優と、優の顔を見る事なくひたすら前を歩きながら喋り続ける土郎。

先ほどまで家族と楽しく会話していたとは思えない程に無機質で一方的なトークだ。

「俺は家族を心から愛してるんだ。だから俺はたとえちっぽけでもこの幸せな時間を守りたい」

「……」

歩きながら、会話とは言えない一方的なトークは続く。

「そのためなら俺はなんでもやるつもりだ。そう……なんでもだ」

「……」

会話が終わると土郎も無言になって完全な沈黙が訪れ、声の響かない廊下には床の軋む音だけが鳴り響く。

「着いたよ」

「……………」

案内された場所は剣道場。ここは毎朝恭也と美由希が稽古している場所だ。

士郎はそのまま中へ入り、優もそれについて行く。

そして道場の中心に辿り着くと士郎は足を止め、爽やかな笑顔で優へ振り返る。

「ああそうだ、君に質問したい事があったんだ」

「あ、はい」

またしても仮面のような笑顔だ。

その不気味な表情に少しだけ不快感を感じたが、あえて受け流すことにした。

「一つだけ質問してもいいかな？」

「まあ、答えられる事な……………!?!」

優が返事という言葉を紡ごうとした瞬間、優に心臓を射抜くような殺気が浴びせられ、同時に優の身体を二つの光が通過した。

あ、あんた……！」

「ほう、軽く肌を撫でてあげようと思ったんだが……」

優は咄嗟に身を引いて直撃を避け、犠牲は寝間着だけで事なきを得る。

「これのどこが質問だ！」

「これは心外だな。俺は『言葉で質問する』とは言っていないよ」

「屁理屈ぬかしてんじゃねえ！しかも殺気が溢れまくってて完全に殺す気だろ！」

「なんとでも言うがいい」

士郎はいつの間にか両手に抜き身の小太刀を携えており、その切っ先を優へ向けながら表情を消し去り淡々と言葉を発する。

「だがお前は俺の質問に答えてくれた」

「……？」

「俺の先制攻撃を……それも完全に虚を突いた攻撃を最小限の動きで完璧に躲した。それが答えだ。それでお前のがよく分かったよ」

「……なるほどね」

食卓で話していた時に感じた気配の正体はこの殺気だったのだ。

優の目の前には、一家の団欒を心から楽しむもう男はいない。溢れ出す殺気、敵意に満ちた目、そしてあまりにも堂に入った自然で隙のない構え。

今ここにいる男は戦う術を……人を殺す術を心得ている一人の剣士だ。

優は士郎の豹変に戸惑いながらも拳を構えて戦闘態勢に入る。

「昨晚、気絶していたお前をなのはが運んできた。もしお前がただの一般人ならなのはを無理矢理学校へ行かせずにすんなりと休ませるつもりだった……」

「……………」

廊下を歩いていた時と同じだ。士郎は優に意見を求める事なく、構えを維持したまま一方的な話を展開する。

「だがお前のあの装備はなんだ？見た事もない防護服、ナイフに拳銃にライフルに手榴弾だぞ？どこの戦地へ赴くつもりだったんだ？いや、使用した形跡があるということは戦地帰りか。」

最初に対処したのが俺でよかったよ。なのははお前を運ぶのに必死だったからそれを気にする余裕がなかったようだし、家族のみんなに見られる前に全部隠せたのは幸いだった」

「……………」

しかし士郎の話す内容には一箇所だけ誤りがある。

なのはは優が拳銃を使用する場面を目撃しており、はつきりと認識もしている。

加えてその場面は一般人なら一生のうちに何度も見られない衝撃的な体験だ。記憶喪失にでもならない限りはそうそう忘れられるものではない。

つまりなのははそれを士郎に伝えておらず、また同時に士郎がそれを隠したことも分かっているということになる。

「だがその中でも特にナイフは大きさの割に異様な軽さだったからコンクリートブロックで試し切りしてみたら、まるで豆腐のようになんかの抵抗もなく真つ二つだ。こんなナイフは世界中探してもそうそうあるものじゃない。その道のプロが使う物でも最高級と言つていいレベルだ。それに……………」

「……………」

急に話が止まった士郎の両手に力が入り、力みのあまり手が震え出す。士郎はそれを抑え、誤魔化すかのように声を発する。

「お前からは死臭が漂っている……………」

「!?」

優が士郎の言葉に一瞬の動揺を見せた瞬間、再び士郎の小太刀が優を襲い始めた。

「だから俺はお前を家族から遠ざけたかった！だがなのははお前が心配で片時も離れなかったんだ！」

どうせなのはを助けたというのも大方同業の相手と戦っている最中に偶然なのはが居合わせて逃げられただけだろう！

お前の背中の長い傷は間違いなく暴漢に付けられた傷ではない、お前のナイフと同等の刃物の傷！他の傷痕も全て銃創と鋭利な刃物によるものだ！もしその身体を病院で見せれば間違いなく警察沙汰になり厄介なことが起こる！

そして俺の経験と勘がお前は間違いなく夥しい数の人間を殺していると呼んでいる！だから俺はお前がいつ目覚めていつ本性を現しても対処できるように一晩中近くで監視していたよー」

（なんでオレを病院に連れてかなかったのかと思ったらそういうことか……！）

巢を突かれた蜂の群れの如く四方八方から絶え間なく襲い掛かる刃。

「だがそれでも不安は消えなかった！なのはが危険な目に合わないか気が感じやなかった！この気持ちがお前にわかるか!!」

「……………」

優は怪我のせいで思うように身体が動かず、上半身の動きだけでは躲し切れなくなつてバックステップで距離を取る。

「今朝もそうだ！本当は家族が揃う場所にお前を招き入れたくなかった！

だがなのはがなんの躊躇も笑顔で無くお前を連れて来たのを見て少しだけ気を緩めてしまったんだ！

その後心底後悔したよ！お前のような殺人者に一瞬でも気を緩めた自分が許せなかった！」

「て、てめえ……！」

斬撃が突きに変化すると刹那の踏み込みによる槍のような突きが飛んでくる。

「だから俺は決めた！お前が家庭を壊す前にお前を始末すると！」

「なに!？」

圧倒的な手数で反撃の隙を与えず、更に寸止め・視線・筋肉の動き・呼吸とあらゆる技術までも駆使したフェイントで優を幻惑し、徐々に壁際へ追い詰めていく。

「俺の幸せを壊すな！」

「くっ……！」

「攻撃は最大の防御」という言葉を聞いた事があるだろうか。

簡単に説明すると「相手に攻撃している間は相手から攻撃されない
ので防御しているのと同じ」という意味だ。

言葉だけを見ると簡単な事のように思えるが、実際にはそんなに簡単に成立するものではない。これが成立するのは「相手に反撃の隙を与えない攻撃を絶え間無く続ける」場合のみだ。

士郎の小太刀による怒涛の連撃はその条件を満たしていた……と思われたが、実は今の士郎は優を倒そうと逸る余りに重大なミスをして
していたのだ。

「この殺人者め！」

「それは……！」

それは士郎がとどめの一撃を放った時だった。

「てめーもだろ!!」

「!？」

刹那、士郎の見ていた世界が回転した。

「……………」

「何故だ…」

命懸けの戦闘中に於いて相手の姿を見失う事は、相手に一方的な攻撃を行なうチャンスを与えてしまう致命的ミスの一つだ。

だから士郎は常に優を視界に捉え、見逃さなかった……………答なのに優は視界から消えた。

「……………」

「お前は…殺人者だ」

人間は感情的になり過ぎると無意識の内に単調な行動を取りやすくなってしまうが、これは今の士郎にも当てはまる。

士郎は相手を見失わず、且つ相手の行動を予測しやすいように常に相手の全身を視界に捉えていた。だが、気が逸るあまりにたった一回、たった一瞬だけ次の攻撃を打ち込む場所である頭部に視線を集中させてしまい、その一瞬で優は幻のように消え去ってしまったのだ。

士郎は動揺のあまり一瞬大きく目を見開いたが、視界から消えた優を視線で探す間もなく両足よの足下に横薙ぎの衝撃が走り、視界が回転。

地面が背中を、腕を、頭を強く叩いて身体を自由を奪い、あまりの衝撃に息が詰まって苦悶の表情を浮かべる。柔道の背負い投げを、受け身も取れずまともに喰らうのと同様かそれを上回るダメージだ。

士郎はそんなダメージにも負けずに直ぐ様起き上がろうとしたが、勝敗は既に決していた。上半身を起こそうとしていた士郎の顔面に優の拳が打ち下ろされていたのだ。だが……

「なのに何故そのまま俺の顔を殴らなかつた？その拳速の下段突きなら俺の顔面くらい簡単に潰せたはずだ」

「……………」

優の拳は士郎の眼前数cm手前で止まっていた。

「俺はお前を…………斬ろうとしていたんだぞ」

「オレは突発的に人を殺すほどあぶねー奴じゃねえよ」

「それでもだ。殺さずともお前ほどの腕なら気絶させることもできたろう」

「あー……。そうだな……………」

優は拳を引き、士郎へ手を差し伸べる。士郎も優に敵意が無いと確認するとその手を取り、ゆっくりと立ち上がった。

「オレもあんたのことが少し分かったから、かな」

「…?」

あまりにも予想外な返答。

士郎は「つい先程まで自分の命を狙っていた相手を許せるだけの理由をどうやって見出したというのか」という疑問が頭の中を駆け巡った。

「……………よければその分かったことを聞かせてくれるか?」

「あんたはオレとちよつと似てる…って思ったんだ」

「似てる……………」

またしても意外な話。自分との共通点と言えば性別くらいしか思い浮かばなかった士郎は俄然興味が湧いて耳を傾けるが…

「あんたのその技…ただの剣術じゃねえ、人を殺すための技術だよな?」

「……………否定はしない」

「…見た通りオレの技も同じでさ、今はそれを隠して高校生生活送ってるんだ」

「高校!?あの腕前で高校生だ?!見た目が若いだけじゃなかったのか?!」

優の強さと見た目通りの若さに動揺を隠せない士郎であった。

「あ、ああ。まあ、こんな技術を持つてる奴が高校生のガキってんじや驚くのも無理ねーか。」

でもあんたの技、実はつい最近同じような技を使う奴と戦ったからなんとか見切れたんだ」

(似たものを見ただけで即座に見切れるほど御神流は簡単なものではない!)

20歳にも満たない年齢でこれ程の実力を身に付けるとなれば、ど

れだけ才能があろうとそれまでの人生の大半を修練と実戦に費やさなければ不可能だ……！こいつ、本当に俺と似て……いや、潜在能力は俺より……！）」

士郎は若い頃に自分の修める剣術において天賦の才を発揮していた事があった。その剣術の奥義を会得した彼は歴代でもトップクラスの継承者となったが、ある仕事で瀕死の重傷と生涯癒えぬ傷を負った事で思うように身体を動かせなくなり、その故あって現在はその仕事を引退して静かに喫茶店を経営している。

そんな今の彼は家族に隠れて密かに訓練しているものの、肉体は長時間全力を出すと古傷が悪化してしまうため、全力では数分しか動けない状態だ。この傷により行える肉体の鍛錬は限られてしまうので、身体能力を仕事前並みに戻すのは事実上不可能だった。

だが身体能力こそ衰えているもののその、不足分は技術の精練で充分過ぎる程に補っており、技術に限れば常に全盛期を更新し続けていると言っても過言ではない程に日々研ぎ澄まされ鍛え上げられている。

それ故に士郎は今の自分の技術に絶対の自信を持っており、全力の数分間なら肉体の全盛期だった頃にすら勝るとの自負があった。

ところが目の前にいる高校生の少年はそんな自分の不意打ちを完璧に見切って回避し、感情的になつて思考も行動も単調になつていたとはいえ自分の連撃を躲し続け、たった一瞬の隙を突いて完全に姿を見失う程の観察力・判断力・瞬発力を見せ、屈むと同時の足払いから喰らえば死は免れなかったであろう下段突きまで淀みも無駄も無い、最短にして最善の手で士郎を仕留めたのだ。

それも重傷を負った身でありながらだ。

「とにかくだ。オレも学校と仕事があるし、これ以上あんた達に迷惑はかけたくなえ。オレの持ち物を返してくれたら今すぐにも出ていくよ。オレとしても早く学校に戻りてえしな」

「仕事……やはりその技術を活かした仕事か？」

「ああ、もちろん命懸けだしいいことばかりじゃねえけど……ゾクゾクするような未知の世界に出会える仕事だ。学校にはなるべく通

「いたいけどこればっかりはやめられねえ」

「……………」

「あ、そうだ。なのはって子には『わざわざ学校休ませちまってごめん』って言っといてくれ。本当にすまねえ、ってな……………」

もし仮に自分が今の技術を持ったまま全盛期の肉体に戻ったとしても、体調が万全かつフル装備の優に勝てるビジョンが見えないほどの戦闘能力を士郎は感じていた。

「それとも今携帯持ってるなら貸してくれねえか？ちよつと知り合いに連絡してえんだ」

「……………」

そして同時に気付いてしまった。

（その領域に至るためにこいつは青春時代の多くを犠牲にしてしまったのだらう。それも本人の望まない形でだ。だからこそ理想の仕事を持っているにもかかわらず学校生活にこれ程強くこだわっているのか……）

「……………聞いているか？」

「す、すまん。お前がそう望むならいいだろう。なのはには俺から謝っておく。荷物は今持ってくるからここで待っていてくれ」

「ああ、助かる」

今なら士郎にも分かる。

彼は本当に自分たちに迷惑をかけたくないのだ。それに高校生活を謳歌したいというのも本音なのだろう。なのはに対する謝罪の言葉からもそれがひしひしと伝わってくる。

それを察した士郎は残っていたわだかま蟠りも雲散霧消し、先刻の自分の振る舞いを恥じつつも敬意を払って送り出す事を決意する。

「あ、そうだ。もう一回言うけど携帯持ってたら貸してくれねえか？知り合いに連絡してえんだ」

「それは構わんが壊すなよ」

「へっ、誰が壊すかよ」

そして冗談も交えた言葉を交わし、ここに年齢・立場を超えた友情が生まれるのだった。

「俺だ、入るぞ」

優の荷物を取りに道場を出て数分後、道場の戸を開けて大声で入っていく士郎。

本来ならば必要はない話ではあるが、もし仮に他の家族に優を見られたら余計な詮索をされてしまう可能性が高いため、優には更衣室でこつそりと電話を使わせている。特に優に特別恩義を感じている（上に自分の姉の秋葉並みのプレッシャーを放つ）なのはにばれたら、下手をすれば帰れなくなるかもしれない。

もつとも、素直に（もちろん殺人術のことは伏せて）事情を話せばなのも納得してくれる可能性はあるかもしれないが、高校生がそんな重装備で戦っているのかと問われたら答えようがないだろうと士郎は考え、できるだけそういう事態は避けるべきであるとしての処置だった。

「なんでだよー！」
「!?!」

道場に響き渡る優の怒声。士郎はそれに驚き、何が起こったのか分からずに更衣室の前で立ち尽くしてしまう。

「あ…わりい」

「いや、いい。それよりそんなに感情的になってどうした？」

「……………」

士郎が質問するが優は項垂れて黙り込んでしまう。

「……………」

「黙っていても何もわからん。理由を話してくれ」

「……………」
「……………」
「……………」

士郎に促されると、は項垂れたままの優がゆっくりと口を開く。

「アーカム財団…って知ってるか？」

「アーカム財団…聞かない名前だな。何の事業をやっているんだ？」

「…当たり前、か…。」

「答えになってないぞ。俺の話聞いていたか？」

「いや…もう充分だ…」

(なんだ? ずいぶんとショックを受けてい…)

士郎がその様子を不思議がると優の目から光が消え、続けて糸が切れるように首を落とした直後、突然膝が崩れ落ちる。

一体優に何があつたのか? それを繙ひもとくために士郎が優の荷物を取りに行つた時から現在に至るまでの優の状況を見てみよう。

優はよく使う電話番号を幾つも頭で記憶しており、メモなどが無くとも間違えること無く即座に電話をかける事ができる。

なので優は士郎が道場を出た直後に先ず直属の上司である山本の携帯電話へ直接連絡してみたが、その電話番号は現在使われていないとのアナウンスで突き返されてしまった。最初は珍しくかけ間違えかと思つて再びかけ直したがやはり繋がらず、その後数回試したが結局繋がることはなかった。

続いてアーカム財団日本支部へかけてみたが結果は同じ。姉の秋葉へかけても仕事仲間へかけても友人へかけても自宅へかけても全てが同じ結果となり、アーカム財団の電話番号を調べてもアーカム財団の存在自体の情報すら見つからなかった為優は取り乱してしまった。

そこへ士郎が戻つて来た事に気付くと幾分か平静を取り戻してある一つの仮説を立てた。その仮説は間違いだったならよし、もし正しければ優の力だけではどうにもならない最悪の事態となる。

そこで優は仮説を検証すべく、タイミング良く戻つて来た士郎へある質問をぶつけた。

「アーカム財団って知ってるか?」

アーカム財団とは世界最大の財団で、世界各地に考古学研究所を設立して遺跡の発掘・保護を行なうことで有名だが、他にも様々な事業を世界中で展開しているため、物心の芽生えた年齢ならばこの世でその名を知らない者の方が少ないと断言できる程に名を馳せているのだ。

そのアーカムを知っているならばそれでよしとして次の質問をすすつもりだった。だが、最初の質問で答えが出ってしまったのだ。

この世でその名を知らない方がおかしいくらいの名をいい年齢の大人が知らず、アーカムの情報も存在しない。だが悪霊との戦いで頭を打ったとはいえ前後の記憶はつきりしているし、記憶の混濁もなく、自分の装備品がアーカムの存在を如実に表している。

ならばここは何処なのか？

「場所は紛れもなく日本」「有って当たり前前、知っていて当たり前名を知らず、情報の痕跡すら存在しない」「なのに自分の記憶には確実に存在し、更に存在の物的証拠として自分の精神感応金属製の装備品がある」

ここは自分の知る日本でありながらも、有るべきもの……無くてはならないものが無く、自分の記憶の中にしか存在しないが物的証拠も存在する。

類似……否、酷似していながらも矛盾を起こしたこの世界は……

「お、おい！大丈夫か!？」

士郎は慌てて優を支えるが、肝心の優は自力で立とうともせず士郎にもたれ掛かっている。

「ははっ……。帰る場所……なくなっちゃった……」

「帰る場所が?どういうことだ?」

「多分……言っても誰も信じねえよ……」

「……………」

優は士郎の耳元で力無くそう呟いた。

「何があつたのか教えてくれ……と言っても今は無理なようだな」
「……すまねえ……」

優は座り込んだままそれ以上喋ろうとはしなかったが、沈黙を良しとしない士郎は再び話を切り出す。

「事情はよくわからんが…要は帰るべき場所へ、今は帰ることができないということだな？」

「……ああ」

「よし、だったら当初の予定通りうちに泊まれ」

「え？でもこれ以上あんたに迷惑は……」

「お前が危険人物ではないとわかった以上、お前はただの客人だ。

それに俺達を気遣うと言うならむしろ居てくれないと困るぞ。なのはが悲しむからな」

「………恩に着るぜ」

こうして優は高町家にしばらくの間居候する事となった。

「なかなかやるじゃねえかなのは！」

「おみなえさんこそ！」

ぶつかり合う拳、鳴動する大地、吹き荒ぶ風。

優となのはは死力を尽くした激闘を繰り広げていた。

「今だ!!」

「ああっ!!」

なのはの一瞬の油断。優はその一瞬を見逃さなかった。

振り上げられた腕によって生み出された破壊の竜巻が人間を天高く巻き上げて

その意識を刈り取ると、周りの景色が光に飲み込まれていった。

「……………」

「……………」

「勝利者はいつもこの俺！ジョー東様よ！」

「あー！また負けたあ！あと天地返し1発ぶんだったのにー！」

「あたりめえよ！お前とは年季が違うんだよ！焦って見え見えのスカシ投げなんて狙うからそうなるんだ！」

「おみなえさん強すぎだよー！」

「へへっ、こう見えても仲間内じゃイチバン強えからな！」

勝利の余韻に酔いしれる優、そして敗北の悔しさに頬を膨れさせるのは。

二人はテレビゲームで対戦していたのだ。

「うーうー…。このチームならけっこう自信あったのに…」

「ほほーう、もしかして確定地雷震を使えない大門じゃ厳しかったかあ？」

「そんなのなくても勝てるもん！…てゆうかそれわたしが生まれる前の話じゃないですか！」

「俺も98無印はリアルタイムでやってたわけじゃねーけどな。はははは！」

二人が遊んでいたゲームはSNKプレイモアの「ザ・キング・オブ・ファイターズ」シリーズの一作である「ザ・キング・オブ・ファイターズ'98 アルティメットマッチ」：通称「98UM」。

かの有名な格闘ゲーム：CAPCOMの「ストリートファイター」シリーズと並ぶ格闘ゲーム二大巨頭の片割れである。

この格闘ゲームは同社の様々なゲームのキャラが一同に会し、その中から使用キャラを3人選んで3対3の勝ち抜き戦を行う形式で、同シリーズの中でも最高傑作と名高い「ザ・キング・オブ・ファイターズ98」：通称「98無印」を、稼働10周年を記念してリメイクした作品だ。

新キャラ・新技・新システム・その他膨大なバランス調整が施されたこの作品は、無印と同様ファンに長く愛されている大作となっている。

「もうーいじわるなんだから！」

「わりいわりい。でもお前ホントに強いからついジョーを使っちゃったんだよ」

「ほ、ほめたってわたしの機嫌は治りませんよ…」

そんな事を言いながらなのは顔は赤くして、優から顔を逸らす。

「こいつチョロいな」とか言っちゃいけません。

「しっかし、大門・クラーク・裏社か。パワフルすぎておつかねえ組み合わせだぜ…。波に乗ったらゲージ要らずでも圧殺だもんな」

なのはのチームは豪快な投げ技による一撃の破壊力が売りのキャラを集めたチーム。しかも投げキャラにも関わらず打撃も強かったり、機動力が高かったりと他の強みも持っている手強いチームである。

その3人の中でなのはが得意としているのは大門五郎というキャラだ。

大門は平均的に高めな性能に加えて無印では「確定地雷震」と呼ばれるテクニクスの存在により最強キャラの座に君臨しており、98UMでは調整により確定地雷震が不可能になってランクは下がったが、他の強化調整が働いて相変わらず上位に座するキャラとなっている。ただしどのナンバリングタイトルでも連続技が他の投げキャラに比べて難しい傾向が強く、扱いが大変な玄人向けのキャラでもあるのだ。

「そういうおみなえさんは餓狼伝説チームなんですね。みんなけっこうスタンダードだから苦手なチームって少なそう。あんまり性能はよくないけど…」

「単純に餓狼伝説が好きってだけでそういうのを考えて選んだわけじゃねーけどな」

「でもその中でジョーが他の二人とはレベルがちがいますよね」

「ああ、ジョーは特に気に入ってるからな。思い入れも一入だ」

対して優のチームは兄のテリー・弟のアンディのボガード兄弟、そしてその友人であるジョー東と同じ作品の中のキャラをそのまま使ったチーム。

性能のバランス自体は悪くないものの、あまり強いとは言えない

キャラが集まっているという感じだ。

だがそこはキャラ愛でカバーする優。特に彼の愛するキャラであるジョー東はテリーとアンディを遥かに上回る強さを誇っている。

その強さたるやなのはが他二人を一番手のクラークで屠り去り、あとはジョーを三人で仕留めるという簡単なお仕事だったはずが、そのジョーだけで三人抜きの大逆転で返されてしまったほどだ。

「なんならクラークと大門抜いて庵とクラウザーでも入れるか？」

「そんな卑怯なことしませんよ！あーくやしいー!!」

優が今挙げた二人は98UMのキャラランクにおいて最上位を争う「二強」という、いわゆる「強キャラ」と呼ばれるキャラ達だ。

どれくらい強いのかというと、「(上級者が使えば)中級者以下が相手ならどちらか一人がいれば他のメンバーはいらない」とまで言われる程だ。

ちなみに優が入れ替えるキャラに裏社……正式名「乾いた大地の社」を挙げなかったのは、彼も二強に次ぐランクの強キャラであり、投げキャラの中では最強だったからである。

ただしなのは場合は裏社より大門の方が強いので、入れ替えるならクラークと裏社になる訳だが。

「あらあら。盛り上がってるわね、二人とも」

「あ、お母さん！ちょうど喉が渴いてたところだったから助かったよ！」

「あ、どうも」

二人は居間で対戦していた。ゲーム機本体とゲーム自体は恭也のものだが、優の暇潰しになればと気を利かせて居間に置いてくれたのだ。

そこへ更に気を利かせた桃子がジュースとお菓子を持って来た訳だ。しかもお菓子は手が汚れないように一枚ごとに包装されたクッキーという完璧なチョイスである。

ちなみに連続10回対戦した優の戦績は9勝1敗。なのはは2戦ごとにキャラを変え、9戦目でなのはが自身のベストチームである先述のチームを使って優のチームを破ってしまったため、優は封印して

いた餓狼伝説チーム…ひいてはジョー東の封印を解いたのだ。

「それにしても御神苗くん強いわねー。これでもなのはうちで二番目に強いだよ」

「二番目…っていうと一番は恭也さんですか？」

「そうそう。剣術の訓練の息抜きにちよつとやってみたらハマっちゃったらしくてね、地元ではちよつとした有名ゲーマーになったくらいよ。」

あ、でももちろん練習はしつかりやった上でよ」

「へえ…」

恭也は高町家初のゲーマーで、某格闘ゲームの祭典の98UM部門に参加する為の予選大会では、他のゲーマーを歯牙にもかけず圧倒的な実力で優勝した程の腕前だ。ただしその祭典は「時間が取れない」との理由で辞退してしまったそうなの。

「あ、そうだ！今晚にうちで98UM大会をやりましょう！」

「え？なのはと恭也さん以外もこれやってる人いるんですか？」

「お兄ちゃんに影響されて家族みんなねー。もちろん私もよ」

(家族全員で同じゲームやってるなんて珍しいな。それにしても……)

現在この日本では空前の格闘ゲームブームが訪れており、小学生から大人まで男女問わず幅広い世代が格闘ゲームを楽しんでいる時代だ。

格闘ゲームイベントも様々な形式で行われ、規模も各ゲームセンターでの小規模なものから大きい会場を借りて全国の猛者を集結させる大規模なものまで多種多様なものが催されている。その波に高町家で最初に乗ったのが恭也で、他の家族も恭也のハマりっぷりに興味を惹かれてやり始めたという訳だ。

(まさか「こつち」にも全く同じ格ゲーがあるとはな。でもこれで確信したぜ)

そして優は確信した。

こつちにもあつちにも有る。

こつちに有つてあつちに無い。

あつちに有つてこつちに無い。

優の記憶の中にあるあつちと極めて似通つていながらも根本的な部分が全く違うこつち。

そんな有り得ないような奇妙奇天烈摩訶不思議な場所を人々はこう呼ぶ。

「並行世界」と。

(ここ)は…並行世界…)

ここまでで優が得た情報を整理してみよう。

街中で倒れていた優は目覚めるとすぐに遺跡の力を使ったと思われる結果の展開を確認。直後に宝石を依り代とした悪霊と交戦し、これを撃破した。

ここで注視すべき点は「悪霊を閉じ込めるために結界を展開した」ということ。優の知る限り、遺跡を手に入れたのが「組織」の場合はその限りではないが、「個人」が私利私欲以外の目的で遺跡の力を使った前例は無い。これが優に僅かな疑念を抱かせたのだ。

使用可能な遺跡が身近に存在するならば、物によつてはそのまま捨て置くのはあまりにも危険なため、使用者本人の善悪に関係なく場合によつては破壊しなければならない。

(早いとこ帰りてえが帰る方法がさっぱりわからねえ…)

そして次の日、高町家で目を覚まし、その後士郎と交戦した後には和解。関係者への電話と士郎への質問でここが自分のいる世界でないことを知ることとなった。

士郎への質問の意図は至つて簡単なものだ。アーカム財団は「第二のロックフェラー」とも呼ばれ、世界中に考古学研究所を作っており、他にも様々な事業の援助なども行うなどしているため至る場所で名前を目にする機会があり、物心のついた年齢の者ならばその名を知らぬ者は存在しないと言つても過言ではない。

それを知らないというのは、全く別の世界でもなければあり得ない話なのだ。

(それにもしかしたら芳乃もこつちに来てるかもしれねえ。芳乃を探すためにも、もし帰る方法がわかつてもらはくはこの世界にいるしかねえな)

そして先程までなのは遊んでいたゲームは自分の知つている…とどうか大好きなゲームと全く変わらないゲームであること、またなのはの発言により、少なくともそのゲームの歴史は(仮にズレが有つて

も) 同じ流れであることが判明。

これらにより優は「自分の知るものがありながらも、有るはずのものが無く、無いはずのものが有る世界Ⅱ自分の知る世界と似ているようで違う世界Ⅱ平行世界」と結論付けたのだ。

これにより優の優先事項が三つに増えることとなる。

一つは染井芳乃の発見・保護。

一つは先日の魔術師の使用した遺跡の調査。

そしてもう一つはつい先ほど加わった自分の世界への帰還方法の確立だ。

(やれやれ、今回ばかりは全く先が見えねえぜ…)

「御神苗くん、聞いてる?」

「……………」

「御神苗くん?」

「おみなえさん!」

「…ああ。すまねえ、考え事してたぜ。なんだ?」

「わたしじゃなくてお母さんですよ!」

「あ…す、すいません!」

「なにか大事なことも考えていたんでしょ?別にいいわよ」

優もさすがに目の前の人を無視して上の空になるのは失礼どの思ったのか、慌てふためきながら大声で謝罪する。

「それじゃあ話を戻すけど、今夜うちの家族みんなとKOFをやってみない?」

「…はい、是非お願いします」

「じゃあ決まりね!みんなでKOFなんて久しぶりだわ」

「……………」

優の不安など知る由もなく、こうして何故か高町家でゲーム大会の開催が決定した。

「おみなえさん、まだゲームやりますか?それともなにか他にやりたいことは?」

「うーん、そうだなあ…」

おやつを頬張りながらまったりとした時間を過ごす2人。

優は格闘ゲームが好きではあるが、基本的にアウトドア派なので長時間ゲームをやることは殆どない（友達とゲームセンターへ行った時や連続技の練習でつい長くなってしまうことは度々あるが）。

したがって（休憩を挟みながらやるなら別だが）、ひと勝負の時間が長くなりやすいKOFでなおかつ相手プレイヤーが1人ならば、立て続けに10戦もやればもう満足なのだ。

「少し…身体を動かしてえな」

「え？身体を…ですか？」

それでもまだやろうと思えばやれたが、また10戦など長くてできるはずもなかったのでキリ良く10戦で終わらせようと考えた訳だ。

「でもまだケガが…」

「これくらいいいものことだ。それにある程度身体を動かしての方が早く治るってもんよ」

「そんなムチャクチャな…」

優の謎論理に呆れるのはだったが、なるべく本人の意思を尊重したかったので仕方なく了承したのだった。

リハビリなの

「ここがうちの道場です！」

「……………」

士郎のスポーツウエアを借りて着替え、なのはに案内されたのは剣道場。先程士郎へ連れて来られた場所であり、いきなり自分がスプラッター映画さながらのバラバラ死体になりなけた場所だ。

「すごい立派でしょー！……ここでいつもお兄ちゃんとお姉ちゃんが剣道の稽古をしてるんですよ！」

「あー……」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもねえ」

「？」

(まさか「さつき」ここで士郎さんと殺し合いしてました)なんて言えねえよな……)

ついでに「そーいやあの時オレがホントにあのまま切り刻まれてたらどうやって処理するつもりだったんだろう」とちよつとだけ気になった優であった。

「おみなえさん、剣道はやったことありますか？」

「いや、やってるところを見たことすら無いな」

「じゃあちよつとやってみませんか？」

「うーん、そうだなあ。どうせなら格……」

「おみなえさんは病み上がりだから……ってまだ治ってないから病み上がりじゃないか」

「俺の話聞いてるか？」

本当は格闘術とナイフ捌きの訓練をやりたかったが、なのはは右から左へ華麗に受け流す。

「とにかく激しい運動はダメだけと軽い素振りならオツケーですよ。素振りなら防具をつけなくてもいいし、身体にあんまり負担はかからないし、それだけでもけっこういい運動にもなりますから」

「いや、だから……」

「おみなえさんって放っておいたらその身体で陸上競技とか始めちゃいそうな感じに見えるんですよね」

「!?」

「本当はもつと身体を休めてほしいんですけど、これでもいちおうおみなえさんの意見を尊重したんですよ。だから少しくらいわたしの言うことも聞いてください。ね?」

「……………」

なのはは優へ朗らかな笑顔で優を見つめる。しかし笑顔と裏腹にその目は、どこかの黄金の精神を持った人のようなスゴ味のある目になってるように見えた。

その笑顔にちよつとビクツとなった優はこう思った。

（こいつやっぱり秋葉ねーちゃんに似てるな…。末恐ろしいガキだぜ…）

「でも秋葉ねーちゃんはここまで怖い顔しねーよな?」とか思ったりもした。

「竹刀の持ち方は、右利きの場合はこういうふうに左手を柄の上の方…」

「……………」

なのはの有無を言わさぬ気迫によって結局素振りをするはめになっちゃった。

「右手は石突きの方…」

「……………」

「ぶつちやけやりたくねー」と心の中で呟いていた優はなのはの指導など上の空で、剣道とは全く関係無い事を考えていた。

「あと右手の薬指と小指にはあんまり力を入れないでくださいね。竹刀を振るのはあくまでも左手ですから」

「なあ、なのは」

考えているうちに我慢できなくなった優は、耐え兼ねてついになのはに話を切り出す。

「…はい、なんですか?」

「昨日の晩、なんであんな時間に外出してたんだけ？」

「い、いきなりなんですか？そんなことより素振りの方……」

「はぐらかすな。小学生が一人で歩き回っていい時間じゃねえぞ。お前のことだからイタズラだとか家出とかだとは思っちゃいねえが、本当の理由をお前の口から聞かせてくれ」

「……」

口調こそ落ち着いているが、真剣な表情でなのはを睨んでいる以上はごまかす訳にはいかない。なのはは数秒間の沈黙の後、必死に言い訳を探して口を開く。

「そ、それは動物病院に預けてたフェレットが心配で……」

「じゃあお前を襲った悪……化け物はなんだ？まさかアレがそのフェレットを襲うって思ったからか？」

「……」

昨晚の出来事に触れた途端になのはは動きがピタリと止まり、同時に俯き一言もしやべらなくなってしまった。

「それにあの化け物のことを誰にも言っていないのはなんでだ？」

『化け物に襲われた』なんてそのまんま言っても簡単に信じちやもらえないってのはわかる。警察や親に言っても妄想扱いされる可能性も高い。

だがあんなのは人間一人でどうにかなるもんじゃねえ。必ず誰かの協力が必要になる。だったら最低でもダメ元で家族の誰かにくらいは話すべきだ。お前だってまさかあの化け物を自分でどうにかしようと思ってたわけじゃねえだろ？」

「!？」

優が質問をぶつけるとなのはは驚愕の表情で優に勢いよく振り向く。

「……」

「……マジかよ」

どうやら優は核心を突いてしまったようで、なのははそのまま固まってしまふ。これには優も開いた口が塞がらなかった。

わたしの秘密なの

「……………」

「…………マジかよ」

優のつぶやきで我に帰ったなのは「やってしまった」といった表情で顔を背ける。

「なんでお前は一人でそんなことしようとしたんだ？」

「……………」

なのは顔を背けたまま口を開こうとはしないが、優は構わず話を続ける。

「お前、まさかあの化け物のことを知ってるのか？」

「……………言えません」

(やっぱり知ってんじやねえか。…でもここまで頑なになると…)

なのはの性格上、これ程危険な案件に対してここまで頑なに情報開示を拒むとなると、なんらかの使命感や責任感を感じているか自分でなければ成し得ないなにかをやるうとしているのだろう。

それを察した優は……

「お前が話したがらないなら聞くつもりはねえ……………けど忠告はしとくぜ」

「……………」

「あの化け物はまだいるはずだ」

「……………はい、わたしも…そう思います…」

優が戦った悪霊は優との戦いで確実に消滅したが、倒す直前に断末魔の叫声を上げていた。これは生物では霊感の強い者のみ聞き取れる声で、その声はまるで野生動物が仲間を呼ぶ際の遠吠えのように優には聞こえたのだ。

もしその推測が当たっていればあの類の悪霊はまだ他にいることになり、そうなればまたこの地域の人間が危険に晒される可能性が高い。当然そんな事態は必ず避けなければならない。

そう考えた優は悪霊の出やすい夜間になのはがいつも一人で出かけているのか確認を取り、もしそうであれば危険なのでやめさせよう

としたのだ。

悪霊はA・Mスーツを装着し、武装した優でさえ手こずる敵だ。並みの人間では…と言うよりサイコブローのような霊体への攻撃手段を持たない者であれば、士郎のような達人でさえも（時間稼ぎなどはできても）勝ち目はゼロと言っている。況してや達人ですらないただの子供など論外だ。

そこで優は……

「でもそれはオレが片付けてやるから安心しろ」

「…!!」

「オレならあの化け物を一人でも余裕で倒せるからいいが、お前じゃ命がいくつあっても足りねえぞ」

「……………」

なのはの無謀な行動に釘を刺し、自分に任せるようお願いさせる。優は強がってはいるものの、実のところは生命すら危ぶまれる程の苦戦を強いられた末の勝利ではあったが、それはボーマンとの戦闘で受けたダメージと体力の消耗によるハンディキャップが大きかったためだ。

今は体力が回復し、傷の具合も悪くない。そしてその一戦で悪霊の大まかな行動パターンと戦闘能力は把握できたので、次からは先日ほどの苦戦はしないという自信が今の優にはある。数少ない問題としては手榴弾が2個しかないことくらいだが、使わずに倒す方法も考えてあるので然程問題にはならない。

だが……

「でも……お……って……………」

「ん?」

「おみなえさんだって…化け物にふきとばされて…いっぱい叩かれて…ボロボロになってたじゃないですか…!」

「なっ…お前、見たのか!?!」

頭を抱えなくなる事実。なのはは優の戦闘の一部始終を見ていたのだ。

こうなつては簡単にぐまかすことはできない。優は言いくるめる

計画が台無しになり、思わず感情的になってしまう。

「いや、そんなことはどうでもいいー!」

「よくありません! 知ってしまった見ないふりなんてできませんよ!」

「うるせえ! とにかくアレを倒せるのはオレだけだ! お前は引っ込んでろー!」

「引きません!」

「じゃあお前になにができるってんだ!」

「わたしにだってできることはあります! それなのにただおみなえさんだけが傷つくのを見てるだけなんてイヤなんです!」

「てめえ…いい加減に…!」

こうなつてはただの水掛論、売り言葉に買い言葉。二人はひたすら平行線のままだ。

このままでは二人の仲が険悪になってしまうのは想像に難くない。そんな危機を迎えていた二人の間に偶然にも(?) 割って入る者が現れた。それは……

「ゆ、ユーノくん!」

「…はあ」

道場の戸を開けて現れたのは、ユーノと呼ばれたなんとも可愛らしいフェレット。あまりの唐突な珍客に優の熱はすっかりと冷めてしまった。

「か、勝手に入ってきてきちゃダメだよ!」

「おい、今は大事な話をしてんだ。さっさとそいつを部屋から出して……」

「…おみなえさん、どうしたんですか?」

ユーノを締め出すようなのはに言おうとした優の言葉が突然途切れる。ユーノを抱え上げたのはが気になって振り向くと、そこには口を真一文字に結び、脂汗をかきながらユーノを凝視する優の姿があった。

「……………」

「な、なんで怖い顔して黙って…」

「ちよつと貸せ！」

「きやつ！」

「キュー！」

優が強引にユーノをなのはから引き剥がす。ユーノは嫌がつて暴れるが、優はそれを抑え込んでユーノの右前足を見つめる。

「やつぱり…：アンドヴァアラウト…！」

そこには人間の指にスツポリと収まりそうな大きさの、魚の意匠の入った黄金色の指輪がはめられていた。

「あ、あんど…う？」

「ふん！」

「ギャー！」

それを確認した途端、目の色を変えて指輪を取り外そうとする優。ユーノは先程とは比べものにならない程に暴れ出し、全力で優から逃げようとする。

「ギャー！」

「やめてください！いやがつてるじゃないですか！」

「うるせー！そんなこと知るか！」

なのはの制止も振り切つてようやく指輪に手を掛けた…と思われた瞬間だった。

「ギッ！」

「ぶっ!？」

「え？」

指輪が光ると優の頭が突然見えなにかに弾かれて吹き飛び、道場の壁に激突。そのいきおいでそのまま壁に頭をぶつけて意識を失ってしまった。

ユーノくんの秘密なの

「……………!」

「きゃっ!」

「!?」

目が覚めた途端、飛び起きて立ち上がる優。

辺りを見回してなのはの横に座っているユーノを発見すると間髪入れずにその方向へ踏み込み、なのはを突き飛ばすとユーノ目掛けてサッカーボールキックを繰り出した。

「おみなえさん!いきなりなに…」

「下がってろ!そいつはただのフレットじゃねえ!」

「!!」

ユーノは間一髪それを飛び退いて回避。そして…

「ちっ…!」

「キユー…!」

優と距離を取ると鋭い目付きで優を睨み付けた。

「おみなえさん!なんでそんなこと…」

「そいつの前足見てみる!その指輪だ!」

「それってさつき言ってた…。えーと、あんど…」

「アンドヴァラナウトだ!」

ユーノが前足に身に付けているその黄金色の指輪。魚の意匠が入っていること以外はなんの変哲もない普通の指輪だ。

「それがどうしたっていうんですか?」

「その指輪はな!持ち主に莫大な力を与え、強力な魔術用の触媒にもなる指輪なんだ!」

「…!!」

優がユーノを睨み返しながらそう言うと、表情に乏しい動物である筈のユーノが動揺したかのように顔を上げてビクツと震えた。

「それにだ。てめー、人の知恵…っか意思があるな?」

「え?」

「!!?」

瞬間、なのはとユーノ二人の時間が止まった。

「その様子だとお前もわかってたみたいだな、なのは」

「え……あ……そ、その……わたしは……」

「……………」

なのははひたすらうろたえ、ユーノは俯いたままピクリとも動かないくなる。

「じゃあ、説明してもらおうか」

「ど、どうして……。わたし、なにも言っていないのに……」

「……………」昨日、化け物と戦う前に強力な結界が張られた」

優はユーノを無視し、なのはに向き直りながら説明を始めた。

「その結界はなんの準備も無しに一人で、一瞬でできるような簡単なもんじゃねえ。一人でやったら何日かかるかわかったもんじゃねえし、人数が多くてもあれ程複雑な結界だと時間をかけて段階を踏んでやらなきゃならねえから狙って閉じ込めるには対象を足止めする必要がある」

「……………」

「でもあの化け物は束縛の形跡もなく自由に動き回ってたから、間違いないく足止めはされてねえ。しかもあの暴れっぷりを見るに動き始めてからほとんど時間は経ってねえ。……ってことはあの場には化け物を止める準備がなかったことになる、誰かが即席であの結界を張ったことになる。さつきも言ったが、はつきり言って魔術師が何人いようがなんの準備もなしに即席であんなとんでもねえ結界を張るなんざ不可能だ………がその指輪があれば話は別だ」

「……………」

「魔術に必要なあらゆる要素がその指輪には秘められてるんだ………って言ってもそれがあれば誰でもすげえ事ができるわけじゃねえ。魔術を使うには相応の知識や技術、力が必要だ。」

ただの動物が身に付けてもなにもできねえはずなのに、そいつはさつき指輪を使ってオレを気絶させる何かを放った。だからそいつは魔術に必要なスキルを持つてるってことになる」

「……………」

「で、さっきの話と合わせてまとめると魔術師が幻覚見せてるか、変身してるか、フェレットに魔術師の霊が取り憑いてるってとこだな。」

そして昨日オレの頭の中に話しかけてきたのも化け物を結界で閉じ込めたのもお前だ。当たってるだろ？フェレット」

説明を終えた優は再びユーノに振り向き、話し掛ける。それに対するユーノは……

「どうして……」

「え!?!」

「ふん……」

「どうしてボクのことやこの指輪のことをそこまで詳しく……」

「やっとしやべる気になったか」

「ユーノくん!しやべっちゃ……」

「いいんだ、なのは。この人にはもう隠してもムダだよ」

静かに顔を上げたユーノは観念して警戒を解き、優と話し合う覚悟を決めるのだった。

妖精の秘密なの

「よし、じゃあまずさっきの質問に答える……前にオレから一つ質問いいか?」

「は、はい。どうぞ」

ユーノが警戒心解いたことで優も落ち着き、互いに対面で座り込んで話し合いが始まった。

「お前、結局何者なんだ?しゃべってるってことは人間なのか?」

「御察しの通りボクは人間で、この身体は変身した身体です。だからそのフェレットっていう動物とは身体の構造が違うので、人間と同じように声が出せるんです」

「ふーん、そうか」

「にん…げん……人間!」

「ん?なのは、どうした?」

「あ……」

ユーノの答えを聞いた途端、なのはが異様に食い付く。いったいどうしたのかと優が聞かくなのはには聞こえておらず、なのはは瞳を顔を紅潮させながらユーノを睨み付けた。

肝心のユーノは恐る恐る上目遣いでなのはの機嫌を伺っているように見える。

「ユーノくん……」

「は、はい……」

「あなた、変身してるって言ってたけど……性別は……」

「お……」

「…お?」

「男……」

「…!!!」

なのはは更に顔を紅潮させ、今にも湯気を立ち昇らせそうな程に真っ赤に染まっていった。

「ユーノくんのエッチー!!」

「うわ!ちよっ!やめ!」

「オレ知ーらね」

なのはは羞恥と怒りを足して2で割ったような表情で、先刻優と激闘を繰り広げた士郎を彷彿とさせるような竹刀捌きをユーノに披露し始めた。

「えーと、次はなんだっけか」

「僕の…ハア…質問に…ハア…答えて…ハア…くださると…ハア…」
「無理しないで呼吸を整えてからしやべっていいぞ」

3分後、今にも倒れそうなくらい疲れたユーノはなるべくなのはの目を見ないように優の膝下に座り込んだ。

「んじや、改めてもう一回頼むぜ」

「はい。あなたは何故そんなに僕のことや、家宝の……この指輪のことに詳しいんですか？」

「仕事柄そういう知識が必要で、色々調べてたらやたら詳しくなっちゃってな……ってこれ、言ってもよかったかな…」

思わず自分がやっていた仕事の内容を口から滑らせてしまい、戸惑う優だったが……

「ま、同じように隠し事があるお前なら大丈夫か」

意外にもあっさりと素性を（少しだけだが）明かす事を決めた。

「ちなみに指輪の名前はアンドヴァラナウトな。それもオレの仕事の界限じゃ有名なオーパーツだからだ」

「オーパーツ？なんですか？それ」

「場 違 い な 工 芸 品
『場 違 い な 工 芸 品 place arts』、略して「OOP ARTS」って言つてな。一般的には太古の時代に、当時では不可能な技術で作られた物を指して使われる言葉だ。

オレの仕事ではもつと短くして『遺跡』って呼んでて、古代どころか現代の技術ですら製造不可能な上に、人知を超えた力を持つ物のことを指してるんだ。伝承や神話で語られるようなものがゴロゴロしてるぜ」

「人知を超えた…。この世界にもそんなものがいっぱいあるんですか…」

（ん？「この世界？」）

「こつちもだいたい同じようなものがありますね。こつちではそれをロストログアって呼んでます」

「同じようなもの、か。まあとにかくだ。その遺跡を悪用されないように、他の誰よりも早く発掘して封印するのがオレの仕事の最大の目的だ」

「遺跡を発掘…封印…」

「おいフェレット、どうした？」

「い、いえ…。続きをお願いします」

「…で、アンドヴァアラナウトの話に戻るんだが…。アンドヴァアラナウトは遙か昔にアンドヴァアリっていうドワーフが黄金を無限に生み出すために作ったって言われてる指輪だ」

「黄金を無限に、ですか？なんのために？」

二人の間に突然なのはが割り込んで質問をし、優はそれに応じる。

「さあな。でも多分昔の人は金銀財宝に目がなかつたんだろうな」

「へえ…」

「他の神話とかにも黄金を求めた話はいくらでもあるし、今話したアンドヴァリは生み出した黄金を洞窟に全部ぶち込んで自分一人で守り続けてたっていうしな」

「昔の人って意外と欲深いんですね。あ、そういえば人って…ドワーフもいちおう人なんですか？」

「ドワーフが本当に現在に伝えられる通りかはわからねえ。何気なく人って言っちゃったが、もしかしたら人じゃないかもしれないねえな。だが少なくともアンドヴァアラナウトのようなとんでもねえ道具を作り出す技術を持ってたのは確かだ」

「たしかに目の前に実物がある以上、それは疑いようがないですね」

ここでユーノが優の説明に深く頷く。いつの間にかなのはとユーノは優の話にのめり込んでおり、興味津々に優を見つめながら耳を傾けていた。

（だが問題は「なんでこつちの世界にアンドヴァアラナウトがあるのか」ってことだ）

「……………おみなえさん？」

「…わりい、じゃあ続けるぞ。アンドヴアラナウトが黄金を生み出すつてのは今言ったが、その力はそれだけじゃなかった。厳密に言えばそれはアンドヴアラナウトの能力の一端に過ぎなかったって訳さ」

「それがさつき言つてた…」

「そう、莫大な力と強力な触媒、複雑な演算を高速処理する機能…つまり強力な魔術を使用できる能力だ。欲に目が眩んでたアンドヴアリは黄金を生み出す以外の使い方を考えてなかったが、本人が気付かなかつただけで他にいくらでも使い方はあつたんだ」

「……………」

「ところでフェレット。その指輪、いつ・どこで・どうやって手に入れた？」

「そ、それは…」

「ん？なんか話しくいことでもあつたか？」

「……………僕の一族は昔から遺跡の発掘を生業にしている、何代か前のご先祖様が発見して以来、僕の家系に受け継がれていたんですよ」

「遺跡の発掘!？」

「やっぱり…そうなりますよね…」

ところがユーノの生業を聞いた途端、優が突然騒ぎ立てる。ユーノはこの反応を予想していたようだ。

「おみなえさん！落ち着いて!」

「大丈夫だ、もう落ち着いた」

そう、確かに落ち着きはした。そして落ち着いた結果、新たな疑問が浮かび上がってきてしまった。

(資料見て知つてただけで実際に見るのは初めてだが…デザインも機能もオレの世界にあつたアンドヴアラナウトと同じだ。並行世界なら本来一つしかない物が互いの世界に一つずつ存在してもおかしくはねえが…)

こちら側にも同じオーパーツが存在している可能性が高いという事実である。

世界の秘密なの

「……………」

「あ、あのー…おみなえさん?」

同じオーパーツがこちらの世界にある理由を考え込む優。

（オレがこっちの世界に飛ばされる要因になった幽霊島は、世界各地のあらゆるモノを取り込んで通常空間と異空間を往復していた。よく考えてみたらオレが知らないだけで他の遺跡も幽霊島に取り込まれて何かの拍子にこの世界に来ちまった…って可能性も無いとは言えねえよな。もしアンドヴァラナウトがそうだとしたら…）

「もしもーし」

幽霊島は世界からなにかを奪っては零してを繰り返しており、実際に優がこうして別の世界へ飛ばされた以上、ありえない話ではない。（いや、逆にこっちの世界に幽霊島みてえなものがあった、こっちから元の世界に来たって可能性も…。もしそうならそれで元の世界に帰ることも…）

「聞いてくださいいよー!」

考えれば考えるほど謎と可能性は深まるばかりで一向に答えは出ない。しかし一度思考の海に沈んだ優は簡単には帰ってこれない。

「……………」

「おみなえさん!!」

「!?!」

「ユーノくんが困ってますよ!!」

「あ、ああ。すまねえ、つい考え込んじゃった」

（ボクもびっくりしたよ…）

……が、姉の秋葉を彷彿とさせる気迫のこもった呼び掛けでようやく気付き、これ以上の推測は無意味と悟った優は心機一転、ユーノとの会話に戻っていった。

「…さっきのオレの仕事の話の時に妙な反応してたのは、お前の仕事に対してオレがどんな反応するのか不安だったからか」

「…はーい」

ユーノは露骨に気まずそうなトーンで返事をした。優はしばし沈黙した後、目を伏せながら再び口を開く。

「あ、そうだ。お前何歳だ？」

「きゅ、9歳です」

「そんな歳で遺跡の発掘なんてやってんのか……って9歳であんな魔術を使ったたつてののか!？」

「ぼ、ボクは主に補助系の魔法を修めてまして……。中でも結界魔法は得意中の得意なんですよ」

（いくら得意でアンドヴァアラナウトがあるって言っても若すぎるだろう！こいつ、とんでもねえ化け物かもしれねえな……）

「ほ、他にはなにかありますか？」

少しでも場の空気を和ませようとその場で思いついた質問を試みたら、ユーノの意外な潜在能力を垣間見てしまった優であった。

「……じゃあもう一つ質問だ。お前の一族は遺跡を発掘したあと、それをどうしてるんだ？」

「基本的には遺跡で発掘したものや遺跡の情報を売ってます。一族では詳しく調べられなかったり、嚴重な管理や封印が必要なものが……主にロストログアが出てきた場合は管理局へ引き渡したりもしていますね。中には……この指輪みたいに自分達で所有することもあります」

「……………」

ユーノの説明が終わっても何も喋らない優。ユーノは優の反応が気になってたまらなくなり、恐る恐る顔を上げる。

「あ、あの……」

「ふーん」

優は素っ気ない反応を返すとまた黙り、数秒後に口を開く。

「管理局ってなんだ？」

「あ、それって……」

管理局なるものが気になった優だが、なのははそれを知っているようだ。

「うーん……。これこそ本当に話してもいいのかな……」

「ユーノくん、わたしみたいにすぐに信じられる人はあんまりいないと思うから…」

「？」

「でもこの人は魔法のことも知ってるみたいだし…」

「たしかにわたしは知らなかったけど、おみなえさんも多分この世界にある魔法だけだと思うよ」

「おーい」

「ロストロギアにも詳しいし…」

「うーん…。たしかに協力してもらえれば心強いけど…」

「……………」

ユーノは前足を組むというフェレットらしからぬポーズで数十秒間悩み……

「…………それを説明するにあたって念頭に入れておいてほしいことがあります。よく聞いてください」

とうとう包み隠さず話すことを決意した。

「で、念頭に置くことってのはなんだ？」

「僕の状態は至って正常です。空想癖もありません。だからこれから話すことは全部本当のことです。それを覚えておいてください」

「あ、ああ」

「やっぱり話しちゃうんだ」

この念の押しように若干引く優だったが、逆に「よほど胡散臭い話みてーだな」と興味を惹かれるのだった。

「すぐには信じてもらえないかもしれませんが、僕はこの世界の人間じゃありません」

「!？」

「僕の一族はさつき遺跡の発掘を生業にしてるって言いましたよね。その遺跡っていうのは一つの世界にあるものだけじゃなくて、こことは全く違ういくつもの世界に存在するんです。

僕が今ここにいる世界もその一つなんですよ。この世界はまだ調べてないですけどね。そのいくつもの世界は総称で『次元世界』って

呼ばれています」

「次元…世界？」

「はい。それぞれの世界を管理することで次元世界の秩序と平和を守り続けているのが『時空管理局』…通称管理局です。時空管理局の本局は『ミッドチルダ』っていう世界にあります」

(いくつもの世界…。時空管理局…。ミッドチルダ…))

瞳を濁らせて沈黙する優。ユーノはただならぬ雰囲気の優にこれ以上話し掛けることは出来なかった。

妖精の決意なの？

(次元世界に時空管理局…って言ったよな、こいつ)

優は胡座をかき、頬杖を突きながら沈黙考に突入する。

(さっきの話しぶりから察するに、時空管理局…ミッドチルダってのが宗主国みたいなもんで、他の世界が従属国みたいなもんか。

で、『全く違う世界』ってことは全く同じ存在は無いつてことだ。…となると管理してる世界には並行世界は含まれてねえつてことになる。元の世界に戻るためのヒントになるかと思っただが…当てが外れた、つてことになるのか…)

ユーノの心配とは裏腹に、優は自分が並行世界から来た事もあつてやたらにあつさりとユーノの話を信じてしまっていた。

(そんなバカでかい組織が並行世界を管理してねえとなると……並行世界は存在してないと思ってるか、下手すりゃ並行世界つて概念すら無いかもしれねえな。

もしそんな怪しい世界から来た人間がいるつてわかったら時空管理局も黙っちゃいねえだろう。時空管理局がまっとうな組織ならいいが、生の情報が入らない以上は信用できねえ)

この時優の頭を過ぎったのは、もちろん元の世界で所属していたアーカム財団だ。

次元世界全体を守るといふ想像もつかないような大規模の組織である時空管理局だが、元の世界におけるオーパーツにあたるロストロギアという危険な力を管理して均衡を保つという意味ではアーカム財団と時空管理局はよく似ている。しかし、それ故に優は時空管理局に対して一抹の不安を覚えたのだ。

(ややこしいことにならないように、今はこれ以上元の世界のことは話さねえ方がいいな)

先日の幽霊島での戦いにおいて、信じていた師・ボーマン。彼がアーカムを裏切り、敵対するに至ったのには深い理由があった。

”アーカムが必ずしも正しいことをしているとは限らない”

彼はこう言った。

「これこそが自分の生きる道」とその仕事に誇りと使命感を持っていたポーマンは、直接師事していた優ですら信じられない「裏切り」という行為をもって優に牙を剥いた。

直接対峙した優は、ポーマンが裏切る以前となんら変わりのない誇りと使命感を持つていることに、決着してからようやく気付いたのだ。同時に「アーカムは確実に裏で間違ったことをしている」と確信してしまったのだ。

こうなるともう以前のように働くことなど出来はしない。それ故に優は幽霊島を脱出しようとした際にはアーカムに幽霊島を渡さなため、データプレートをその場に故意に放棄してしまったのだ。

そしてそれは時空管理局にも全く同じことが言える。

そもそもロストログアの有無以前に、幾つもの世界を管理するなどという空前絶後の巨大組織は、裏を返せば時空管理局に並ぶ組織は存在しないということを示している。

これは詰まる所、そんな巨大組織がもし万が一にも暴走した場合に止められる組織も存在しないということだ。

時空管理局と同様の性質を持つ組織が自分の知らないところで暴走を始めてしまっていた以上、時空管理局もそうなる可能性が高いというのは自明の理。そんな危険性を秘めた組織に貴重な情報と自分の身柄をどうして預けられようか。

優の心はそんな不信感で満たされていたという訳だ。

…ん？待てよ。そういや時空管理局が次元世界を管理してるってことは…)

しかし優は、自分が今為すべきことを改めて考え直した結果、1つの可能性に気付いた。

「…やっぱり…簡単に信じてはもらえないですよね…」

「また質問、いいか？」

「あ、はい。どうぞ」

一通り考えがまとまった優はまた浮かび上がった疑問を問う。

「管理局ってのは次元世界を管理してるって言ったよな。…ってことは、自由に次元世界を渡る技術を持つってことか？」

「はい、技術も手段も管理局が持っています。でも手続きさえすれば誰でも渡ることができますよ」

「……………そうか。じゃあ質問を変えるぜ。例えば…次元を渡る技術もなにも無い奴が何かに巻き込まれて別の次元世界に飛ばされちゃう、つてことはあり得るか？」

「うーんと…。ボクは実際に見たことは無いですけど、管理局の方では色々な経緯でそういう人を発見して保護することはたまにあるみたいです。ちなみにそういう人のことを、こっちの言葉で次元漂流者つて言います」

「!!」

「えっ?」

ユーノの口から聞きたかった答えを聞けた優は、目を見開いてユーノの顔に迫つて来る。今までに無い程の剣幕で迫る優に、ユーノは思わず息を飲んだ。

「その話、本当だろうか!?!」

「は、はい!・本当です!・間違いありません!」

優は答えを確認しつつ数秒間ユーノを睨み付けると、顔をゆっくりと引き、座り直して先程と同じく無言になって考え始めた。

(……………やっぱりどう考えても並行世界が次元世界と無関係だとは思えねえ。そして管理局は次元世界を自由に渡れる。だったらもしこれらの関連性が証明されれば、元の世界に戻る方法が見つかるかもしれないねえ。

それに管理局が次元漂流者つてのを保護してるなら、ここに留まつて闇雲に探すより管理局に照会するか探してもらおう方があいつが見つかる可能性は高い!…)」

何の手掛かりもなく、どの次元世界にいるかどうかともわからない状態で人探しをするなど砂漠で指定された一粒の砂を探すようなものだ。本来ならば身の安全のために自分の存在は伏せておくべきだったが、それを捨てても賭けるべき可能性が見つかった。

(待ってる、芳乃…!!)

己の身を省みずに自分を救おうとした少女に報いるため、優は決意

を固める。

「ユーノ、ちよつと話があるんだが……」

そう……「今度はオレが助ける番だ」と。

妖精の疑問なの？

「ユーノ、ちょっと話があるんだが…」

「はい、どうぞ」

優は神妙な面持ちで再度ユーノを見つめ直し、問い掛ける。

「今からその時空管理局つてのに連絡は取れるか？」

「今、ですか…。急にどうしたんですか？」

「次元漂流者の中にオレの知り合いがいるかもしれねえんだ。それを問い合わせせてみてえ」

「……………」

優の話を聞くや否や俯いてしまうユーノだったが、数秒後に顔を上げて優の目を見つめながら先程の質問の答えを述べる。

「結論から言うと…可能です」

「結論から、か…なんか含んだ言い方だな。なにか面倒な条件でもあるのか？」

「条件とかそうという類いのものじゃないんです。これは単なる僕の……………」

「……………」

「僕の…責任なんです」

「責任？」

とても9歳とは思えない程に憂いを帯びた目になるユーノ。こんな年端も行かぬ少年に一体どのような責任があるというのだろうか？

「お前みたいなガキにいったいなんの責任があるってんだ？」

(高校生もまだ子供だと思っただけだなあ)

「なのは、なにか言いたそうな顔してんな」

「ナ、ナンデモナイデスヨ？」

なにか言いたそうなのは顔を引きつらせながらたどたどしい日本語で否定した。

「昨日の化け物…あれは僕のせいで現れてしまったんです」

「…なに？」

「ユ、ユーノくん！あれはユーノくんのせいじゃ…」

「なのは、黙ってる」

「…!!」

「どういうことだ、ユーノ」

昨日現れた、悪霊が封じ込められていた青い宝石。それを「この街に現れたのは自分のせいだ」とユーノというこのフェレット…：否、少年が苦々しい表情で発言する。

どんな事情があるのかはわからないが、人命に危機が及ぶ程の事件に発展してしまった事は看過できるものではない。優は無意識にはいえユーノを仇敵でも見つけたかのような目で睨み付け、僅かに感情を高ぶらせた。

なのははそれを肌で感じて竦み上がり、恐怖で声が出なくなってしまう。

「……………ぼ、僕はここ近年、故郷の世界で古代遺跡の発掘の指揮を執っていました。その中で見つけたのが昨日の化け物が封じられていた宝石…：ジュエルシードです」

(その歳で発掘作業か…)

ユーノの仕事内容を聞いて優は自分の幼少期を思い出す。

優の両親はアーカムの発掘隊の一員で、優が物心付いた時から家族で世界中を飛び回る日々を過ごしていたが、幼かった彼は両親の仕事内容をほとんど理解していなかった。

だが両親の好奇心と誇りに満ちた目を見てそれがこの上なく楽しく素晴らしい仕事だと本能的に理解し、彼自身もまた両親を誇らしく思い、「大きくなったら自分もこの仕事をしてみたい」と強く考えるようになっていったのだ。

彼が5歳になって間もない頃までは…………。

「文献によるとジュエルシードは『願いを叶える宝石』と呼ばれていて、手にした者は望んだことが現実になるそうです」

「願いを叶える？そんなものがホントにあるわけねえだろ。ドラゴ○ボールかよ」

「ロストロギアの力は本物です。文献そのままの力ってことはボクも

ないとは思いますが、少なくとも人の想いに関わる力を持っていると思いますよ」

「結局想像かよ。連想ゲームじゃねえんだぞ」

「すみません…」

「つーかあの中に入った悪霊はただ猪突猛進に暴れるだけのバケモノだ。しかも放置していれば永久に暴れ続ける、な。だが問題はそこじゃねえ」

悪霊がそのような力を持っているかは不明だが、悪霊自体の戦闘能力は然程高いものではなかった。

では何故悪霊はあの宝石の中に封印されていたのか？

悪霊は少なくとも封印が必要なほど強くはなく、戦闘に限って言えば特別な処置で使ってやる価値などない。ならばそこまで使う可能性は1つ。

「戦闘能力以外に特筆した能力を持っている」

そこで優はその能力がどのようなものか推測した。

それに当たって文献の内容は信用に値するものではないが、だからと言って全く参考にならないと言うほどのものでもないため、「願い」をキーワードに推測を進める。

「もつとそのジュエルシードとやらの具体的な情報はねえのか？」

「はい、僕達の一族ではこれ以上のことは…」

人間の願い……すなわち欲望は星の数ほどあれど、大別すると以下の4つに分けられる。

- 富（物理的な充足）
- 名声（他人の自分に対する認知）
- 力（才能、特殊能力など）
- その他（上記以外）

富・名声は結果が出て初めて成就したと言えるものなので即座に実感はできず、更には物理的・精神的に「無」から「有」を生み出した時、時には因果を捻じ曲げる必要があるため実現は不可能なものが多いと言える。

しかし力は別だ。ほぼ100%の確率で自己が対象となり、自己と

いう物理的存在を使用する：有り体に言えば「人体改造を行う」ということなので富・名声と比べれば容易と言える。もし仮に悪霊が自分を使用した相手になんらかの強大な力を与えられるとすれば、それは願いを叶えられると言い換えてもいいだろう。

優は悪霊の特殊能力が、より現実的である「なんらかの力を与える能力」であるという結論に至った。

(だとすればやっぱりヒトの手に渡るのは避けなくちやならねえな…)

世の中には優のように力に溺れない人間ばかりではない。そしてそれを与えるのがあのように凶暴な悪霊である以上は、力を振るわれる者だけでなく力を振るう者にも危険が付き纏うのだ。

「でもあんな暴走が起こる物である以上、危険な物であることは明白です。だから責任者であるボクが…」

「待て。この世界にどうやってジュエルシードが来たのかって説明がねえぞ」

「……………」

(……………ここからが核心か)

そして優の確信通り、ユーノの「自分の責任」の意味がここから語られることとなるのだった。

妖精の怒りなの？

「……………」

(核心はここからか)

ユーノはしばし沈黙するが、やがて観念したのか一つ深呼吸をしてから静かに語り始めた。

「……………僕はジュエルシードが危険だと判断し、輸送用次元船を手配して管理局へ運んでいる途中……………事故に遭って船は沈み、事故の影響でジュエルシードは……………この世界に全部ばら撒かれてしまったんです……………」

「その事故はお前のせいってのはことなのか？」

「事故の原因は不明です。でも考えられる可能性で一番高いのは……………」

「……………」

「ジュエルシードの……………暴走……………」

ユーノは顔を伏せ、身体を震わせ、歯噛みしながらも全てを語った。

優は暫し黙り込み、徐に口を開く。

「暴走……………。じゃあ昨日のあれはその影響ってことか？」

「……………あれは少しちがいます。この世界にばら撒かれたジュエルシードは幸い封印状態ですが、それが人の強い意思や魔力によつて発動し、暴走したものです」

「ふーん。じゃあもう一つ聞くけどよ、仮にお前のせいで暴走したんだとしたらどうしてそうなったと思っただんだ？」

「これは推測ですけど……………遺跡に眠っていた時は僕にはわからない複雑な封印が施されていたんだと思います。僕はそれを知らずにいちおう念のためにと自分で簡易な封印を施したんです……………。それが原因で……………封印が乱れてこんなことに……………」

(……………なるほどな。それなら悪霊があんな状態で動き回れたのもある程度合点がいくな。要するにユーノの封印術のせいで本来の強力な封印が乱れておかしな術になっちゃったってことか)

ユーノは9歳という若年者にして優れた結界術を操り、発掘現場の

指揮を執れる程の実績と信頼があり、人格も年齢不相応に責任感の強い面がある。

それ故に周囲の期待も大きく、発掘作業の指揮は彼にとって誇らしきはあったが、同時に責任者としての重責が彼の心を強く圧迫してしまっていたのだ。

ジャンルに関わらず初めての大役が失敗に終わることが仲間の信頼を失い、取引先の信頼を失い、自信を失うことになるというのはそう珍しいものではない。

況してや才能に溢れていると言ってもまだ精神的に未熟な少年だ。「その失敗で周囲がどれ程の被害を被るのか」……彼はそれを恐れてこのような行動に写っている面もあるのだ。

「だからこれは僕がやらなくちゃいけないんです。なんとしても全部回収して封印しなくちゃ……！」

「……で、結局全部で何個あつて、今現在は何個回収したんだ？」

「……ジュエルシードは全部で21個。今現在は僕が自分で回収した1個、御神苗さんが倒した1個……。そ、その後更に回収したのが3個……。合計……。5個です」

「……ちよつと待て。最後の3個はなんなんだ？誰がどうやって回収したんだ」

「……それは……」

《ユーノくん！それは言っちゃ……》

「……!!」

師匠ほどではないとはいえ、気配の察知能力の高い優は共に話を聞いていたなのは動揺に気付き、すぐさま答えを導き出した。

「まさかなのはにやらせたのか!？」

「うっ……！」

凶星を突かれたユーノは最早、誰と目を合わせることもなく震えるばかりだ。しかしそのまま黙することを許す優ではない。

「てめー……。さっきは自分で全部回収するようなことを言ってたよな……」

「……！」

「なのには今は危険なことをなのにはに任せて、自分は陰に隠れて高みの見物か」

「ち、ちが…」

「アンドヴアラナウトでなのはを洗脳でもしたのか!? 力を与えたのか!?」

「そんなこと…!」

「てめーの不始末を他人を利用して尻拭いさせてんじゃねえ!!」

「ちがう! ボクは!」

優はなのはのことで頭がいっぱいになっており、感情を抑える余裕は無い。相手が9歳の子供であることも忘れて感じたまま、思ったままの全てをユーノにぶつけ始めた。

「てめーは戦いとは無縁のガキを命懸けの戦闘に巻き込んで何とも思わねえのか!」

「僕だって好きでなのはに頼んだわけじゃない! でも僕は!…僕には力が…事を為す力が無かったから…!」

「だったらてめーの仲間に頼めばよかつただろうが!」

「一族みんなが僕みたいな力を持つてるわけじゃない! だから僕がやらなくちゃいけなかったんだ!」

「バカかてめー! それなら管理局に頼め! なんのための管理局だよ! 次元世界を管理してるんだからそういう戦力くらいあるだろ!」

「もし管理局にこれを知られたら…一族が管理局からの信用を失ってしまうんだ…!」

「信用なんか後から取り戻せるじゃねえか! 命は一度失ったら二度と取り戻せねえんだぞ!」

「!!…うううっ…」

優の言葉が次々と胸へ突き刺さる。ユーノはどうとう反論することもできなくなり、動物のつぶらな瞳から二筋の液体を滴らせた。

「な、泣いたって何も変わらねえぞ!」

「うっ…あああ…」

それでも優の叱責は終わらない。終わらせる訳にはいかない。

優は最早染井芳乃や帰還方法のことなど二の次。決してユーノが

憎くてこんな事をしているわけではなく、命を軽んじている節のあるユーノに考えを改めさせるために厳しい物言いをしているのだ。

「うっ…うっ…」

「……わかったらいつまでも泣かねえでさっさと管理局に応援を要請して二度となのはに…」

「もうやめて!!」

「!?!」

そこへ可愛らしくも猛々しく、若干怒気を孕んだ第三者の声が二人の耳を劈いた。

わたしの意志なの

「もうやめて!!」

「!?!」

思いもよらなかつた第三者の介入。その叫声により二人は先程の興奮が嘘のように消え去って互いに冷静さを取り戻すと互いに顔を見合わせるが、気まずさからすぐさま視線を逸らした。

「おみなえさん」

「なんだよ。今はこの野郎と話…」

「わたしの話を聞いてください」

「…ちっ」

優はなのはの介入を押し退けてユーノとの話し合いを進めようとするがなのはの眼力に思わず口を閉ざし、なのはは震えながらも優の目を見つめて口を開く。

「おみなえさんがわたしのことを心配してくれてるからこそユーノくに冷たく当たってるのはわかりました。それにはわたしも感謝しています」

「……………」

「でも…それでもわたしは思うんです」

「……………」

「ユーノくんは責任を果たそうとしてボロボロになるまでがんばりました。事後承諾みたいな形ですけど、わたしに協力を求めた時もうすぐ申し訳なさそうにしてみました。」

それにわたしがなんとかしなくちゃユーノくんはきつともっとひどいケガをするまで…ううん、もしかしたら命が危なくなるまで一人でがんばろうとしちゃうんじゃないかって…。だからわたしはユーノくんを助けてあげたいと思っただけです」

「…!」

優は一言も言葉を発しないが、口を真一文字に結びながらギリッと強く歯噛みする。

「さっにも言ったけどもう一回言います。わたしを心配してくれるの

はうれしいし、感謝もしてます。でもユーノくんも充分すぎるくらいがんばってくれました。

わたしはそんなユーノくんのために：わたしの大好きな人たちを守るために危ないのをわかった上で手伝おうって決めました！これはわたしが選んだ道なんです！だから全部ユーノくんが悪いような言い方はよくないと思います！」

「全部悪いなんて言ってるねえだろ！」

「ひっ！」

「あ…」

思わず声を荒げてしまう優。なのはは恐怖で声を上げてしまい、優も子供に感情的になってしまった事を密かに猛省する。

「とにかく！オレはこいつにもっと優先順位と効率を考えろって言うてるだけだ！」

「だ、だからってそんな言い方したら誰だって傷つくし素直に聞き入れられませんよ！」

「ぐっ…！」

優はスプリガンの仕事では必ずと言っていいほど自分より年上の成人と接触するが、仕事柄舐められてはいけないということと生来の強気な性格が影響して、本人はほとんど意識していないが極々一部の者以外には口も態度も極めて悪い。それが今のこの場でも遺憾無く発揮されているという訳だ。

自分でも薄々勘付いてはいたが、いざ指摘されると弱化心に刺さるものがあつて言葉に詰まってしまったのだ。

「それにわたしはユーノくんにやらされてるんじゃないやありません！自分で手伝いたいと思ったから手伝ったって言うてるじゃないですか！」

「オレでさえちよつと苦戦したのにてめーになにがでkindだよ！」

優のこれは当然の意見だ。

史上最強の戦闘服を身に纏い、卑怯も外道も無く命のやり取りが行われる裏の世界でそれらを打ち破ってきた優が、（直前の戦いで受けたダメージがあつたとは言え）苦戦するほどのバケモノをどこにでもいる普通の小学生がどうしようというのか？

このように質問すれば10人中10人が「なにもできる訳がない」と考えるだろう……とはいえ、ユーノの話によるとなのは既にジユエルシードの封印に成功しているという。

ジユエルシードを封印できると言うならば「普通」というカテゴリーからは外れることになってしまいが、それでも子供が相手取るにはあまりにも相手である。

縦しんば封印できたと言っても恐らくは命の危険を伴う碌ろくでもない方法に違いない、と考えるのは自然の成り行きと言えよう。

故になのがなにを言おうが苦しい言い訳にしかない。そのような先入観もあって優は敢えて自分を納得させられる答えなど出るはずもない質問をしたのだ。

「おみなえさんよりもっと確実に封印できます！」

「……………」

ところが……

「おみなえさんよりもっと確実に封印できます！」

「……………」

予想の斜め上を第一宇宙速度でぶっ飛ばす答えが飛び出してきた。大事なことなので2回言いました。

妖精の驚愕なの

「おみなえさんよりもっと確実に封印できます！」

「……………」

言葉の意味が分からない。何を言っているのか理解できない。そこで優はなのはの言葉の裏を測り、一つの結論に達した。

(もしかしてオレより強いって言いたいのか?)

優は自分の事を過大評価したことはないが、それでも普通の人間の兵士やサイボーグの部隊、獣人が相手でも装備を整えさえすれば単独でもまず負けることはないと自負しており、実際にそう言った結果を出している。

そんな事実もあり、戦闘経験が無いどころかまともな武器すら持たない小学生が自分より強いなどとは到底思えなかった。

「……………」

互いが黙り込んでいる中、優はなのはの発言の意図を探る。

なのはは「困っている人を見たら放っておけない」という典型的なお人好しだ。正に「義を見て為さざるは勇無きなり」を体現した性格と言えよう。

ユーノのジュエルシード集めを手助けしようとしているのも、昨晩になのはを逃してジュエルシードから飛び出した悪霊と戦っていた優の元へ戻ってきたのもそのためだろう。

そこまではいい、そこまでは。問題はジュエルシード集めに適した能力を持っているかどうかである。

ジュエルシード集めに最も必要なのは、悪霊をジュエルシードの中に再封印する力、悪霊の依り代であるジュエルシードを破壊する力、悪霊を直接滅ぼす力のいずれか。これを持っていなければどれだけ強かろうがなんの意味もない。戦えば無限のスタミナに押されたいずれ力尽き、敗北するのみとなるからだ。

次に重要なのが戦闘能力。生きて目的を達成するためには欠かせない能力だ。

強ければ己の身だけでなく仲間の身や何も知らない一般人の身も

守れる。

また悪霊は実体の無い霊体であるものの物理的干渉は可能なので、霊体を飛び散らせて時間を稼ぐことができる。そうでなくとも最低限己の身を守る程度の力が無ければ話にならない。

そして最後は「逃さない」こと。悪霊は常に暴れ回る凶暴で危険な存在だ。速攻で倒せれば特に気にするものではないが、それが叶わずもし取り逃がしてしまえば被害は瞬く間に拡大してしまうだろう。それだけは絶対に防がなければならぬ。

ここで再びなのは話に戻ろう。なのは特に殺傷性のある武器を持つている訳でもなく、父親が父親だけにあの剣術は習っている可能性はあるが、ほぼ間違いなく士郎程の腕は無い。

ならばどうやってこの危険な事に関わろうとしているのか？

(…そうだ、そういえば…)

ここで優は一つの予想が浮かんだ。

「ユーノ」

「はい！なんででしょうか！」

「そんなにビビられるとけっこうヘコむんだが…」

「あ、す、すみません。では改めて…ボクになにか？」

「お前、やっぱりなのはに『なにか』したのか？」

「……はい」

やはりなのはユーノによって戦う術を手に入れていたようだ。それならばなのは強気も合点がいく……が、その力がどのようなものか分からない以上は素直に認めるわけにはいかない。

そこで優は……

「…じゃあなのはも魔術が使えるってことか？」

「はい…」

その力について追求をしたところ、これもまた予想通りの答えだった……と思いきや……

「やっぱりな。そんなことだろうと……」

「あ、間違えた！使えるのは魔法です！」

「わかったわかった、魔法だろ魔ほ……」

優はこれ以上聞くのは面倒に思っ
て軽く流そうとするが……

「魔法!!」

「え?」

予想もできなかった答えに思わず
声を上げて食い付いてきた。

「魔法」の使い手なの？

「魔法!!？」

「?」

優の世界で言う魔法とは、魔術の上位にあたる超高等術式である。世の理すらも超越するものもあるという魔術など足元にも及ばない程に圧倒的で強力無比な力を持つ魔法は、強力であるが故に魔術よりも条件や制約が非常に厳しく、それを行える者が限られている。

(そっぴやさつきも魔法って言ってたな…。話の流れでスルーしたまま忘れてたぜ。たが…！)

魔法は物理的な存在ではないが、人知を超えた力を行使できるという意味では魔法そのものがオーパーツと言ってもいいだろう。そのような恐ろしく強大な力をただの一個人が入手し、あまつぎ剩え行使するなど天地がひっくり返ってもあり得ないことなのだ。

「ウソつくくんじゃねえ！魔法を使える奴なんか裏の歴史上でも数十人しかいねえんだぞ！」

裏の歴史上ですら稀な「魔法」の使い手は、優の場合は名前だけなら記憶しているが実際に魔法を見たのは1人だけ。何を隠そう以前にも説明したあのヘウンリー・バレスだ。

彼は魔術の中でも著しく人道に反し蔑視される「呪術」に手を染めた「呪術師」と呼ばれている。そんな彼はとある事情から人間そのものを強く憎むようになった結果として魔道に入門し、その過程で「バベルの塔」と表裏を成すもう一つのバベルの塔：リバースバベル「混乱の塔」の存在を知った。

彼はそこに眠っていた「混乱の魔法陣」の発動によって「カオス混沌（この世の法則に左右されない圧倒的な力。隠語では『魔王パズス』と呼ばれる）」を呼び出し、人間の「人格を構成する要素（記憶・思想・価値観等）」を全て消し去り、それらを「無からの再生」によって思うままに作り変えて自分の理想の世界を生み出そうとしたのだ。

混乱の魔法陣を発動させるには、新鮮な血液によって完成する六芒星及び触媒となる新鮮な死体^{生け贄}、大量の人間の魂を必要とする。

この魔法は捧げる魂の数によって効果範囲が増減し、地球全体に効力を発揮するには数万人分の魂が必要となる。ヘウンリー・バレスは戦争多発地帯の国から数年かけてそれだけの魂を集めたと言うわけだ。

「ウソじゃありません！」

「ウソに決まってんだろ！魔法は魔術なんかよりはるかに…」

「ユーノくんにもらった『これ』で使えるようになったんです！」
「？」

なのははそう言うと、首にかけていた首飾りの丸く赤い宝石を掌に乘せて差し出した。

「それが魔法の源だと？他ににもいらねえのか？」

「いいません。これだけです」

「へっ、信じられねえな」

優が信じられないのも無理はない。魔法の発動は本来「魔法陣」「外部からの莫大なエネルギー」「その他特殊な条件」が必要だ。

それら全ての準備を完了するには長い時間を要する場合は殆どで、長いものになると優に100年を超えるものすらある。ここまで来ると世代を跨がなければ不可能な時間だ。

「じゃあ今から証拠を見せます。ユーノくん、戸締まりよろしくね」

「う、うん！任せて！」
「!!?!」

魔法を使えるという証拠を今から見せる…。それはすなわち今ここで魔法を使つて見せるということだ。

それがどんな魔法か分からないが、魔法である以上はどんな悲劇が引き起こされてもおかしくない。

「ま、待て！こんな場所でなんの魔法を使う気だ!?!」

「変身するだけです」

「へ?」

「遮断結界展開！」

なのはは一言そう言うとユーノが結界を展開。同時になのはが宝石を両手で握り締めながらにやら眩き始めた。

「風は空に…星は天に…」

(な、なんだ？なのはの気配が…)

優はなのはの気配が異様なものになっていくのを感じる。

「不屈の魂はこの胸に…！」

(宝石からもなにかが…！)

更に何故か宝石からもなのはと同質の怪しげな気配を感じ取った。
そして……

「レイジングハート！セー……ットア……っプ!!」

「!？」

なのはが桜色の光に包まれたかと思われた瞬間、その光が弾けてなのはが再び姿を現した。

妖精の見定めなの？

「ふう……」

「な……」

桜色の光が弾けて再び姿を現したなのは。その姿はととも一瞬で着替えたとは思えない、異様な姿だった。

白を基調としたドレス風の服、服に不釣り合いな金属製の青い籠手ガントレットのような袖、ツーサイドアップの付け根に結ばれた白いリボン。そして極め付きは機械じみたデザインに加えてなのはが先程見せた赤い宝石が先端の囲いに浮いた奇妙な杖だ。

まるで漫画かアニメのコスプレではないか。だがそんな野暮なツツコミもすぐさま頭の隅に追いやられ、目の前の事実には優は動揺する。

「これで信じてもらえましたか？」

（霊気じゃねえ、妖気でもねえ……。人のものとは全く違う気配……。これが…魔法…！）

「あ、あのー？」

なのはの奇妙な姿だけでなく、気配にも動揺する優。これまで感じたことのあるどのタイプにも当てはまらない、異質で異様な未知の気配だ。

（でも魔法つつつても思ってたのと全然違うな…）

「おみなえさーん？」

（あ、そういやユーノはさつき結界魔法が得意って言ってたな。軽く流しちまって忘れてたぜ）

「聞こえていますか？」

（その結界魔法とやらも魔法と言うには弱すぎて、元の世界で言えばせいぜい強力な魔術ってところだな）

「ハロー？」

（そもそも、その気になりやアンドヴァアラナウトなしでも再現できるから論外だけだな）

「にーはおっ？」

ユーノの結界魔法はアンドヴァアラナウトを使っている分非常に高速かつ強力ではあるが、効果自体はこの世の理から逸脱するほどのものではなく、その気になれば特別な準備もなしに再現できるものなど元の世界では魔法とは言わないのだ。

(…つてことはこの世界じゃ魔法は元の世界の魔術と同じくらいで、元の世界の魔法と比べりゃそんなにやばいもんじゃねえのか?)
「もしもし?」

だが、ただの人間が霊気でも妖気でもない人間とはかけ離れた気配に切り替わるというのは常識では考えられない現象だ。

(いや、こんな一部分だけ見て決め付けるのは危ねえな)

「おーーい!」

(よし、じゃあ今度は実際に…)

「おみなえさん!!!」

「うわっ!」

顎に指を当てて考え込んでいる優の顔を、なのはが強引に覗き込んで一喝。完全に自分の世界に入り込んでいた優は意識外からの咆哮(?) にビビって思わず声を上げてしまう。

「お、おどかすんじゃないよ!」

「わたしの話を聞いてくれないからですよ!!」

「あ」

「で、どうですか?これで信じてくれましたか?」

「むう…それは…」

言葉が詰まり、答えに困る優。しかし数秒後にやっと口を開くと…

「だったら本当にお前が戦えるのか見せてもらおうじゃねえか」

なのはの言葉を信じ、その実力を見定める決心を固めたのだった。

「魔法」の天才なの

「だったら本当にお前が戦えるのか見せてもらおうじゃねえか」

「ここまで来たら頭ごなしに否定することもできない。そこで優は
…

「おみなえさん、それって…!」

「勘違いすんなよ。飽くまでもお前が実戦で役に立つかどうかを見る
だけだ」

「なのはの實力を見極めようと決めた優はさっそく予定を立て始め
る。」

「でもここじゃなにも見せられませんけど…」

「お前ら、当然訓練くらいするよな?」

「はい。今日からユーノくん色々教えてもらいます」

「よし、じゃあその訓練を見せてもらおうぜ。今日は何時からどこでや
るんだ?」

「はい、お昼ご飯を食べてから近くの山の中で…」

この話し合いのあと優は結局竹刀を振るうことはなく、家に戻ると
昼食までなのはと再び98UMでの対戦に戻り、今回は二人とも勝負
が単調にならないよう最初は好きなキャラ、次はルーレットでチーム
構成をランダムと交互に繰り返した。

その結果、戦績は20戦9勝11敗。

普段は運の強い優であったがこの日は何故かとても弱くなってお
り、逆になのははいつもより運が強く、ランダム対戦は優の全敗で
あった。

さすがの優も低ランクのキャラを何度も引いては強キャラのいる
チームに勝つのは容易ではなかったという訳だ。

「裏ビリーとチャンと裏テリーでクラウドザーと庵と影二にどうやって
勝ってんだよ…」

「ま、まあランダムでしたし?クラウドザー以外は無駄でしたし?運の
無駄遣いでしたし?」

「ああ、クラウドザー一人でオーバーキルだったもんな…」

(あ、なぐさめが逆効果…)

しかも最後の一戦は優が性能最弱クラス三人のチーム、逆になのは最強クラス三人のチームというスーパードスマッチとなった。その戦力差は某乙戦士がナ○パに挑むが如く絶望的だ。

ちなみになのは何回か大門を当てたのに優は結局ジョーを一度も当てられなかったとき。

午後一時を過ぎると「なのはに街を案内してもらおう」と言つて高町家を出てさつそく山へ向かい、ユーノが半径100メートル程の結界を展開する。

「これでいくら派手に暴れても大丈夫です」

「この結界内の音も光も外に漏れないってことか？」

「それだけじゃありません。この場所に近づく生物の意識から結界内全ての存在を認識できなくして無意識に立ち去らせます。昨日の結界もこの認識阻害と閉鎖の2つを組み合わせて張ったものなんですよ」

「なん…だと…」

「本当は封時結界を張れたら良かったんですけど、それはまだ修行中なので確実なやり方で行きました」

(どつちにしてもすげーよ！)

ただでさえ高難度の結界を易々と張っただけでなく、もつと高難度である結界の合成まで成し遂げたと言うユーノ。優はユーノのあまりの天才ぶりに開いた口が塞がらなかった。

「じゃあ始める前に魔法の基礎から教えるよ、なのは」

「はい！よろしくお願いします！」

「なあ」

さつそくユーノの魔法講義が始まった…と思いきやそこへ優の横槍が入る。

「はい、なんですか？」

「オレは魔法使えねえけど後学のために聞いていいか？」

「どうぞ。でも御神苗さんも使おうと思えば多分使えると思います

よ」

「ん？なんでそう思うんだ？」

「御神苗さんは昨日、ボクの助けを求める声が聞こえてたんですね？」

「ああ」

「あれは念話って言って、魔導師：延いては魔力を持つ人じゃないと聞こえないものなんですよ。あの時の念話は誰にでも聞こえるようにしてみましたけど、届ける相手を絞ることもできます」

「じゃあオレは魔力があるってことか」

「はい。その魔力があるっていうことは魔法を使える土台があるっていうことです。あとは魔法の基礎を覚えれば大丈夫だと思います」

「そっか。まあ、話半分に関いとくぜ」

意外や意外、なんと優にも魔法の素質がある事が判明。しかし優本人は乗り気ではなく、あまり興味がなさそう。だ。

「でも念話ってのは便利だな。それくらいはできるようにしてえな」

「そういうことならなのはの訓練のあとに教えますよ」

「おう、じゃああとで頼むぜ」

無線機もなしに即座に意思の疎通が可能になれば、作戦行動の精度は格段に上がる。それ故に「これだけではできるようにはしなければならぬ」と優は判断した。

雑談も終わったところでついに優にとって未知の領域である「魔法」の秘密に迫る時間：ユーノの魔法講座が始まる。

「まず始めに『リンカーコア』のことからお話しします」

「リンカーコア…」

「リンカーコアとは魔力の生成機関のことで、臓器のように体内に存在しますが、物理的な存在ではないので特別な手法でないと触ることも見ることもできません」

「じゃあオレにもそのリンカーコアってのがあるのか」

「魔法を使える人じゃないと見えないしさわれないってこと？」

「まあ、そういう認識でいいかな」

「そんなもんが普通の人に見えてたら手術の時にえらい騒ぎになるだろうからな」

「で、そのリンカーコアが大気中に漂っている『魔力素』と呼ばれる魔力の源を取り込んで魔力を生成するんですよ」

「その魔力素ってのはどこにでも存在するもんなのか？」

「理論上、故意に取り除かない限りは大気中に存在しない場所はないです。だから場所に関係なく、消費した魔力は休めば自然に回復します。」

基本的には寝ると一番早く回復しますね。あと、リンカーコアを制御できるようになれば自然回復より早く回復できるようになりますよ」

「ふむ」

「そうして生成された魔力を特定の技法で操作して『変化』『移動』『幻惑』のいずれか単独又は組み合わせた作用を引き起こすのが魔法です。」

もうちよつと分かりやすく言うと……自然摂理や物理法則をプログラム化してそれを任意に書き換えたり、書き加えたり、消去したりすることで前述の3つの作用に変える技法ですね」

「うーん……。ユーノくん、よくわかんないよー」

「そうだね……。作用を三つの絵の具、自然摂理や物理法則を水や油として考えればもつと分かりやすいかな。」

要するに『三色の絵の具を水や油を加えて調整しながら組み合わせ
て自分に合った色を生み出して使うようなもの』、かな」

「三原色みたいなものなんだね」

「うーむ…」

「おみなえさん、どうしたんですか?」

「やっぱり似てるな」

「似てる?なにがですか?」

「オレの仕事で言う魔術とお前らの言う魔法がだ」

ユーノの魔法講座の最中、優が突然意味有りげな言葉をつぶやく。

「どういうことですか?」

「物理法則を書き換えるのが魔術とかつて話はオレの仕事仲間から聞
いたことがあるんだ。それに『魔術はいつか科学で解明できる』とも
言ってたな」

「ボクの知ってる魔法は素質云々は抜きにして、技術として体系化さ
れていますよ」

「そつちの魔法は解明つて点においては遙か先に進んでるんだな」

似たもの同士である魔術と魔法ではあるが、こちらの世界の魔法は
優のいた世界の魔とは比べ物にならない程に発達しているようだ。

「まあ、そいつの使う魔術は日本の陰陽道とか中国の仙術とかその他
色々な術のいいとこ取りらしいからかなりややこしいんだが、そいつ
の中では既になんらかのロジックができてるからこそそのハイブリッ
ドなんだろうな」

「それって呼び方が違うだけでこつちと同じ魔法つてことじゃないん
ですか?」

「オレは魔術の専門じゃねえから断言は出来ねえが、お前らが魔法を
使ったところを見る限りプロセスや作用がちがうみたいだ。オレの
知り合いののはそれらが別のものに見えたぜ」

優の話している人物の名は「ティア・フラット」。スプリガンに所属
しているS級特殊作員の1人だ。

彼女の組織での立ち位置は特別なもので、アーカム財団に協力はし
ているものの、生い立ちやアーカム財団に協力する理由など全ての素

性を隠しており、彼女自身は協力的ではあるものの命令の拒否権や単独行動の権利を与えられているためにも強制できないのだ。

そのため、優はおろかアーカム財団の誰一人として彼女の秘密を知っている者はいないという訳だ。

「それは興味をそられますね。その知り合いの人はどんな魔ほ…魔術を使うんですか？」

「本人曰く何百個も使えるらしいが、オレはそのほとんどを見たことがねえ。よく使ったのは空間歪曲、物質透過、エクトプラズム霊物質の加工、隔離空間創造あたりだな」

「く…空間の創造!?どんなものなんですか!？」

「地面も空気もあるが真っ白でなにも無い、そして無限に広がってて、出口が存在しない空間だ。しかも本人だけは出入り自由なんだぜ。」

オレはお仕置きで一回閉じ込められて、たった数時間で気が狂いそうになったんだ」

「こ…怖い人ですね…」

「だろ？」

そんな正体不明の女をアーカム財団が抱え込んでいる理由は、世界中を探しても存在しない…彼女の唯一無二の技術である「術式の応用・合成」によって、戦闘だけでなくあらゆる任務を極めて高いレベルで遂行することができるからに他ならない。

これほどに優秀かつ貴重な人材を招き入れない理由もなく、また彼女の能力を他の敵対組織に使われることで彼女が極めて重大な障害になってしまうことをアーカム財団は恐れていたのだ。

「やり方は!?いったいどうやってそんなものを作ってるんですか!？」

「はつきり言っつてわかんねえが、あいつは間違いなく遺跡の力を使っつてねえ。しかも相手の警戒を他に向けさせてる隙にいつの間にか使つてるから、発動時間も多分数秒程度だ」

「たった数秒でなんの補助もなしに!？」

「厳密には一度作った空間がそのまま残ってて、そこへの出入り口を開閉してるんだそうだがな」

「それでもそんな空間を作れるなんてすごいですよ!そんなの人間業

「じゃない…神業だ…」

「どうやらこちらの世界でも空間の創造まではできないらしい。考えてみれば敵味方含めてもそんなことができる人物はティア1人しか見たことがないので、優にしても大変に珍しい訳ではあるが…」

「神…ねえ。まあ、神かどうかは置いといてそいつはホントに人間じゃねえんだけどな」

「ど、どういうことですか？」

「『魔女』だからだ」

「魔女？魔術師じゃなくて魔女ですか？」

「ああ」

「このように優秀な人材であると同時に危険人物とも言えるティアだが、彼女の生い立ちについて1つだけ信憑性の高い推論がある。

「魔女ってホウキに乗って空を飛んだり、杖を振ってチチンパイパイみたいな呪文を唱えたりするみたいなイメージしかないですけど…」

「そりやマンガのイメージだろ。本人から聞いた訳じゃねえけど、見た目は20代後半くらいだが実年齢は多分100歳どころじゃねえはずだ」

「ひゃ…」

「100歳以上…！」

「年齢については職場にも秘密で、年齢のことを聞くと怒るから確かめようもないけどな」

「そんな年齢で20代の若さを保ってるってことは……不老不死の魔術でも使ってるんですか？」

「魔術かどうかはわかんねえし不死かどうかは知らねえが、少なくとも不老能力だけは確かにあるな」

「ティアは各分野の術式やオーパーツについて広いだけでなく深い知識を持っており、中には現代では解明されていなかったり、敵対組織との戦いの中で失われたものや、80年前にアーカム財団に封印されて以来内部の人間でも極一部の者にしか伝えられていないオーパーツのことを彼女は知っていた。これは少なくとも80年は遡り、その80年前の時点でそれなりの年齢でなければあり得ないことだ。

ただし、前述通り本人に確かめることは不可能であるため、これは飽くまでも推論である。もつとも、年齢がわかった程度で大した意味はないので気休め程度あるが。

「はあく……。おみなえさんの仲間ってすごい人がいるんですね」「それだけじゃねえぞ？他にもへ々な国の軍隊より強い少人数のコンバットチームとか、バカな獣人とか、世界最強の氣法師とか：他にも色々いるぜ」

「もう守護者っていうよりは超人の戦闘集団ですね……」

「それくらいのもんツじゃないと遺跡の先取りはも守護もできねえつてことさ。さあ、そろそろ本筋に戻ろうぜ」

「あ、そうでした」

「おみなえさんが自分で逸れていったのに……」

「そうだったか？」

魔法講座から思わぬ方向に逸れていった話ではあるが、なのはとユーノはこの話を聞いて俄然優の話に興味を持つのだった。

魔法講座なの ― 2

「それじゃあさっそく訓練を始めようか。なのは、準備はいいかい？」
「うん！バッチリ！」

優の横槍により中断されていた魔法の講義も終わり、実際に魔法を使用した訓練が始まろうとしていた。

「じゃあまずは基礎からだ。心の中にイメージを描いてそのイメージを……」

「うん……」

なのはが始めたのは魔法の制御の基礎である魔力弾のコントロール。本来はこれを習得してから応用したり上級技術へステップアップしていく。……本来は、だが。

「うう……。うまくいかないよ……！」

一時間後、なのはは魔力弾のコントロールを続けていた。魔力弾自体は撃ち出せるが、あらゆる方向へ飛んでいたりUターンして自分に戻ってきたりと散々なノーコンっぷりである。

「まだ初日だし仕方ないよ。……でも昨日は練習もせずにあんな凄いことができたのになんで基礎の方ができない………はっ!!」

ユーノはある事態に気付いて急に言葉が止まるが、もう肝心な部分は全て喋ってしまっているので意味はない。

「………ユーノ」

「はい！何でしょうか！」

「すっかり忘れてたが……説明、してくれるよな？」

「わ……わかりました……」

予想通り優が静かにユーノへ語りかけると、ユーノは敬礼しながら優へ振り向く。ユーノは優の冷たい視線に冷や汗をかきながら説明を始めた。

「………以上です」

「………マジかよ………」

ユーノの撮っていた映像を、ユーノの解説を交えながら見た優は絶句した。

なのははユーノの援護すらなく、単独でジュエルシードの悪霊を3体同時に相手取り、それらを全て封印してしまっていたのだ。

しかもその時は飛行魔法・射撃魔法・防御魔法・封印砲撃魔法を全て使いこなしていた(ただしこの時の射撃魔法は接射だったのでコントロールの必要はなかった)。

「あの体当たりをノーダメージで完全に止める上にカウンターダメージを与えられる防御、長距離を正確に狙い撃てる上に当たれば一撃で終わる砲撃…。そして自由度の高い飛行能力に近接戦闘用の射撃…。

実戦ではうらやましいくらいに理想的なバランスだな。格ゲーなら間違いなく強キャラだ」

(かくげー?)

「あんまり認めたくねえが、ジュエルシードの無力化って点においてはオレよりお前の方が上みたいだな」

「えへへ。おみなえさんにほめられた♪」

やっと自分を認めてくれたことに喜色満面となるのはである。

「よし、決めた」

「え?なにをですか?」

「オレもお前の特訓に付き合う」

「え!?!」

そして優の発言に対しシンクロして驚くなのはとユーノであった。

「でも魔法を使うのには興味なかったんじゃない?」

「魔法を使うのにはな。だがオレが付き合うって言ったのは魔法じゃなくてなのはの訓練だ」

「……………」

呆気にとられるのはとユーノ。2人は無言で向き合ってから再び優の方へ振り向き、ユーノが口を開く。

「どうしていきなりそんなに協力的になつてくれるんですか?」

「あの映像だけで全部認めたわけじゃねえからな。どれほどのもんか確かめたくなったんだ」

「そ、そうですね…」

やっぱりそうですね…と落胆の色を隠せないのはだったが、優

は言い過ぎたと思ったのか顔にしわを寄せて頭をかきながら話を続ける。

「…えーと、それとだな…。これから一緒に戦うんなら互いのことをもっとよく知つといたほうがいいだろ」

「え…」

「そうすりや連携もフォローもしやすいしな」

「お、おみなえさん…!」

優が渋々ながらも共に戦うことを了承してくれた。なのははその事実だけで胸がいつぱいになり、思わず目頭に熱いものがこみ上げてくる。

「…フフツ」

「なんだよユーノ、気持ちわりい笑い方だな」

「なんでもないですよ。気にしないでください。(やつぱりこの人：口は悪いけど優しい人なんだな)」

こうして優と2人の間に流れていた重い空気が浄化されるのだった。

(早いとこ芳乃と帰る方法は見つけてえが…)

優としては一刻も早く芳乃と共に元の世界へ帰りたいが、ジュエルシードの事を他人任せにするには危険な代物だ。

(あんなものを人の手に渡す訳にはいかねえ!)

生物に強大な力を与え、また自らも破壊の権化と化す悪夢の宝石ジュエルシード。オーパーツと同様の脅威となり兼ねないロストロギアの存在は、スプリガンの誇りに賭けて許す訳にはいかない。

(それになのはも心配だし…：さつきはああ言ったが、ユーノの一族つてのを見捨てるのも寝覚めが悪いしな)

放っておけばどんな危険も顧みずに自ら厄介事に首を突っ込み兼ねないのはと、一族の未来のために1人で責任を果たそうとしていたユーノ。

先程悪態を吐いたものの2人の強い意志を目の当たりにして少なからず影響を受けた優は考えを改め、年齢不相応な使命感を抱いてい

る2人の力になろうと誓うのだった。

A・Mスーツの秘密なの

「……………」

優の準備運動する様子をチラリと見てからおもむろに顔を合わせるなとはユーノ。和解はしたものの、優が協力的なことに対する違和感が若干ながら残っているのだ。

「で、ユーノ。今はなにすんだ？」

訓練メニューによっては優が参加できない場合もあるので、優は準備運動しながらユーノに確認を取る。

「もう少し魔力弾のコントロールをやります」

「じゃあオレが的になつてやる。なのは、お前はオレを狙え」

「え?!なんでそうなるんですか!?!」

「どうせ当てる訓練をやるなら闇雲に撃つたりただの的当てをするよりは考えて動く仮想敵がいた方が実践的でいい経験になるだろ？」

「そういう問題じゃない!」と心の中でツツコミを入れるが、当然ながら優に心の声が届くはずもない。

「あ、危ないですよ!」

「心配すんな。当たってやるつもりはねえ」

「それでも万が一当たったら…!」

「…はあ、仕方ねえな。よく見てろ」

優は2人の些細な問題にため息を一つ吐きながら自分の腕をまくると、その下からラバースーツとプロテクターで覆われたような腕が現れる。

「あ、それってあの時の…」

「おお、覚えてたなら話は早えや。ユーノ」

「はい、なんですか？」

「お前は当然魔力弾のコントロールはできんだろ？」

「まあ、基本ですから人並みには…」

「よし、じゃあ試しにそこから魔力弾でオレの腕を撃ってみろ」

優は腕を横に伸ばしながら話を続け…

「ほ、本当にいいんですか？」

「いいから言っただよ！早く撃て！」

「はい！いきます！」

ユーノは優に怒鳴られると、言われるまま人間の握り拳大の魔力の塊を撃ち出した。

（お、口だけじゃなかったな）

自分で基本と言うだけあってなのはと違い、ユーノの魔力弾は微塵の軌道修正もする必要なくまっすぐに優の右腕を目掛けて飛んで行く。

「ふん！」

「え？」

優もそれを確認すると次の瞬間、A・Mスーツの右腕だけを起動して右の掌で魔力弾を受け止めると、それが霧散するように消え失せた。

「な？平気だろ？」

噛み合わせた白い歯を見せながら怪しげな笑みを浮かべる優と、またしても呆気にとられてしまう2人だった……が、流石に今度は立ち直るのが早かった。

「魔力弾がおみなえさんの右手に衝突したら勝手に弾けた!？」

「い、いや……。弾けたというよりは『分解』されたような……」

「あ……それはだな……」

あまりにも困惑する2人を見ながら「やっぱり最初に説明しとくべきだったかな」とちよつとばかり反省しつつも、優は今起こった現象について説明を始めた。

「このスーツはA・Mスーツって言ってな、筋力を数十倍にしたり他にもいろんな機能があるんだが……」

「……………」

「今のはその機能の一つで、装着者の精神エネルギーでスーツを覆うことでありとあらゆる耐性が付くって機能なんだ。起動してなくてもある程度の耐性はあるんだけどな。」

ぶつちやけるとオレもちよつと説明を聞いただけなんで詳しいこ

とはよくわかんねえ。でもそれは多分魔力でも同じだろうって踏んで試してみたんだが、その読みが当たったって訳だ」

「え……」

「それじゃあ成功するかどうかもわからないのにあんなこと試したんですか!？」

「別にいいじゃねえか。確率が高いからやったんだよ」

「そ、そうは言っても……」

「でもこれでもう納得したよな？」

「………なのは」

「まあ、結果的に大丈夫だったんだし……いいんじゃないかな？」

「そ、そう……（これは「慌てて撃ったから非殺傷設定にしてなかったのでもし生身に当たってたらかなり危険でした」なんて言えないな……。あ、まだこれ教えてないから関係ないか）」

（ホントはなのはの映像を見て、サイコブローが魔法と同じように悪霊に効いてたからイケるって思ったんだけどな）

釈然としないながらも、自分のミスがうまく隠せたことに安堵するユーノであった。

「……ん？　そういえば……」

「なんだ？　質問でも思いついたか？」

「質問というか思い出したことなんですけど……」

「歯切れわりいな。早く言えよ」

ユーノがなにやら気になることを思い出したらしいが、すぐに言い出さずにモジモジしているのが優が催促する。

「御神苗さんは昨日、ボクの結界から弾かれずに中に残ってましたよね。それってもしかしてそのスーツのおかげなのかな……って思ったんですよ」

「オレもよくわかんねえけどその可能性は高いだろう。でなけりや説明がつかねえしな」

「そうですか。やっぱり構造がすごく気になるスーツですね……」

「あ、そうだ！」

ユーノはA・Mスーツの不可思議な機能に興味津々のようだが、なのは全く別のことに気を取られていた。

「おみなえさん、そのスーツの背中に大きいキズありませんでした!？」
「ん？ああ、たしかにあるけど機能性に問題はねえぞ」

「スーツの心配じゃなくて！おみなえさんの背中は大丈夫なんですか!？」

「もうとつくに治ってるよ……って言いてえところだがこればかりはすぐには治らねえな。でもキズは深くないから大したことはねえ」
優はボーマンとの戦いで、精神感応金属製のナイフで背中を斬り付けられて長さ数十センチの傷を負ったが、幸いにも背骨に達するほどではなかったため、そのまま戦闘を続行できた。

そしてA・Mスーツは装着者の意思によって起動する構造のため、仮にスーツの一部が損傷しようとも問題なく本来の性能を発揮できるのだ。

「……………ユーノくん」

「…さっきのきみの言葉をそのまま返すよ」

「だよー」

優の返答にあきれてユーノへ同意を求めるとような視線を送ったが、結果はこれである。

男同士の秘密なの

「あ、今度はわたしからいいですか？」

「ん？なんだ？」

続いてなのはの質問。優は軽い気持ちで何でも答えるつもりだったが、これが意外にも答えに困る難問だった。

「そのスーツとか武器って普段はどこに置いてるんですか？」

「!?」

まるで登校時に初めて染井芳乃と出くわした瞬間のような顔になって絶句する優。

それもそのはず、A・Mスーツおよび各種武器は士郎が密かに借りている倉庫に仕舞っており、このことは家族には「絶対に他言無用」と頼まれていたが、誰にも話してはいないもののうっかりしていざ聞かれた時のための言い訳を全く考えていなかったのだ。

「今思えばなんですけど、あの日おとうさんにおみなえさんを運んでもらった時にはあったそのスーツと武器がなくなってるのを思い出して気になったんですよ」

「そ、それはオレが…」

「気を失ってたおみなえさんがどこかに隠すことなんて無理だし…他の誰かが隠した可能性があるとすればおとうさんくらいしかいないと思うんですけど…」

「……………」

「でもおとうさんだとしたらその装備を隠した理由がよくわからないんですよ。わたしみたいにおみなえさんのことを知ってるならまだしも、普通は本物の鉄砲とか見たらすぐ警察に連絡くらいはすると思うんですよ」

「……………」

「おみなえさん、もしかしてそれに関してなにか知ってたりしますか？それともやっぱりおとうさんがなにかおみなえさんのことを知ってるのか？」

(やべえ…どうするオレ…！)

しかもなのはは冷静に分析して士郎に辿り着きそうになっており、優はバレかけているというプレッシャーと圧倒的に足りない時間という窮状極まるピンチの中でこの場をなんとか切り抜けるための言い訳を必死に考えた……が、しかし……

(実はわかってるけど……おみなえさんの口から本当のことを聞かせてほしいな)

そう……。

なのはは士郎がA・Mスーツと武器を隠したこと、優と士郎がそれに関連するなんらかの秘密を共有したこと、加えてその秘密を共有しつつ良好な関係になっていくことを知っている。知らないのはその装備の隠し場所、そして優と士郎の秘密の内容だけだ。

優が士郎に隠されたはずのものを持っているということは、少なくとも「優はその装備を返しても暴れず、危険のない人物である」と士郎に信用されていることがわかる。

正直言つて優の装備はA・Mスーツだけならまだしも、ナイフに拳銃に手榴弾という、平成のラ○ボーとでも言わんばかりに物騒なライオンナップだ。一般人から見れば「怪しい」を通り越して「危険」や「凶悪」、果てには「人殺し」と見做みなされても文句が言えない代物ばかりである。

幻影ではなく物理的に自分の身体をフェレットのような姿に変身させる少年、人知を超えた力で暴れる化け物、そしてその化け物を屠り去る強大な力である魔法……そんな超常現象と言っても過言ではないものを立て続けに目撃した自分ならまだしも、そんな物騒な装備を見た父が何故平然としていられるのか……。

なのはにはそれが分からなかった。そして自分だけその秘密を知らないということに疎外感を覚えた。

本来ならば核心を突いた質問で問い詰めれば大抵の人間は真実を語り出すが、優の性格を考えるとただひたすらに問い詰めようとしても逃げるだけだとなのはは考えた。

だからなのはは鎌をかけた。

敢えて真実に近い推測という体ていで質問することで優の下手な言い

訳を引き出し、それを論破することによってごまかしが効かなくなつた優が観念して本当のことを話してくれることを期待したのだ。

そしてその結果は……

「い……」

「い？」

「今は……話せねえ……」

「……………」

これである。

なにかしらの言い訳なら追求のしようはあつたが、このように回答自体を拒否されてしまうと取り付く島もない。作戦は大失敗に終わってしまったという訳だ。

「……………そつか。じゃあ…仕方ないですね」

「……………」

「でも…いつかきつと…話してくださいね」

「……………ああ」

憂いを帯びた双眸そうぼつで貼り付けたような笑顔を作るのはを直視できず、力無く相槌あいづちを打つ優であつた。

宇宙人なの？

「じゃあそろそろ始めるか！」

先程自分で振り撒いてしまった重い空気を打ち払うべく、心機一転してA・Mスーツを起動してから軽い準備運動をこなし、手の平と拳を突き合わせて気合を入れる優。

威勢の良い掛け声でなのはを元気付けようとしたが…

「でも…わたしがまちがっておみなえさんの顔にでも当てちゃったら…」

なのは自身も変身して構えてはみたものの、先程の出来事に起因するローテンションで元気が無く、そのせいもあって本調子とは言えず、それによるミスで優を傷付けてしまわないかと気が気でならない。

『危険なミスショットは私がコントロールして外しますので、ご心配には及びません』

「あ…ありがとうございます、レイジングハート」

「…へえ。その杖…てゆーか玉か。そいつ、もしかして人格でもあるのか？」

突如発光しながら言葉を発するレイジングハートを見た優は、思いの外冷静にその様を分析する。

「…おみなえさんは驚かないんですね。わたしは最初、けっこうびっくりしちゃったんですけど…」

「前に仕事で似たようなヤツに会ったことがあるからな。免疫がついてるってことさ」

「は、はあ…。似たような…」

「え!?この世界にインテリジェントデバイスを作れる技術があるなんて聞いたことないですよ!?!」

(インテリジェントデバイス?)

こちらの世界には簡単な受け答えや限られた言葉だけの会話程度なら可能な人工知能はあるが、自ら情報を取り入れて思考しながら他人を気遣って喋るような複雑なものはまだ存在していない…:は

ずだった。だと言うのに優はそれを見たことがあるという。

ユーノはそれが俄かには信じられなかった。

しかしながら優は「仕事で会った」と言っていたことから、恐らくはオーパーツ絡みである可能性が高い。そこでユーノは優に恐る恐る質問を試みることにした。

「さ、参考までにその似たようなヤツっていうのを教えていただけませんか？」

「んー、思いつきり碎いて言うと………宇宙人だな」

「宇宙人!?!」

優が今まで語ってきた仕事やオーパーツなどの内容には説得力があった。だが、その内容が「宇宙人」ともなれば話は別だ。

「宇宙人って銀色でおっきい頭で小さい身体の!?!」

「テレビのイメージと一緒にしてんじやねえよ」

「こっちは少なくともミッドチルダの銀河に他の生命体はまだ発見されてないんですよ!?!」

「そつちの事情なんて知らねえよ」

ユーノの話も歯牙にもかけず一蹴……と思いきや……

「その宇宙人はどこに住んでるんですか!?!」

「…あー……」

「どんな外見なんですか!?!」

「それはだな……」

「どんな能力を持ってるんですか!?!」

「おい、俺の話……」

「なんでこの星に来たんですか!?!」

「いい加減落ち着け!!」

ユーノは異常な程の食い付きを見せ、優はそれに辟易してしまつて話す気が少しばかり失せたが、仕方なく話すことを決めるのだった。

「……で、その似たヤツってのはだな……」

「……………」

(話しづれえ……)

優は話しながら2人の目をチラ見すると、先程と変わらず目を輝か

せながら食い入るように優を見つめて声を押し殺している。

「紀元前数千年前に地球に來た宇宙人……ってことなんだが、オレが会ったのは正確には宇宙人本人じゃなくて本人の人格と力をコピーした仮面なんだ」

「本人のコピー……人格モデルに使ったんじゃないかって人格をそのまま仮面に移したってことですか？」

「そういうこと。仮面だから肉体はねえけどな」

「……」

「……まだ疑問でもあるのか？」

「い、いえ……」

まだなにか言いたそうなユーノを見た優が気を揉んで質問を促すが、ユーノはそれを受け流す……が、優の推測通りユーノは言いたいことを我慢していた。

（ミッドチルダでは作り上げた人工知能は基礎となる人物の人格を数値化したものをインプットして、あとは学習させて明確な個性を持った人格を形成していきやいけないのに……。今の説明だと完成された人格をそのままインプットしてるってことになる）

ミッドチルダの人工知能は人格を数値化してインプットすると言っても、完全にその人物と同じ人格になることはなく、飽くまでも人物の模倣に過ぎない。

だと言うのにその宇宙人とやらは人格を完璧に複製できると言うのだ。

（肉体は無いとはいえ、それだとただのコピーっていうより人間の複製に近いぞ。そんなこといったいどうやって……）

ユーノが隠すことも忘れて思いつきりポーズを決めながら考え込んでいる隙に、なのも思い付いた質問をする。

「はい、わたしも一ついいですか？」

「いいぞ、なんだ？」

「そのコピーっていうのはどんな技術だったんですか？」

「そいつの星の科学技術と地球で学んだ魔術の賜物らしくてな、特殊な技術で作り上げた翡翠製の仮面に魔術で自分の人格を転写したそ

うだ」

「ヒスイ……って宝石とかに使われるあのヒスイですか？」

「ああ、そうだ」

「そんな石に人格なんて本当に宿せるものなんですか？」

「もちろんオレもそんなの無理だろうって思ったが、実物を見ちまったからな。そんな無理を可能にしてんのがそいつの技術と魔術なんだろう」

「……………」

その質問の答えを聞くとユーノは難しい顔をしながら黙り込み、優は青空を見上げながら物思いにふける。

(ケツアルクアトル……ちゃんと自分の星に帰れたんだよな……)

優はかつて共に戦い友情を育んだ宇宙人に想いを馳せ……

(そんな昔にそこまでの技術があるなんて……。この世界の大昔の文明って、下手をすればミッドチルダよりもずっと優れた文明だったのかもしれない)

ユーノは質問の後は最後まで黙り通しだったが、「この世界は自分が思っている以上に秘密と危険性を秘めているのかもしれない」と警戒を強めるのだった。

優のいた世界での話ではあるが。

誰の記憶なの？

「……………」

(す、すごい…)

「や、やるじゃねえか…」

『お見事です、御神苗氏。私の補助など必要なかったようですね』

「レイジングハート、お前なあ……………」

脱線した話が終わってから30分後の現在。

なのはが訓練で発生させた爆煙が風で流れると、中から両腕を交差させて防御態勢に入っている優が現れた。

煙の中から姿を現した優はあまりの精神的ダメージによって顔を引きつらせ、2人の様子を見守っていたユーノは口を開いたまま啞然としている。

「つーかなのは…。杖からじゃなくても出せるのかよ、それ…」

「あ、はい。そうみたいですわね」

「自分でやってくせにわかんねーのかよ！」

「なんかおみなえさんと一緒に訓練してるとなんかテンションが上がっちゃったっていうか…」

「なんだよそりや…」

(どういうことだ？ボクはそこまで教えてないのに…)

なのはは練習再開直後こそ相変わらずのコントロールの悪さだったが、何故かその目は直前までのオドオドしたものは打って変わって真剣なもので、10分後には既に動き回る優を正確に捉えられる程精度が向上していたのだ。ただし優はA・Mスーツを起動していないので、元々捉えられない程ではなかった訳ではあるが。

しかし問題はその後だ。その後なのははいつまで経っても優に当てられないことに業を煮やし、一時的に動きが止まってしまう。

攻撃を中断し、下を向いて黙り込むのはを見た優は「当てられないからって不貞腐れるなんてこいつらしくねえな」と気を揉んでなのはに近付き話しかけようとしたところ、なにやらブツブツと呟いていたかと思えば次の瞬間、自身の頭上に3個の光球を浮かばせてそこか

ら魔力弾を連射し始めたのだ。

これには優も不意を突かれて数発ほど直撃コースだったものを両腕で弾いて事無きを得たが、連射は止まらないのでバックステップで距離を置いて再び回避に専念。

ここからまた被弾無しが続くとなのは気迫を増しながら光球を6個に増やし、怒涛の連続攻撃を開始。コントローラーは若干落ちてはいるものの、更なる不意を突いて倍加した弾幕には優も回避し切れず、両腕で頭部を覆って防御を固めたという訳だ。

「なのは」

「なに？ ユーノくん」

その力を目の当たりにして疑問が湧いたユーノはさっそくなのはに質問する。

「その魔法……まさかとは思うけど、やっぱり自分で編み出したのかい？」

「うーん、編み出したっていうか……。よくわかんないけど、気付いた……ううん、『思い出した』って感じかな」

「思い出した？」

「思い出した……」

魔法に関しては、一般的には基礎どころか概念すら空想の産物として扱われている世界の人間が、魔法に関してなにを思い出すと言うのだろうか。

「よくわかんないけど、とにかくわたしの記憶にあった魔法なんだ」

「魔法のない世界で魔法を見た記憶がある？ どういうことだい？」

そんな疑問が口から出てしまいそうになるユーノだったが、流星にそこまで言うのは失礼に当たると考えてなるべく柔らかい言葉でなのはの答えを促した。

「うん。最初は全然おみなえさんに当たらなくてどうしようかって考えてたら『手数を増やすしかない』って思ったんだ。でも今のわたしじゃこれ以上の連射は無理だからどうしようって考えたの。」

するとその時頭に見た覚えのないイメージがいきなり浮かんできて、それを形にしようとしたらいつの間にかできてたんだよ。

具体的には『魔力弾の精製は一個一個やるとけっこう時間がかかるからどうしようもないんじゃない?』って思ってたらいきなり頭にさっきの魔法を知らない誰かが撃ってる映像が浮かんできて、それを見ながら『どうやってるんだろう』って考えたらなんとなくできたんだ」

「知らない誰か……。本当に見覚えはない? ないのにはつきりと覚えてる?」

「うん」

(覚えてないだけでボクに出会う以前に「知らない誰か」がその魔法を使ってるのを見たってことか? この世界の常識を考えるとちよつと信じられないけど……ウソをついているようには見えないな)

(他人の記憶か? まさか……いや。どっちにしてもなーんかきなくせえな)

「まあ、とにかく……これで基礎となる魔力弾のコントロールはバツチリだね」

「ああ、しかもこんだけの手数とコントロールがありやこの魔法だけで近距離から中距離は充分いけるぜ」

「ほ、本当ですか!」

「今のを実戦でやりやあな……って話だけだな」

「そのための訓練ですよ!」

「へいへい」

「ユーノくん! 次にいこうよ次!」

「ずいぶんやる気になったね」

(さつきはあんなに落ち込んでたくせに今はえらいはしやぎやがって……。心配して損したぜ)

「わかった、じゃあ次のステップだ。次は……」

ユーノも優も軽く流したように振る舞ったが、なのは本人ですら自覚のない記憶に違和感を覚える2人であった。

男同士の話し合い

翌日の訓練中のこと……

「ユーノ、ちよつといいか?」

「はい、なんですか?」

「ジュエルシードのことで聞いてえことがあるんだが……」

「ジュエルシードですか? いちおう古文書は読んでるので、その範囲での質問なら大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ……」

「優はなのはの自主練習の時間を利用し、ユーノに気になっていたことを質問することにした。」

「ジュエルシードはおかしくなる前はどんな状態だったんだ?」

「後で調べてわかったんですが、中身を封じ込める宝石とそれを収める箱の両方に封印が施されていたみたいです」

「じゃあこないだみたいに単体で暴れたりするような状態じゃなかったってことか」

「はい、その通りです」

「暴れてたヤツを見る限りではこの世界に落ちた直後から暴れてたつて訳じゃないみたいだが、なんか暴れ出す条件でもあるのか?」

「ジュエルシードはその性質から人や動物の負の感情を吸収する力を持っていて、それが一定値以上溜まるとあんな風になるようです」

「ふーん、じゃあそれまではどこにジュエルシードがあるかわかんねえみたいだな」

「そうでもありません。ジュエルシードはエネルギーの塊みたいなものです。核になっているあの化け物がエネルギーを生み出しているのである程度活性化すれば強いエネルギー反応を示して、上手くいけば暴走する前に確保することもできますよ」

「なるほど。その反応をなるべく早く見つけられれば手間が省けるんだな」

「そうできれば幸いなんですけどね。あ、そうだ。暴走する条件がもう一つあります」

「ほう、そりやなんだ？」

「強い魔力反応に晒されるとより激しく暴れてしまうみたいです」

「より激しく？なんでだ？」

「それは……よくわかりませんでした」

「そうか。でもそうなるにあんまりお前やなのはに探させるのはあぶねーってことになるのか？」

「いえ。さうとう強い魔力反応が近付くか、さうでなくて直接魔力流を受けない限りはそうはなりません。どこにあるのかわからないジユエルシードに魔力流をぶつけるの至難の技だし、そんな危険な探し方をわざわざする気はありませんから」

「それなら一安心だ。いくらなんでもこんな広いところじゃ、しらみ潰しに探すしかねえオレー人だっただらぜってー見つけらんねえからな」

「確かになのはも探すことはできますけど、見つけるのはボクの役目です。それはボクに任せてください」

「おう、頼もしいじゃねえか。だったらそれはお前に任せませ」

「はい！」

ユーノともすっかり打ち解け、和やかな雰囲気ですと質問を終えると、2人はなのはの自主練習をゆつくりと眺めていた。

そして特訓を開始してから3日後、優たちはついに試練の時を迎えることとなる。

第2章 雷の申し子 チームの初陣なの

訓練開始から三日後、陽が傾き始めた頃にユーノの「ジュエルシードが出現した」との呼び掛けで1人で目的地へ向かう優。

〈ユーノ、ホントにこっちにいるのか?〉

〈間違いありません。もうすぐです〉

〈じゃあそろそろ『あれ』やらないとだね〉

〈うん、そうだね。はあっ!!〉

なのはもユーノの呼び掛けを受け、単独で別方向から向かっていく。

距離が近いために先行していた優は会敵間近となり、ユーノは3人の中で最も遠くにいたため、なのはよりも遅れて最後尾で向かっていく。

ジュエルシードを結界の有効範囲内に捉えたユーノはアンドヴァラナウトを光らせると足元に魔法陣が現れ、指輪を空にかざすとドーム型の結界が一瞬で広がっていき、同時に空間加工によって自分達以外の生物を一時的に干渉不能状態にする。

〈やっぱりすげえな、こいつの魔術…じゃなくて魔法か。2つの結界を合成した上で位相まで操ってるのに、この広範囲を本当に一瞬じゃねえか〉

〈?…どうかしました?〉

〈ん、なんでもねえ〉

その様子を眺めていた優は驚きを隠せなかった。知識では分かっていたが、実際にユーノの魔法が使われる様子を見て改めて実感した。

〈これほどの技をいともたやすく使えるとなると、やっぱりアンドヴァラナウトは危険だ〉

ユーノの実力ありきとはいえ、アンドヴァラナウトは種類に関わらずあらゆる魔法に利用でき、無限に使える触媒・演算の省略・発動時

間の大幅な短縮・効果を増幅させるといふその力は、心無き者に悪用されれば未曾有の危機を生んでしまうだろう。

そんな事は避けるべきだ。あつてはならない。そうなればやるべきことは決まっている。

(封印か、破壊か…)

しかし、それに当たって留意しなければならないことがある。

ユーノが言うには、アンドヴァラナウトは先祖が発掘して以来代々受け継がれたものであると言う。そしてユーノの一族は遺跡の発掘調査を生業にしており、アンドヴァラナウトの他にも件のジユエルシードやその他オーパーツ…否、ロストロギアを幾度となく目にしてはいるはずだ。

だと言うのにユーノの一族はロストロギアの力を振りかざすことなく真つ当に生きているようなのだ。

そんな一族の中で、ユーノ本人もアンドヴァラナウトを悪事に使うことなく、むしろその力で自身の責任を果たそうとしている。そんな年齢不相応に誠実な少年から家宝と称する大切な物を奪っても良いものだろうか？

(だが心配なのは悪用だけじゃねえ。アンドヴァラナウトは…)

「おみなえさん！ボーツとしながら走ったら危ないですよ！」

「!？」

優が考え事をしているうちになのははいつの間にか変身した姿で追い付いており、そのまま空を飛びながら優を追い越していた。

「前に映像でも見たが、やっぱりそれって飛行魔法なんだよな？」

「はい。ユーノくんが言うには適性がないとどれだけ魔力が強くても飛べないらしいですけど」

(たしかに自分自身にサイコキネシスみたいなのを使ってるんじゃないかなさそうだな。完全な飛行能力ってわけか、便利だな)

「もう少し速くしてもいいですか？」

「楽勝だ」

なのはと合流するために速度を抑えながら走っていた優は、加減の必要もなくなったのでさっそくA・Mスーツを起動して速度を上げ

た。

「それにしてもまったく…。せつかくいいとこだったのにタイミングわりいな！」

優は直前まで士郎と軽い模擬戦を行なっており、互いに気分が乗ってヒートアップしそうになったところに呼び出しを受けて水を差されてしまったのだ。

ちなみに士郎には「なのはに町案内してもらおう約束を思い出したので出かけてくる」と極めて自然な方便（本人談）でごまかした。

「逆にわたしはタイミングよかったですけどね！」

「ふ、ふーん？」

なのはは昨日一昨日のことを二人の友達に心配され、その友達の家で根掘り葉掘り聞かれそうになったところで今回の呼び出しだ。

二人には言い訳もせずに二日とも「言えない」としか話しておらず、もともとウソをつけない性格であったため、今日も心苦しく「言えない」と言わなければならないのかと胸を痛めていたところに呼び出しが入り、「行かなくちゃ」と言つてその場を離れようとする。

二人はその時のなのはの表情を見ると、その真剣さを察して「今やってること全部終わったら絶対話しなさいよー」「わたしたちにできることがあつたら遠慮なく言つてね」となのはを送り出し、なのはも二人の気遣いに最大級の感謝の念を込めて「ありがとう」の一言を送つて現場へ向かつていった。

二人はその日以降なのはの謎の放課後について問い質すことを辞め、いつものようになのはに接するようになったという。

「それはそうともうすぐですよ！」

「た、確かに変な気配を感じるな」

ちよつとばかり不気味なくらいに上機嫌なのはに若干引きながらも、なのはに促されて気を取り直してジュエルシードに集中しようと決める。

「……か……」

「反応が近いですね」

人気の全くない森林地帯へと続く長い階段を駆け上がる優と飛ん

で登って行くのは。間も無く池を隣り合わせにした、開けた空間に
差しかかろうというタイミングで優はある違和感に気付く。

「しかもこちらはジュエルシードの気配じゃねえ、生物の気配だ。しか
も気配は強いが、生物ってよりは霊体…妖怪に近い気がする」
へまさかそれは…！

それを聞いたユーノは声色が変わり…

「ユーノ、どうした？」

へ気を付けてください！多分前の奴より手強いです！

更に語気を強めて注意を促した。その直後…

「…来るぞ!!」

「ガオオツ!!!」

気配の急速接近を察知した優の警告と同時に、敵は空から降ってき
た。

「こいつ、なんだ？」

「わたしも…わからないです…」

へやつぱりそうか…！

「グルルルル…」

優は咄嗟に前方へ飛び出し、なのはは急上昇して先制攻撃を回避。

開けた空間で身構えた2人の目の前には、ネコに似た風貌で大型の
草食獣並みの巨体を持つ異形の怪物が降り立った。

へユーノ、どういうことだ？

へそれはおそらくジュエルシードが生物に取り憑いて肉体を得た暴走
体！取り込んだ生物にもよるけど、前に出てきたやつの数倍の力を
持っています！

「え…」

「マジか…。よりによって今日って日にこんな厄介なヤツとはな…
！」

この日は優・なのは・ユーノの3人が共にジュエルシード確保に向
かう初めての日。理想としては発動前に抑えられれば良い…が、もし
仮に暴走しても戦闘のプロフェッショナルの優、対ジュエルシード戦
特化なのは、そして万能のサポーターであるユーノが揃えば、優が

初めて戦った程度の戦闘能力ならば楽勝どころか無傷で終わらせる自信があった。

しかし、一応優もなのも交戦経験があるとはいえ、数倍の戦闘能力を持ったものが相手となると全くの別物と言っても過言ではなく、相応の心構えや戦術が必要だろう。要は即席でとんでもない化け物に対応しなければならぬということだ。

「ど、どうしましょう…」

(でも待てよ？肉体があるってことは…)

そう、肉体があるということは物理攻撃が通用するということ。つまり、優もサイコブローを使用しなくとも倒すことができるということだ。

「グルルル…」

身構える優となのはに対し、怪物はヨダレを垂らしながら低く唸って睨み付ける。

〈おいユーノ！あの化け物を傷付けたら元の生物はどうなるんだ!?〉

〈ダメージを受けて衰弱はしますが、今のうちに倒せば死にはしません！でも急いで倒さないと同化が進んでそれも不可能になるかもしれません!〉

「なら速攻だ！訓練を思い出せよなのは！」

「はい！」

〈ユーノ！お前は急いで来い!〉

〈すぐ行きます!〉

怪物が身を屈める。いよいよ戦闘態勢だ。

「ガアアアア!!」

「いくぜ!!」

「へはい!!」

こうして3人がチームを結成してから初めての対ジユエルシード戦が開始された。

はじめての連携なの

「ガアアアアア!!!」

「いくぜ!!」

「へはい!!」

怪物の咆哮が合図となって弾かれたように優が正面切って走り出し、なのはは飛行魔法で上昇しながら優の後方を跳ぶ。

「!!」

「!?!」

その様子を見るや否や、怪物は周りの木々を軽く飛び越える跳躍と同時に瞬時に背中からコウモリのような羽を生やすと、それをほとんど羽ばたかせることなく鳥のように自在に空を駆け回った。

(霊体の時より遥かに速え!しかも…)

こうなってしまうと空を飛べない優はほとんど手出しができず、まともに戦えるのはなのはのみとなってしまう。

「なのは!」

「わたしに任せてください!」

「頼む!」

優の一言で自分の役目を即座に理解したなのはは、怪物の頭上を越えてある程度の高度まで上昇するとそこで停止。

「リリカルマジカル… 福音たる輝き、この手に来たれ…」

詠唱を開始するとなのはの周囲に真円の光球が複数発生。それを見てなにか危険でもを感じ取ったのか、怪物がなのはへと向き直って身構える。

「導きの元… 鳴り響け…!—デイバインシューター!」

微速で浮き上がっていた光球はピタリと動きを止める。怪物はこれを好機と見てなのはの喉元を食い破らんとその牙を剥いて飛び込んで行く。

「シューーーート!!」

「ガウツ!?!」

正に間一髪、多数の魔力弾が一斉に怪物目掛けて襲いかかっていた。これが自身の周囲に生成した発射台「デイベインスファイア」から魔力弾を連続発射する魔法「デイベインシューター」である。

「グオオオオ!!」

(もつと多く…もつと速く…もつと正確に…!)

真つ直ぐ怪物へ向かって飛んだかと思えば弧を描き、時には怪物の進路を塞ぐように次々と撃ち込まれる魔力弾。

怪物は被弾こそ無いもののなのはの魔力弾によって制空権を奪われ、大きく飛び回りながら回避に徹している状態だ。

〈第二波を撃つたら渡します!〉

へよし、任せろ!〉

「グオン!」

「レイジングハート!」

『Protection.』

容赦無く追い立てる魔力弾を回避しようと上昇する怪物をなのが横から猛追。

「でええええい!!」

「ゴアツ!!」

(よし!)

怪物を追い抜くと速度を落とさずにそのままUターンしつつ、レイジングハートを前方に突き出すと進行方向にアクティブプロテクション（触れたものを弾き飛ばすバリアを一定範囲に展開する魔法）を展開して最高速度で体当たりすると、弾かれた怪物は体勢を立て直すこともできずに背中から緩やかな角度で高速落下していく。

「うおおおおお!!」

優は落下する怪物に追い付こうと全速力で走り、怪物が今まさに地面に落ちようかという刹那……

「タイガー……!」

「!？」

落下に追い付いた優が足を止めずに跳び上がり…

「キーーーーーック!!!」

「ガッ……!」

全力疾走の加速力を加えた渾身の飛び膝蹴りを背骨へ叩き込んだ。

「…!!」

「なっ……」

優の膝蹴りを防御も回避もなしでまともに喰らった怪物はサツカーのリフティングさながらに高々と打ち上げられるが、まるで効いた様子もなく猫のように即座に身を翻し、飛び膝蹴りの慣性が残って上昇したままの優へ襲い掛かり…

「グルアッ!」

「いっ……!」

「おみなえさん!」

両前足を使って優をpushしえ付けながら落下していった。

「ちっ、許せよ!」

「ギャアッ!」

両前足でpushしえ付けられた優は、咄嗟に腰部に携帯していた精神感応金属製のファイティグナイフを引き抜いて両前足を切断。肉体の欠損という深刻なダメージには流石の怪物も苦悶の表情で呻き声を上げ、優から離れていった。

ところが……

「!?」

切断した前足がヘビのような生物に姿を変えて優に襲い掛かってきたのだ。

(なんだよこれ……!)

ヘビの速度は反応速度に優れた優ならば余裕を持って対処できる程度のものであったが、意識の外からの奇襲により全く反応なかったために迎撃することもできず、絡み付かれて地面へと落下。

「このヤロー!」

受け身も取れずに背中から落下したものの幸いにも頭部へのダメージは無く、このヘビは戦闘能力自体は低かったため即座に引きちぎることに成功。投げ捨てたヘビは血肉を撒き散らすことはなく、そ

して音もなく消滅した。

しかし優がへびと格闘していた隙を怪物は見逃さなかった。

「アアアアッ！」

「ぐうっ！（再生だと!?!）」

起き上がろうとした優へ前足を再生させた怪物が再び覆い被さって地面へ押さえつけると、間髪入れずに優のナイフを歯で加えて放り投げてしまう。

「し、しまった！」

（ここから撃つたらおみなえさんに当たっちゃう…どうしたら…!）

いくら魔力弾のコントロールに自信があるなのでも、優が密着しているのは怪物だけを的確に狙い撃つ自信はない。

自分の肉体を容易に切り裂く危険な武器を奪った怪物は、満を持して優の唯一の弱点である頭部を食い破らんと牙を剥いた。

「ガウッ！」

「ぐああっ！（く、食いちぎられる…!）」

（あのスーツが破られる!?!）

辛うじて自由になった左腕を盾にして喰い付かせるが、怪物の言語を絶する咬合力くわうりきょくによってA・Mスーツの対圧力の限界を超え始め、優の腕がミシミシと悲鳴を上げていた。

「おみなえさん！今…！」

「来るな!!」

「!?!」

「遠くから狙えないなら以前のようにな近接距離で撃てばいい」として怪物へ接近しようとしたのは優が制止。

優はなのはが持ち場を離れることによって怪物を取り逃がすことを懸念し、自分のピンチにもかかわらずなのはの助太刀を拒んだのだ。

「おおお…!」

「!?!」

「オラア!!」

「ガボツ!?!」

不安定な体勢ながらも両足を使った全身全霊のキックで怪物の腹部を蹴り上げると怪物は優の腕から牙を離して吹き飛び、身を翻して着地するも胃液のような液体を大量に吐瀉としゃしながら悶絶。

(弱点、見つけたぜ！)

その隙に優は起き上がり、怪物に投げ捨てられたナイフを右手で拾って再び怪物へ向かって走っていった。

2人目なの？

(弱点見つけたぜー！)

態勢を立て直して怪物へ向かっていく優。

〈なのは、アレの準備だ！〉

〈は、はい！〉

なのはにある作戦の合図を送ると更に加速。激しく息を乱しながら優から逃げようとする怪物を完全に捉え…

「おりゃあ!!」

「グバツ!」

左腕を真上に振り上げ、左足を伸ばして身体を開きながらのジャンプアッパーで腹部を殴り付けると、怪物は更に吐瀉物としゃを撒き散らしながら両翼を広げる。その瞬間を優は見逃さず再度跳び上がって追いかけた。

「させるか!!」

擦れ違いざまに片翼をナイフで切り落とし、バランスを崩した怪物は体勢を立て直すことなく頭部から落下していく。

(やっぱりなー！)

怪物は飛行する直前に両翼を展開していたにもかかわらず、飛び上がる瞬間以外は羽ばたかせていなかった。

それに違和感を覚えた優はその理由を推察し、飛行自体にほぼ使わなくても飛行の制御には両翼が必要であると即座に見抜いたのだ。

そして無論、先程切断した前足と同じように切り落とした片翼が3匹のヘビに変身したが、それを織り込み済みの優は難無くナイフの一振りですまとめて葬り去った。

『Mode change, Cannon mode.』

そしてついに作戦の最終段階…「なのはの封印」の時間だ。

「ディバイブーン……」

砲撃形態と化した杖の先端に光が収束していく。

「グウツ……」

「バスター……!!!」

飛行を維持できなくなった怪物は一直線に落下していき、不時着して地響きと土煙を巻き上げると、なのはが怪物に向けて構えていた杖から清浄なる封印の光が放たれた。

(よしー！)

(これでー！)

封印の光が怪物を目掛けて飛び、目前まで迫り来る。優もなのはもその光による封印の成功を疑う余地はなかった。

だがしかし、予想外の出来事とは当然ながら予想しないタイミングで起こるもの。その「予想外の出来事が起こる瞬間」は、正に今この時だったのだ。

「グブツ」

「!?!」

怪物はなのはの放った光ではないなにかその身を貫かれ、爆音と共に光の中に消え去った。

「え？あれ、なに？」

「こ、これは…」

〈なにながあつたんですか!?!〉

優となのはは確かに見た。

なのはの放った光が怪物に命中する直前、黄色い光に包まれたなにかが怪物の胴体に命中すると素通りしたかのように貫通し、そのなにかは地面に着弾すると同時に電撃を伴う爆発を起こし、怪物はそれに飲み込まれ、消滅してしまっただのだ。

「え…」

「……………」

爆風が収まり、着弾点のクレーターを再び見つめると、そこには動物と石が姿を現した。

その動物は先程優たちが戦っていた、ジュエルシードに取り込まれて怪物と化していたネコ。

その石はないを隠そう淡い輝きを帯びた青い宝石ジュエルシード。ジュエルシードはネコの上で揺蕩うように浮揚している。

しかしそこにあつた……………そして居たのはジュエルシードとネコだ

けではなかった。

〈…ユーノ〉

〈すみません！あともうちよつと…〉

〈お前がなのは以外に力を与えた奴はいるか？〉

〈……なのはだけです。ボクが関わったのはなのはの他にはいません〉

〈……そうか〉

優は着弾点を睨みながらユーノに確認を取ると、落ち着いた声で抑揚なく語り掛ける。

「お前、どこの誰だ？」

「……………」

そこには大きな黒マントを羽織り、黒いハイレグのようなものに白いスカートを付けた服を着た、長い金髪ツインテールの少女がそこに立っていた。

敗北なの…

「お前、どこの誰だ？」

「……………」

黙して語らない少女はあどけない容姿の割りに妙に物憂げな表情を見せ、大人びた雰囲気醸し出している。

そしてなによりも目を引くのは、容姿にとっても不釣り合いな、頭部に黄色い宝石を埋め込んだ古めかしい石斧。それを右手に握り締めている。

「ユーノの知り合いか？」

「……………」

「お前もジュエルシールドを狙ってるのか？」

「……………」

「それがどんな物かわかってんのか？」

「……………」

その少女は目は合わせるもの一向に口を開こうともしない。そして握っていた石斧を徐おもむろに持ち上げ、目の前に浮いていたジュエルシールドに宝石部分を充てがう。

「待て！それをどうするつもりだ！」

「……………」

優がそれを制止しようとするとその人物は優を睨にらみ付けると同時に石斧を突き付け…………

『M i g h t y S p a r k.』

「!？」

放電を伴う光を撃ち放った。

「……………」

「…へっ、問答無用って訳か」

既すんでのところでは不意打ちを回避した優は即座に戦闘態勢にらに戻るが、少女は無視して再び石斧をジュエルシールドに充てがうと…

「あつ！」

ジュエルシールドは光となってハンマーに吸い込まれていった。

「てめえ！言ってるそばから！」

〈待っておみなえさん！〉

「……つとと！」

自分を無視してジュエルシールドを回収してしまった少女に業を煮やして飛びかかろうとする優をなのはが制止。今度はなのはが少女に話し掛けた。

「わたしの話を聞いて！わたしたちはあなたと戦う気はないの！」

「………」

「だから教えて！あなたは魔法使いなの!？」

「………」

「あなたはどうしてジュエルシールドを集めてるの!？」

「………」

「そのジュエルシールドはユーノくんが集めなくちゃいけない大事な物なの！お願いだから返して！」

「……邪魔をしないで」

「!？」

なのはを冷めた目で見つめる少女は、なのはの言葉を無視すると自身の周囲に3個の光球を浮かべ、そこからダガー程度の長さの光の槍をなのはに向けて連続で撃ち放つ。

「くっ……！」

「なのは！」

その槍は直線的な動きしかしないため軌道自体は読みやすいが、弾速が速いためわずかでも反応が遅れると直撃をもらう可能性が高く、なのはは回避に専念している。

(わりいが寝てもらうぜ！)

なのはへの攻撃に気を取られている隙を突き、優は少女を気絶させようと全力で踏み込んで腹部へのパンチを放った。

ところが……

「…!!」

(ぜー!)

少女はそれに素早く反応し、腹部を空いた左手で覆って防御体勢に入る。

しかしA・Mスーツで高められた筋力による全力の一撃は、生身の人間の力で止められるほど軽いものではない。その握力は石を握り潰し、その拳撃は岩石を打ち砕く威力だ。

無論優は生身の人間相手に全力で打ち込むほど加減の効かない人間ではないが、ユーノの魔法講座でバリアジャケットの構造を聞いて「平均的なものでも元の世界のサイボーグのボディを上回る防御力を持つている」と分かっていたので、並みのサイボーグでは防ぎ切れない程度の力加減で打った。

これならば非力な魔法使いならば防ぎ切れず、尚且つ致命傷を与えずに適度なダメージを与えられるはずだ。

「あなたも…」

「なにつ!?」

「や…」

……が、その目論見は一瞬で崩れ去ってしまう。

「邪魔」

「…!!」

「やめてー!!」

腹部に感じる重量感、悶絶、声にならない声、その後に襲い来る激痛。

なのはの声も虚しく響き、優はまるで重力を無視したかのように水平に吹き飛び、その延長線上にあった木に激突してようやく停止した。

(あの…石斧…。それに…手袋…)

「ああああー…!!」

「……………」

なのはは優が倒されたことに激昂して少女へ突撃。無傷のままの少女は顔色一つ変えず、石斧の柄を人差し指と中指の間に挟めて頭部

を軽く握りながら振りかぶり……

「…リパルション・スロー」

「うあっ！」

なのはへ投げ付けると、石斧は光に包まれ電気を迸らせながら目にも止まらぬ速度でなのはへ猛進していく。

レイジングハートは反応の遅れたなのはに変わって緊急でプロテクションを展開するが、石斧はその防御を薄氷を踏むかの如く叩き割ってレイジングハートに命中。なのはへの直撃は免れたものの、命中の際に発生した衝撃波でバリアジャケットが損傷してダメージを受けてしまったのはは飛行魔法を維持できずに落下し……

「……………ごめんね」

『Fire.』

弾丸のような速度で少女の手元に石斧が戻ると、トドメと言わんばかりに光の槍で追撃。為す術もなく直撃を受けたなのはは煙に包まれ、そのまま墜落していった。

「……………今度は手加減できないかもしれない。だから…」

(ちくしょう…)

(待つて…あなた…は…)

墜落時に頭を打った影響で意識を手放しかけていたなのはへ、少女は静かに語り掛ける。

「ジュエルシードは諦めて」

(こ…の…ガキ…)

(なんで…そんな顔…)

少女のこの言葉を最後に優となのはは眠るように意識を手放すのだった。

雷神なの

「……さん、しっかりしてください！」
「う……」

朦朧とする意識の中で身体を揺すられて次第に覚醒していく優は、必死に起き上がって自分を揺する者の正体を確認する。

「ユーノ……」

「遅れてしまつてすみません……」

「……」

「でもよかった。どうやらなんともないみたいですね」

「……ホントだ」

優は腹部を弄まさぐつてダメージを確認するが、吐血はしていたものの腹部に痛みはなく、また身体を動かしても悪化する気配はない。A・Mスーツが損傷した訳でもない。

（なんで無傷なんだ？）

先程少女から受けた石斧の一撃は、A・Mスーツが役に立たない「浸透」するような一撃だった。

優は今までに幾度もA・Mスーツの耐圧性を無効化する攻撃を受けてきたが、あの石斧の一撃はその中でも氣功の技の一つである「発勁」に近いものを感じた。

発勁と同質のものならば物理的な防御は意味を為さず、体内に直接打撃を打ち込まれているとなんら変わりないダメージを受けているはずだ。

なのに痛みがないだけでなく、ダメージを受けた痕跡すら残っていないのはどういうことなのだろうか？

「御神苗さんが意識を失っているあいだにボクが治癒魔法で治してたんですよ。治癒魔法はあまり得意じゃなかったからどの程度まで治せるか不安だったんですけど、問題なく動き回れるみたいで一安心です」

「…………お前、攻撃魔法はさっぱりだけど他はなんでもできるんだな」
「……………それ、褒めてるんですか？」

結果とその合成、空間加工、テレパシー、簡易な封印、そして治癒。これ程バラエティーに富んだ魔法を顔色一つ変えずに使うユーノ。その実力に目を丸くした優は素直な感想をユーノに述べるが、褒めているのか貶けなしているのかいまいちよく分からない優の言葉に少々辟易気味になるユーノであった。

「なのは、大丈夫かい？」

「……………ユーノくん……………」

ユーノは優の時と同じように治癒魔法で身体を癒してからなのはへ呼び掛ける。

「……………あの子は!?!」

「行っちゃったよ。ジュエルシードを持ってね」

「……………」

目を覚ましたなのはは飛び起きて先程の少女の姿を探すが、当然ながら少女の姿は影も形もない。

「ごめんね、ユーノくん…。あなたの大事な物、取られちゃって…」

「そんなことよりなのはが無事だっただけで充分さ。それにきみはボクの想像以上に成長してくれていたしね。こんなになるまで頑張ってくれてありがとう」

「……………うん。ユーノくんこそ、心配してくれてありがとう」

なのはとユーノは顔を赤くして照れながら互い謝辞を述べるのだった。

「それにしても…」

「あ、おみなえさん」

自由に動き回れるくらいに回復した優はユーノの後からなのはの元に歩み寄りながら声を掛ける。

「レイジングハートがデキるヤツで助かったな。お前にアレが直撃してたらかなりやばかっただろうぜ」

『お褒あづかめに与り光栄です』

なのはは石斧の投擲に反応し切れず、レイジングハートは自ら杖を

動かすことはできなかつたが、プロテクションでワンクッション置いたおかげでなのはが咄嗟に杖で受けるだけの時間を稼ぐことができたのだ。

「アレって……おみなえさんはあの武器を知ってるんですか？」

「ああ、よく知ってるぜ……ってなのは、お前知ってるんじゃないか？ たのか？」

「え？なんでそう思ったんですか？」

「……いや、もういい」

「??」

(……気にしすぎだったか?)

優は何故なのはが石斧のことを知っているとと思ったのか？

遡ること数分前、優が金髪の少女に殴り飛ばされる直前……

”やめてー!!”

このように叫んでいた。まるで少女が所持していた石斧の危険性を予め知っていたかのように。

実際に優が殴り飛ばされてなのはが激昂した事実からも、殴られればどうなるのかをなのは自身が知っていたからだと考えるのは自然の流れだろう。

「御神苗さんが知ってる……まさかそれって！」

「御名答だ、ユーノ。ありや遺跡さ」

「え!? あんななんでもなさそうな石斧が!？」

そして優の口から告げられた少女の武器の正体。それはなんとオーパーツであった。

「じゃあ御神苗さん、そのことを教えてもらえますか？」

「ああ、こういう情報は共有しといた方がいいからな」

それを聞いた2人は、不謹慎ながらもそのオーパーツの話に興味津々で耳を傾けた。

「あのハンマーは『ウコンバサラ』だ」

「うこん……」

「フィンランド神話の自然現象を司る『雷神ウツコ』の持つ神器でな、変幻自在の雷を撃ち出せて、斧を基本形態にハンマー・剣に変形させ

られるんだ」

「3形態もある上に好きな形で撃てる雷、か。恐ろしいですね。しかもただ投げただけであの威力…」

「そう。ウコンバサラはその力を使うために持ち主の精神エネルギーを使うんだが、それをウコンバサラに留まらせることで物理的破壊力を高められるんだ。しかも使い手の能力次第で天井知らずに威力が上がるんだぜ」

「じゃ、じゃあその気になれば破壊できないものはないってことですか!?!」

「使い手次第って言ったろ? 使用条件は軽いが、遺跡の力は一朝一夕で使いこなせるもんじゃねえ」

「あ、そ、そうですか…」

「あ、そうだ。これはさっき気付いたんだが…石斧の直撃を喰らった感じだと叩いた部分から内部に直接ダメージを与えることもできるみたいだ」

「そ、そんなものをわたしたちは…」

「言いたいことはわかるぜ、なのは。あのガキがどれほどのウコンバサラの使い手かはわかんねえが、オレたちはそんなものを喰らって生きていく。それこそあいつの言う通り『手加減された』ってことなんだろう」

(じゃあ、あの子はやっぱり…戦いたくないって思ってるんじゃない?)

「それに加えて厄介なことがもう一つある」

「え? まだなにかあるんですか?」

「ああ、あのガキは下手すりゃウコンバサラよりやべえものを持ってやがる」

「ウコンバサラより!?!」

なのはとユーノは少女の使用していた石斧…否、ウコンバサラに危険性を感じて最大限に警戒するつもりだったが、それを超える危険な物を持っているという信じ難いことを優は言いだすのだった。

無敵なの

「ああ、あのガキは下手すりやウコンバサラよりやべえものを持ってやがる」

「おみなえさん、ウコンバサラよりやばいものって…」

ただでさえ強力で危険な武器であるウコンバサラを超える危険性を孕むものを少女は持っていると言う。それはいったい何なのか？

「あいつの手を見たか？」

「え？はい、ちよつとゴツゴツした手袋を付けてましたけど…」

「それも遺跡だ。ウコンバサラと同じく地味だけだな」

「あ、あの手袋が!？」

「あれは『ヤールングレイプル』。北欧神話の『雷神トール』が使っていたものでな、砕いて言えば強力な投石機みてえなものだ」

「ヤールングレイプル…」

ヤールングレイプルとは雷神トールが複数使っていた神器で、「雷鎚ミヨルニル」とセットで使われていたとされるものの一つだ。

「投石機…ですか。ウコンバサラを投げたあとであんなに細かい軌道修正でわたしに向かってきたのを見た感じでは、ものすごく高い誘導性があるように思えましたけど…」

投石機と言うと古臭く性能が低く思えるが、当然ながらオーパーツであるヤールングレイプルにそれは当てはまらない。これは二つの機能によって現代の軍事兵器にも劣らない…否、現代の技術では再現すらできない性能を秘めているのだ。

「ああ、その通りだ。それに実はヤールングレイプルは手に持てるサイズの物ならどんな物でも制御できるんだ」

「放電に加えて、あんな速度と威力で同じものを何回でも投げられるってなると対人戦では敵無しですね」

ヤールングレイプルによるウコンバサラの投擲は魔導師になって日が浅いのはどこるか、天性の見切りが可能な優でさえ回避に専念しないと危険な速度だ。

並みの者では回避どころか気付く前にその身に受けて絶命しても

不思議ではない。

「あれ？でも投げたものが手に戻ってくるのはどうしてなんですか？」

少女が投げたウコンバサラはまるで引き寄せられるように手元に戻っていつていた。

特に意識している様子もなく手に収まっていった様子を見るに自ら操っているようには見えない。確かに不思議な機能だ。

「そりゃあ単純なもんでな、制御したものの限定でかかる引力だ」

「引力!？」

「それでウコンバサラを投げてもあんな風に…」

効果範囲は制御したもののみと非常に狭いが、代わりに他には全く影響を与えない引力によって投擲物を使い捨てにすることなく使い回せるのだ。

「例えばオレのナイフとか、そこらに落ちてる石でもなんでも投げて手元に戻せるぜ」

「そ、それじゃあ最悪の場合はわたしたちの武器が奪われちゃうことも…」

「無いとは言い切れねえな。まあ、制御するには条件がいくつがあるんだがな」

「……………」

ヤールングレイプルの制御下に置かれたものは、使い手が制御を解くかヤールングレイプルの機能を停止しない限り永続的な支配を受けける。

条件があるとは言えなのはレイジングハートも奪われる可能性を示しており、決して捨て置く訳にはいかない可能性だ。

「あともう一つ、ヤールングレイプルには厄介な機能がある」

「まだあるんですか…」

投擲に返戻に支配…。これだけ厄介極まりない能力が揃っているといのにまだ厄介な機能があると優は言う。これにはなのはとユーノも辟易気味だ。

「なのは、オレがあのがキにどうやって攻撃したか覚えてるか？」

「はい、たしか一気に近付いてパンチ：でしたよね。でもあのパンチはA・Mスーツを起動した状態でのパンチなのに受け止められるなんて思いませんでしたよ」

「そうだ。死なねえように手加減したとはいえ、本来なら生身の人間が受け止められるような速度と威力じゃなかった。だがあいつは受け止めた。それはあの手袋がヤールングレイプルだったからだ」

「つまり……ヤールングレイプルは衝撃を吸収する防具にもなっている、ということですか？」

「それだと半分正解、だな」

「うーん……これ以上はちよつと……」

「正解は『斥力』だ」

「せきりよく？」

「磁石の同極同士つて互いに離れようとするだろ？磁力も斥力の一つでな、ヤールングレイプルはそれと同じようなもんだ」

「でもそれだとぶつかってくる物体も同じ力がないと成立しませんよね」

「そこがヤールングレイプルのすげえところだ。衝撃が手袋に伝わる一瞬で斥力を生み出してるのさ。それがエネルギーなら相殺して消し去ることもできるし、当然本人にはなんの影響も無え」

「そっか、だから投げたウコンバサラがあんな速度で手元に飛んできても軽く受け止められてたんだ」

「加えて言えば、その斥力を使つてとんでもない速度での投擲も可能になる。攻防一体・一石四鳥の手袋つて訳さ」

『攻撃も防御も完璧つてことですか……』

「攻撃はまだしも防御に関しては完璧どころじゃねえ。手に限れば完全無敵だ」

「……手強い、ですな」

「ああ、そうだな」

「……」

（それに遺跡を2つも同時使用して平気な顔してるガキもバケモノだな、でも持つてる武器がウコンバサラじゃなくてミヨルニルで、「メ

ギンギョルズ」もセットで持ってたらどうしようもなかったぜ…)

変幻自在の放電と、A・Mスーツを無効化した上にバリアすらも軽く打ち砕く打撃を放てる神器ウコンバサラ。

そして引力と斥力による武器の制御と絶対防御とそれを応用した投擲が可能な手袋ヤールングレイプル…。二つのオーパーツを同時に操る少女が現れた。

現時点では優となのはの2人では勝ち目の薄い強敵だ。少女の言葉を鵜呑みにするならば、ジュエルシードを追い掛ける限りその少女との交戦は決して免れない。

つまり、少女を相手取るならば2人が今より強くなるか、ユーノと3人で戦うしかないということだ。

(できれば先取りしてそのまま逃げられりやいいが…鉢合わせした場合、あの速さじゃそれも難しいな。さて…)

(それでもわたしは知りたい。あの子がなんでジュエルシードを狙ってるのか…。なんであんなに寂しそうな顔であんなことをしてるのか…)

優となのははそれぞれの思いを抱いて家路につくのだった。

アルバイト

「すいませーん、注文お願いしまーす」

「はーい！ただいま！」

「ここは喫茶「翠屋」みどりや。なにを隠そう高町夫妻が経営している喫茶店だ。

この店はフランスとイタリアで修行を積み東京のとある大手ホテルのチーフパティシエに抜擢されたこともある桃子が腕を振るっており、彼女の作り出す菓子の数々はここ海鳴市の外にも常連客を生み出し、平日の午前中でも常に客足が絶えないほどの人気を誇る。

「お疲れ様、優くん。今日もいい仕事っぷりだったわよ」

「一生懸命やってるだけですよ」

閉店時間を過ぎ、店仕舞いをして清掃作業を終えると、桃子がジュースとシュークリームを持ってきながら優へ労いの言葉をかける。

「あなたが働き始めてから一カ月とちよつと、ずいぶんお店の回転が良くなったわ。嬉しい悲鳴が出そうよ」

「いえ、居候の身ですからこれくらい当然です」

「このまま正社員として迎えてもいいくらいだよ」

「ん？」

桃子の特製シュークリームを頬張りながら本人は謙遜するが、実際のところ客単価こそ然程変わらないものの、この日の店の売り上げが前年同時期の実に15%も上昇しているのだ。

それだけでなく、優が出勤する日は平均して10%アップは下らないという驚異的な数値を出している。これで本格的に働いた時にはいったいどれほどの数値を叩き出すのかといった期待をしてしまうのも無理からぬことだろう。

「悪い話じゃないでしょ？…どう？一考してもらえないかしら？」

「うーん、気持ちはありがてえけど…」

優の働きぶりに感銘を受けた桃子は本気で優を誘っていたが、肝心の要の優本人は乗り気ではないらしい。

「まあ、無理にとは言わないわ。でも気が変わったらいつでも言っちゃようだね。いつでも待ってるわ」

「はい、ありがとうございます」

「それにしてもあなたって大変な身の上だったのねえ。親の道場を破門になった上に勘当されて身内に襲われるなんて…」

「親の小言にはうんざりしてたし、看板を背負う必要もなくなって逆に気が楽になりましたよ」

優は士郎と共に自分の身の上の設定を協議した結果、「ある裏の世界の武術家の家系で次期当主になるはずだったのが、父親と仲違いして破門・勘当された」ということに決定した。

街中で倒れていたのは、「兄弟が次期当主になるため、二度と戻ってこないように自分を亡き者にしようと放った刺客と戦ったため」としたのだ。

このような設定になった理由は至極単純、「優の実力がバレてもある程度ごまかしが効く」という実に分かりやすいものだ。

一般的な目線で見ればあまりにも荒唐無稽な話ではあるが、これは優にも負けないくらいに非凡な人生を送ってきた士郎という例があったために、士郎の人生をある程度知る高町家にあっさりと受け入れられたのである。

無論、実力を証明するために士郎との模擬戦を披露した上ではあるが。

「それじゃあ我が家へ帰りましょうか！」

「はい」

実は優は「このままタダで居候するのは失礼だ」としてなにかアルバイトを探そうとなのはに相談したところ、「だったらうちのお店で働いてみませんか？」と誘われたことなんですんなりと働き先が決まったのだ。

シフトは基本的には午前9時から午後3時で週三回から四回（ジュエルシード探しの時間や訓練時間を設けるため）だが、忙しい場合には時間を延長し、閉店時間まで働くこともある。

それから一カ月、スプリガンの仕事で培った洞察力・判断力による

優の素早く効率の良い仕事は店の回転を上げ、日々の特訓で培った体幹の強さによる物珍しい独特の動き、年齢に似つかわしくない逞しい身体などが（主に女性の）噂と人気を呼んで客足を翠屋へ向かわせ、売り上げ上昇に繋がったのだ。

（あの金髪のカギが現れてから一カ月…。ジュエルシードの反応がない日が続いてるなあ。こんなんじゃないジュエルシードのことを忘れちゃまいそうだけ…）

高町家に戻って夕食を取ると粗雑に服を脱ぎ捨ててベッドへ身を投げる優。いくら気を抜けないジュエルシード探しと言えど、一カ月も音沙汰無しではさすがに緊張感も薄れるというものだ。

（焦ってもどうにもならねえが…あいつ、どこでなにやっつてんだろかな…）

そしてジュエルシードに対する緊張感の薄れはもう一つの気がかりを呼び起こし、頭を過ぎって影を落としてしまう。

（ちっ、頭から離れねえ…！）

優が高町家に居候を始めてから一カ月が経ち、衣食住に不自由なく暮らしている。一方で染井芳乃はどのような生活を送っているのか？

自分がのうのうと日常生活を送っている最中、彼女は衣食住に困っているかもしれない。誰かと戦っているかもしれない。生命の危機に瀕しているかもしれない。

なのに自分は彼女を探そうともせずになにをしているのだろうか？ 時空管理局の手を借りるだけでなく、自分の足も使えば僅かでも確率は上がるのではないか？ こうして平和に居候している間にも彼女の状況が悪くなるのではないか？

考えれば考えるほど負の螺旋に落ちていく優。このままでは彼女のことで頭が満たされてしまい、他のことを考えられなくなってしまう。いそうな程に苛まれていた。

それぞれの決意なの

〈なののは、起きてるか?〉

〈はい、まだ起きてますけど…なんですか?〉

〈今後、ジュエルシードを探すにあたって確認しておきたいことがある〉

〈確認…ですか〉

念話でマイルームにいるなのはへ語り掛ける優。

これは単なる暇潰しではなく、今後の方針を固め、なおかつ薄れかけていた緊張感を取り戻し、精神の安定を得るための話し合いだ。

〈ジュエルシードを追いかける限り、あの金髪のガキは必ずオレたちの前に現れる。これはわかるな?〉

〈…はい〉

〈じゃあよ、そうやってそいつと対峙した場合、お前はどうする気だ?〉

〈…………わかりません〉

〈それはマジメに答えてんのか?〉

〈だって…わたし、まだあの子のことをなにも知らない…わかってないんですよ…〉

〈そいつのことがわかったらジュエルシードを諦めんのか?〉

〈そういうことじゃありません!でも…あの子のことを知らなくちゃ、きつとわたし…次の一步を踏み出せない気がするんです…〉

〈だったらそいつと話し合えよ〉

〈…………〉

〈え?〉

〈ん?〉

なののはは自分の意見が否定されるものという前提で話しており、予想外の優の返答に一瞬だけ思考回路が停止してしまった。

〈ど、どうして?わたししてつきり…〉

〈そうでないとつきりしねえんだろ?〉

〈言い出したわたしがこういうこと言うのもおかしいですけど…………

本当にいいんですか？

〈そうでもしなきゃお前はガキのことが気になって集中できねえんだろ？そんなんじや戦力になりやしねえじゃねえか〉

〈う……〉

〈それによく考えてみればあいつの正体も目的もなんにもわかんねーしな。それでお前の悩みも解決できるなら一石二鳥だ〉

〈そ、それじゃあ……！〉

〈手伝ってやるよ、少しはな〉

〈

優に否定はされても説得するか、もしくは説得できなければ1人で少女との対話に挑むつもりだったため、あっさりと協力を申し出る優に感極まるのはであった。

〈だが、こつちにその気があつてもあいつはないみてえだ。こないだと同じようにいきなり襲ってきたら話どころじゃねえぞ〉

〈言葉がダメなら行動で伝えます！〉

〈行動？なにする気か知らねえが、それもダメならどうする？〉

〈言葉と行動、両方です！〉

(……なにか考えがあるのか)

妙に自信たつぷりのなのはの宣言に頼もしさを感じた優は静かになのはを見つめ……

〈………本気なんだな？〉

〈はい、本気です〉

〈わかった。オレは説得が苦手だし、話し合いはお前に任せるぜ。暴れたらオレが抑えてやる〉

〈でもあの子、すっごく速いですけど……〉

〈たしかにけっこう速えが見えないほどじゃねえし、見切れないほどでもねえ。オレをナメんな〉

〈……わかりました。よろしくお願いします！〉

〈おう、任せとけ〉

話し合いをなのはに一任して自分はサポートに回ることを決意する。

こうして2人は金髪の少女への対処を決めたのだった。

(あの子とちやんとお話ししなくちやわたしは前に前に進めない…。だから次は絶対…！)

(まあ、極力戦わなくて済むようにオレもできる限りの努力はしなくちやな)

ちなみにこれはのちにユーノへ伝えられ、事後承諾という形でユーノも(強制的に)方針に従ってもらったことになったとき。

それから数日後の夜のこと。

夜の帳が下りて色とりどりの街灯が煌々と街を彩る時間、金髪の少女との再会の時は訪れた。

「始まりの合図なの？」

〈ユーノーなのはーどうだ!?〉

ユーノーはこの世界に来て以来、全てのジュエルシードが眠っていると思われる。ここ海鳴市及びその周辺を毎日探査している。

当然ながら1日で全域を調べることは不可能である。そして調べた場所にジュエルシードがあったとしても調べるタイミングによっては反応が無い場合もあるため、数日かけて全域を調べ終えても再び一から探査をやり直すという気の遠くなるような作業を繰り返しているのだ。

〈こっちはダメですー!〉

〈わたしも同じく!〉

〈ちっ、空振りか…!〉

そうしてやっとなんか見つかったジュエルシードのエネルギー反応であったが、あまりにも反応が微弱かつ広域であったが故に正確な位置を特定できなかつたため、反応のあった場所をなのはとユーノーの2人で手分けして探していたという訳だ。

ちなみに優はなにをしているのかというと、ジュエルシードを探す手段を持っていないため、なのはかユーノーのいずれかジュエルシードを見つけた方へ向かうために中心部で待機している。

〈仕方ない、今度は旋回しながら少しずつ中心部に向かおう〉

〈うん、わかった!〉

中心部より正反対の方向へ向かっていた2人は、範囲内ギリギリの距離から互いに同方向へ旋回しつつ中心部に向かって探索範囲を狭める作戦を敢行した。

〈オレは探せねえからあんまり強くは言えねえが……場所が場所だ。急いでくれよ〉

〈はい!〉

反応のあった場所はなんと市街地。こんな人口密集地でジュエルシードが暴走すれば被害は甚大なものとなってしまふ。故に今回はかりはなにがであろうと絶対に暴走させてはならないのだ。

☆☆☆☆

ここ海鳴市の中でも一際目立つ、高層ビルの立ち入り禁止エリアである屋上に佇む2つの人影。

「ほんとに大丈夫かい？ 確実にこの範囲内にあるって言ってもかなりの広さだ。あんまり無理しちゃ…」

1人は人間であって人間でない、獣であって獣でない、人間の体格に獣の耳・牙・爪・尻尾、の生物……。人間に例えるならば成人相当の背丈の女性だ。

「平気だよ。わたし、強いんだから」

もう1人は、優となのはの因縁の相手となった金髪の少女だ。

「はあ……。あたしは気が乗らないんだけど、仕方ないねえ」

「…うん。ありがとう、アルフ」

「それじゃ、いつてみようかあ!!」

アルフと呼ばれた女性はそう言って手の平と拳を突き合わせて気合を入れると、飛行魔法で少女の目からは見えなくなるほど高く上昇し、全身から黒煙のような雲を放出し始めた。

「……………」

少女はその様子を一言も発することなく見届けてから右手に握ったウコンバサラを頭上に掲げると、ウコンバサラの頭部が破裂音と共に発光する。

☆☆☆☆

〈!?!〉

(ん?この気配は…)

旋回を初めてから中心部までの距離の3分の1ほどを進んだタイミングで、優の身に覚えのある気配の出現と共に天候が急変。薄ら寒い風が黒雲を高速で運ぶと、街を覆う黒雲の中から不気味な鳴き声と共に無数の光の筋が迸る。

〈いけない!〉

〈おいユーノ!あの雷雲がなんだってんだ!?!〉

〈広域封時結界、展開!!!〉

空を見て青ざめたユーノは優の質問を無視して即座にアンドヴァ
ラナウトの力で結界魔法を発動し、街全体を覆い尽くした。ユーノが
自分の言葉が無視するほどの焦りを見せたものの、結界を張ったこと
で一安心しかけた優だったが……

〈気を付けてください!! 「上から」 来ます!!〉
〈上!?!〉

ユーノが怒声さながらの大声での警告で優が空を見上げた次の瞬
間、空が目映い輝きに包まれた。

妖精と雷神

☆☆☆☆

空が輝きに包まれる1分ほど前のこと……

「くっ、うっ……」

頭上で雷を迸らせる金髪の少女は、苦悶の表情を浮かべて全身から汗を吹き出しながらも精神を集中している。

「轟け……御雷……」

しかし、負担のあまり下半身から力が抜けてその場に崩れ落ちてしまった。

「やっぱり無理だよ！」

「だ、大丈夫……だから……」

それに気付いたアルフは「これ以上の無理はさせられない」と中断を呼び掛ける。

「これ以上やったらあんたの方がまいっちゃうよ！ちよつと時間はかかるけどくまなく探せばきつと……」

「あっち」もきつと気付いて探し始めてる……！

「うっ……」

「だからわたしたちが先手を取らないとダメなんだ！」

「……もしあれをやったせいでその連中に先取りされでもしたら………いや、二度とあんたに『あんな思い』をさせる訳にはいかない……！」

アルフは少女の身体に負担をかけたくないが故に今から行うことをやめさせようとしたが、優たちにジュエルシードを先取りされる危険を知ると即座に考えを改めた。

しかし、アルフが恐れているのは少女の身体への負担やジュエルシードを取られることだけではない。ジュエルシードを取られることよって起こる「悲劇」を恐れているのだ。

「………わかった、それならもう止めないよ。こうなったら発見次第さっさと確保してさっさと帰るよ!!」

（ありがとう、アルフ……）

少女は口には出さなかったが、心の中でアルフに感謝の言葉を告げると意を決して立ち上がり、再びウコンバサラを天に掲げて頭部を輝かせると……

「轟け、御雷…!!!」

『M i g h t y t h u n d e r . 』

ウコンバサラを床に叩き付け、天を貫く巨大な雷光の柱を屹立たせた。

(来た…！)

待ち侘びたアルフは雷光の柱をその一身に受けると、黒雲の中でフ・エイトには見せたことのない獣の姿に変身し……

「ヒョオオオオオオ!!!」

不気味な鳴き声と共に全身から放電。それが呼び水となって黒雲全体が活性化、黒雲の至る場所が一筋の輝きを放ち始める。

(これがわたしとアルフの…！)

「サンダーレイジ!!!」

アルフの耳を劈く叫声と共に街全体に雷の雨が降り注いでいった。

☆☆☆☆

「……………」

ユーノの警告から数秒後に空から無数の雷が地上に降り注ぎ、間一髪回避に成功したものの、尻餅を突きながら呆然とする優。

(ユーノの声がなかったらやばかったぜ…)

A・Mスーツはほぼ完璧な絶縁性があるため電気の類いは効かないが、頭部だけは完全には覆われていないためそこに攻撃を受ければ深刻なダメージとなってしまう。

故に優は空を見上げると同時に落雷の兆候に気付き、咄嗟にその場を飛び退いて難を逃れたのだ。しかし飛び退くのと同時に直前まで優の立っていた場所に雷が落ちたため、炸裂の衝撃で吹き飛ばされて着地に失敗したのだった。

(テスカポリトカと比べりゃ威力は低いけど攻撃範囲は比べ物にならねえ…！)

以前に優が戦った敵の中には、気候を操る「テスカポリトカ」という魔術師がいた。

彼が放つ落雷は物理的破壊力を持っており、一本ずつしか落とせなかったがその威力は家一軒程度ならば跡形も無く消し飛ばせる威力があり、落雷の軌道を操って広範囲に攻撃可能だった。

しかし、今落とされたものは威力こそ数メートルのクレーターを作る程度だが、それが街中に無数に降り注いでいるのだ。

〈なのは！ユーノ！無事か!?〉

〈わたしは平気です!〉

〈ボクも大丈夫です!〉

そしてなのはとユーノは魔力反応をたんちして事前に気付いていたのでそれぞれが防御魔法で防ぎ、事無きを得ていた。

〈その様子だとおみなえさんも平気みたいですね、よかった…〉

〈あたりめえよ、オレは不死身だぜ。それにしてもあの落雷は…〉

〈あれは「強制発動」！魔力を直接ぶつけて強制的にジュエルシードを発動させるために広域型の魔法を使っただけです!〉

〈…つてことは!〉

〈もうじきジュエルシードの暴走が!〉

全員の無事を確認して一安心したのも束の間、ユーノの忠告により間もなくジュエルシードが現れると判明。

〈…来た!!〉

〈!!〉

そこから間髪入れずにユーノが突如として現れた巨大なエネルギー反応を感知し、優となのはの立ち位置の間に近い場所でエネルギーの放出と共にジュエルシードが出現した。

(よし、オレから近い!)

エネルギーの光柱を確認した優は即座にジュエルシードの確保に向かった。

(あれか。まだ暴走はしてねえな)

ジュエルシードはド派手に出現したものの、出現時の荒々しさもななく淡く光りながら沈黙しつつ地面から1メートルほど浮いた状態を

保っている。

なのはより先に到着した優は「これなら簡単に確保できる」と高を括ってジュエルシールドに手を伸ばした瞬間…

「!!」

背後から光の槍が優を襲うが、優は事前に気配を察知して素早く横に跳んで回避する。

「へっ、さっそくお出ましか」

「……………」

優が振り返らずに話し掛ける背後には、金髪の少女が無言で雷光を湛えたウコンバサラを構えていた。

「忠告は………したよ」

「それはこっちのセリフだ。こっちにもジュエルシールドは必要なんだな」

「……………」

振り向きながら横目に金髪の少女を睨み付ける優。

憂いか哀れみか、はたまた諦観か…フェイトの顔には負の感情しか感じられない。

「そんな思いつめた顔してでも欲しいんだな。だが、こっちにも譲れねえ理由がある」

「…!!」

(ん?)

金髪の少女の目付きが鋭く優を射抜くと空気が張り詰め、優の背筋に寒気が走る。

「ジュエルシールドは…!」

(予定がひっくり返っちゃったが…)

同時にウコンバサラに宿る雷光が輝きを増していく。

「絶対に渡さない!!」

(とにかくこっからだな)

今のフェイトは自分の命を脅かす敵対生物を喰い殺さんと牙を剥く獣と同類。極力戦いを避けるためにへわずかな失敗も許されない。

なのはに任せるつもりだったフェイトの説得を試みる決意を固め

るのだった。

牙を剥く獣

「ジュエルシードは絶対に渡さない!!」

「……………」

鬼気迫る表情で睨みを効かせる少女を前にして、優は振り向きながら少女の目を見つめつつも涼しげな顔で戦いを回避するための思案を巡らせる。

「どうしても戦いは避けられねえのか?」

「傷つきたくないならジュエルシードは諦めてって言ったはずだ!」

……………が、優は以前のような喧嘩腰ではなく柔らかな態度で接しており、その甲斐あってか少女は臨戦態勢を維持しつつも優の言葉に耳を傾けている。

「…………お前、なんでそんなに必死にジュエルシードを集めてんだ?」

「そんなのあなたには聞け…」

「オレは自分のためでもないので自分の命を懸けて遺せ…ロストロギアを求めたヤツを何人か知ってる」

「…?」

「で、なんとなくって程度なんだが、お前は必死さがそいつらにちよつと似てる気がするんだよな」

「…!!」

「どうやら凶星みたいだな」

「くっ……………」

優の推測が核心を突いたのか、誰の目から見ても明らかに少女の顔に動揺の色が現れる。

「誰のためかは知らねえが、それは他人を傷つけてでもやらなくちゃいけないーことなのか?」

「そんなこと…」

「そんなに急いで手に入れなくちゃいけないーのか?」

「……………」

「お前一人でないと成し得ないことなのか?」

「……………」

「幸いこつちには時空管理局の伝がある奴がいるからもしかしたらなにか協力できるかもしれねえ。話してくれねえか？」

「!?」

以前に誓ったとおり、今は優たちは時空管理局に接触する訳にはいかない。しかし、ジュエルシード集めさえ終われば本当に協力できるかもしれないというのは事実のため、これはいわゆる方便というものになる。

「お前だって本当は戦いたくねえんだろ？それはオレたちも同じだ。互いに戦いたくねえんだったら戦う以外の解決策があるはずだ」

「それは…」

戦わないで済むのなら、血を流さずに済むのならそれに越したことはない。優は倒すべき敵と見做した者は容赦なく叩き潰すが、本来は無用な争いを好まず、場合によっては敵であろうと情けをかける性分なのだ。

それ故に優は先日の戦闘でジュエルシードに手を出すなどの忠告を行なった上で手加減された拳句に最終的にジュエルシードを諦めるようにとの忠告のみで事態が終息したことを鑑みて、少女が「目的のためにはある程度手段を問わないが故意に人を傷付けること自体は望んでおらず、目的を優先しつつもできるだけ戦いを避けようとしている」と判断し、「それなら和解の道があるはずだ」と希望を見出して説得しようと決断したのである。

「オレたちになにかできることはねえのか？」

「……………」

「黙ってちやなにもわからねえ。お前の本音を聞かせてくれ」

「……………」

優の真摯な姿勢に心打たれたのか、自分でさえ気付かないうちに戦闘態勢を解いてしまった少女は次第に顔が憂いを帯び、唇を震わせ始める。そしてついに……………

「わたしは…母…」

「フェイト!!!」

「!!?」

自分から話し始めた少女の言葉を遮るように、威嚇のように鳴り響く怒声と共に少女の背後から飛び出した人影が優へ猛然と襲い掛かった。

「他人に耳を貸すんじゃない!!」

「て、てめえ……!」

優は右手の爪撃を左腕で受け止め、続いて左手の爪撃を右腕で受け止めたものの、間髪入れずに繰り出された前蹴りで押されるように蹴り飛ばされて大きく後退した。

「ア、アルフ……」

「あんたはジュエルシードのことだけ考えてればいいんだ!!」

「!!」

(くそっ、もう一人いやがったか!……ん?あの姿は……)

優にとっては悪く、「フェイト」と呼ばれた金髪の少女にとっては良いタイミングでアルフが割り込んだ。

(いや、それよりも……)

「さっさとあの気味の悪い筋肉ヤローをぶつとばしてジュエルシードをいただくよ!!」

「……うん、そうだね」

この一瞬のせいでフェイトは先程の気持ちの昂りが完全に収まってしまい、優の懸命な説得は水泡に帰してしまったのである。

「アルフ」

「ああ、わかってるさね!」

(やつは避けられなかったか。……最悪のタイミングで来てくれるもんだな。だったら仕方ねえ……)

優は目を細めながらも覚悟を決めると、襟の裏に手をかけてスイツチを押し、A・Mスーツを起動。すると一般人の目からA・Mスーツを隠すために身に付けていた上着が人口筋肉の急激な膨張によって弾け飛ぶ。

「ふうふう……」

「……………」

長い深呼吸で気を取り直す優と、それを無言で見つめつつ戦闘態勢を崩さないフェイトとアルフ。

「じゃあ…」

「……………」

更に優は左半身はんみで左拳を腰の高さまで下げ、右拳を胸の高さに保つ構えを取る。そして…

「来な!!」

「ただの人間が!!」

(もう、迷わない…。手加減もしない…!)

優の一声を合図に2人が飛び出し、ついに互いに望まぬ戦いが始まってしまったのだった。

妖精の力

〈フェイト！挟み討ちだ！〉

〈うん…！〉

アルフより機動力に優れたフェイトは先行して優を飛び越え、反対側に回り込んでそのままアルフと交差しながらの挟撃に入る。

「はあっ!!」

言葉を介さず、思念通話すらも無しに完璧なタイミングでの挟撃が繰り出される。

フェイトほどではないにしろ高い機動力を発揮することができるアルフ、そして不意を突いたとは言えども優でさえ気付かなかったほどの速度でジュエルシールドの元へ駆け付けたフェイトの2人によるコンビネーションはかつて破られたことはなく、魔導師でもないただの人間であれば自分たちの姿を視認することすら困難を極める高速攻撃だ。

その自慢のコンビネーションを繰り出した瞬間、アルフの目には首を描き切られる優の姿、フェイトには足から血を流して倒れ込む優の姿が……

「甘めえ!!」

「!?!」

2人の目に映っていたはずの優の未来の姿は、強烈な腕の痛みと痺れによって掻き消される結果となった。

「なっ…」

「に、人間がこれを!?!」

信じられない、ありえない。2人は目の前で起こった出来事が理解できずにしばし呆然としてしまう。

「お前らは速さが自慢みたいだけだよ、あのバカほど速くもなければ
おぼろ臆ほど読めない動きでもねーんだよ！そんなんじやハエが止まるぜ
!」

「チツ、こいつ…!」

(こ、この人…)

フェイトは初めて優と戦った時に無傷で勝利はしたものの、それは自分のことを：ヤールングレイプルとウコンバサラのことをなにも知らず、子供相手であるが故に生じた手加減も働いた無策無防備の優の際を突いたに過ぎない。

今回はその全ての有利がなくなり、条件は五分……否、自分の速度は優より速いことに加えてアルフが参戦していることを加味すればやはりフェイトの圧倒的有利だ。ところが優は臆すどころか、その圧倒的不利を物ともせず、2人の自慢のコンビネーションを瞬時に、自然体で、なんの苦も無く破ってしまったのだ。

(やっぱり強い……！)

(前とは全くちがう……！)

先ほど自分の爪撃を受け止めた優の防御力を目の当たりにしたアルフは「ハンパな攻撃じゃこいつにダメージは与えられない」と即座に認識して足を使い、「蹴り」ではなく「押し」で優を吹き飛ばして間合いを取った。

その直後にフェイトとの抜群のコンビネーションで繰り出した同時攻撃は、人間が最も反応・対応しにくい対角線(右上&左下又は左上&右下)を狙った実に合理的かつ確実性のある攻撃であったのにもかかわらず、優はその場から一步も移動せずに捌いてしまった。

それを目の当たりにしたアルフは優への認識を改めざるを得なかった。「只の弱い人間」から「只者ではない強い人間」へと。

依然として2人は優を挟み込んではいるが、付け入る隙が見当たらずに攻め倦んでいた。

(でも……あの筋肉ヤロー……！)

しかし、アルフは認識の改めと同時に優の「ある行為」に気付き……「人間……なんでそのまま反撃しなかった!?!」

「……………」

そう……。

優はその気になれば捌くのではなくそのまま攻撃を打ち込んで2人の腕を破壊することや、2人を誘導して衝突させることもできた………が、優はそれをしなかった。

「お前、そのフェイトってヤツとオレの話を聞いてたんだろ？ だつたらわかるはずだ」

「…!!」

優は先ほどフェイトにこう言った。

” お前だって本当は戦いたくねえんだろ？ オレたちも同じだ。だったら戦う以外の解決策があるはずだ”

対話とは片側の一辺倒な語りでは成り立たず、逆に言えば片側が対話の意思を示そうとももう片側に聞く気がなければ成り立たない。

互いに話を聞き、語り合う気持ちが必要でもそもそも土台すら作れない。だからこそ「戦いを望まない」というフェイトの思いを汲み取った優は、できる限りの説得を続けようと誓った。

優はその一環としてなるべく無用なダメージを与えずに時間を稼ごうとしていた、という訳だ。

「ゴチャゴチャうるさい！ 戦うのがイヤならさっさとジュエルシードを渡して消えちまいな腰抜け!!」

「……………」

しかしアルフはそんなものは知ったことではなく、思うように事が運ばないことと人間に手心を加えられた事実に激昂していた。

「てめー……」

「ふん！ この程度で怒った……」

優の苛つきを察したアルフは若干気を良くしたが、次の瞬間……

「邪魔だ!!!」

「!?!」

優が一瞬でアルフの懐へ飛び込んで飛び蹴りで蹴り飛ばした。

「こ……の……!」

「アルフ!!」

「へ、平気だよ！ この程度!」

アルフは優の奇襲の飛び蹴りにはなんとか反応して受け止めたものの、威力を相殺しきれずに大きく後方へ吹き飛んでしまった。更には蹴りを受けた腕が先ほど以上に痺れてほとんど動かせなくなってしまう。

「あたしよりジュエルシードの回収だ！」

「:!!」

(じゃあ、あとは頼んだぜ)

アルフを窮地から救うべくフェイトは優へ再び向かおうとしたが、アルフに諭されて本来の目的を思い出し、ジュエルシードへ一直線に向かった。

ところが……

「シューーート!!」

「!?」

聞き覚えのある子供の声と同時に多数の光弾が飛来。その光弾がフェイトを追跡するようにその頭上に一斉に降り注ぎ、フェイトは止むを得ず急停止と同時に後退する。

〈遅れてすみません!〉

〈いや、いいタイミングだ〉

その弾が飛来してきた方向を睨むフェイトの視線の先には、闇夜の中で一際目立つ白い服を身に纏った、可憐ながらもその瞳に鋼の意思と強い覚悟の宿った1人の少女が映り込んでいる。

〈他に仲間がいたんですね〉

〈みたいだ。めんどくせえことにな〉

〈でも人間…じゃない?〉

〈どうせ使い魔だろ〉

〈使い魔…:聞いたことあるかも〉

〈余計なおしやべりはそこまでだ〉

〈そ、そうですね〉

間一髪でフェイトがジュエルシードを奪取するという事態を防いだなのは、ジュエルシードを挟んでフェイトと視線を交わす。

〈で、こんなゴチャゴチャした状態での話し合いは無理だ。こっちのケモノ女はオレが抑えとくからそのガキとの話し合いはお前がやれ〉
〈はい…そっちはお願いします!〉

フェイトに背を向けてアルフと睨み合っている優は、思念通話でなのはと連絡を取り合いながらアルフの出方を伺う。

へじゃあ頼んだぜ！

へはい！いきます！

へフェイト！こっちはすぐ片付けてそっちに行くからね！

へうん、無理はしないでね！

方針が決定すると2人は同時に動き出し、優となのはの出方を伺っていたフェイトとアルフもまたその迎撃に向けて動き出すのだった。

ライカンスロープ？

「人間……！覚悟できてんだろうね！」

「へっ、今更てめーにビビると思ってるのか？」

アルフは優など無視してフェイトの元へ向かいたかったが、優はアルフの前に立ちはだかつており、また想像を超える実力と反応速度により振り切って向かうのは困難と判断し、苛立ちを募らせていた。

「それよりてめー、もしかしてライカンスロープか？」

「知らないねそんなの！あたしはアルフ！フェイトの使い魔だ！それ以外の何者でもない！」

「オレの知り合いに似たようなヤツがいたんだけどどちらだったか。まあ、その姿でおとなしくしてる時点でそうなんだろうとは思ったがな」

ライカンスロープとは人間と同じ身体的特徴を持っている……が、それに加えて人間を遥かに凌駕する身体能力、それに加えて「身体能力の向上」と「再生能力を得る」という変身能力を併せ持っている種族だ。

スプリガンのS級特殊工作員の1人である「ジャン・ジャックモンド」は、優の親友であると同時にそのライカンスロープでもある。

平常時の見た目は人間と変わらず、頭脳も生殖能力も人間そのものだ。しかしその筋力は本気でなくとも並みの人間なら即死する威力を生み出し、移動速度は裏の世界の精鋭でもほとんどの者が彼の影すら捉えられないほどだ。

そして特筆すべきは上述にもある変身能力で、変身すれば「人間の体格を持った獣」……まさに獣人といった容姿になる。優がライカンスロープかと思つて質問したアルフは耳や尻尾や爪など獣の部分はあるものの、人間の面影が強く残っているためライカンスロープに似ているとは言えない。

なお、身体能力は数倍に高まる上に不死身に近い再生能力を得られるが、自らの意思で変身することができない。しかも困ったことに身体を著しく損傷したり極度の興奮状態になると本人意思に関係なく

変身して理性が消え去ってしまい、敵味方問わず視界に入る生物がいなくならない限り暴れ回り殺し続けるのだ。

そのため変身は便利で強力な能力ではなく、むしろいつ爆発してもおかしくない爆発物のように危険なものなの、謂わば諸刃の剣である。それでも直近では変身前から覚悟を決めていれば、強靱な精神力で辛うじて変身を抑え込むことができるようにはなったのだが。

「じゃあ強化手術でも受けたのか？オレの攻撃を軽く受け止めるなんてサイボーグやライカンスロープも真つ青な身体能力だぜ」

「そんなものに頼るほどあたしは弱くない……！人間と一緒にするな！」

優のいた世界では、特別な装備も持たずにA・Mスーツを装着した優と互角に渡り合える者が多数存在している。

その中の一部に生命工学バイオテクノロジーによるDNA操作と脳手術で筋力と治療能力を数十倍に高めるものがあり、その能力たるや筋肉で銃弾を止めたり巨木を腕一本で押し折るのは当たり前で、脳と心臓が無事ならば首が折れても骨が見えるほど身体が抉られても四肢が切断されても瞬く間に回復・再生してしまうほどだ。

優はアルフの身体能力を目の当たりにして、焦りはしなかったもののライカンスロープかこの強化手術の線を疑っていたという訳だ。

「へえ、そりやすげーな。てめー、そこそこスピードはあるしパワーだけならてめーに似てるあのバカジャンよりあるぜ」

「それがどうした！あたしにビビったならさっさと帰っちまいな！」
「そういうことじゃねーんだけどな……」

優はなのはがフェイトと語り合う時間を稼ぐべく、なるべく会話でアルフの手を止めて戦いを引き延ばそうと試みた。しかし……

「もしてめーがあいつの保護者ならうまく言い聞かせてくれると助かるんだけどな。てめーはあのガ……フェイトと仲よさそうだし、少し話をしちやもらえねえか？」

「お前がたちがおとなしく退けばフェイトだって戦わなくて済むんだよ！ゴタクはいいから戦う気があるならさっさとかかってきな！」

「……………」

アルフのこの興奮ぶりに視線を落としつつ溜め息を一つ吐くと「これ以上はなにを言っても興奮させるだけ」と諦め、再びアルフを睨み付けて戦闘態勢に入る。

「どうしても引く気はねえ、か」

「さっきから言ってるだろ！こつちだつて…」

「あとで後悔すんじゃないぞ!!」

「それはあたしのセリフだああああ!!」

優VSアルフ、開始である。

伝わらない思いなの

「あなた、フェイトちゃんって言うんだね」

「……………」

ジュエルシードを挟むように空に浮かぶ2人。なのははとても戦場に臨むとは思えない穏やかな表情でフェイトに話し掛ける。

「この前は自己紹介できなかつたから、今ここでするね」

「……………」

「わたしは高町なのは。私立聖祥大学付属小学校の三年生。魔法を使えるようになったのは一カ月くらい前だよ。あなたのフルネームは？」

「……………」

「おみなえさんはどうだった？あの人、ちよつと口とか態度は悪いけどすつごく優しい人なんだ。話していると安心できるっていうか……どんなことでもなんとかなるって気持ちになるんだよね」

「……………」

「おみなえさんも言ったと思うけど、私たちはジュエルシードを集めなくちやならないの。でも、フェイトちゃんもジュエルシードがほしいんだよね？」

「……………」

「ジュエルシードはユーノくんが見つけたもので、今はそれをこの世界にばら撒いちゃった責任を取るために集めてる最中なんだよ」

「……………」

「それに……わかつてると思うけど、ジュエルシードとっても危険なものなの。だから封印しなくちやいけないの」

「……………」

「それをわかつてどうしてジュエルシードを集めてるの？もしかして、あなたにとってなにか大事なことに使うためなの？」

「……」

なのはのジュエルシードに関する質問にフェイトの表情に若干の変化が生じる。

それを察知したなのは更に踏み込んだ質問をぶつける。

「話してくればわたしたちでも力になれるかもしれない。それに、悩みって『誰かに打ち明けるだけでほんのちよつとでも気持ちが楽になる』っておかあさんが言ってたんだ」

(母……)

「もちろんそれだけで問題が解決するわけじゃないけど、少しでも気持ちが楽になればなにか新しい考えが浮かぶかもしれないよ。だからあなたの事情を少しでもわたしに話してくれないかな?」

「……」

以降もなのははフェイトへ継ぎ早に質問するが、それでもフェイトはなのはと目を合わせたまま沈黙を貫く。

まるで隙を伺うかの如く視線を外さないながらも戦闘態勢に入らない様を見るに、「自分の質問には答えないが言葉を聞く気だけはあ」と判断したのははフェイトが自ら答えを口にするまで思いつくだけの疑問を全て吐き出すつもりで質問を続けた。

「……ジュエルシードは願いを叶える宝石……っていうことはなにか叶えたい願いがあるんだよね。あなたはなにを叶えようとしてるの?」

「……い」

「え?」

俯きながらもとうとうフェイトが口を開く。よく聞き取れなかったが、フェイトは確かになのはの質問に答えたのだ。

「い、今なんて言ったの!?!」

「わたしじゃ……ない……!」

「あなたじゃ……?」

「……たしの……」

「じゃあいつたい……」

「……さんの……」

「自分じゃない」。フェイトは確かにそう言った。要約すると「自分に叶えたい願いは無い」ということだ。では何故フェイトは叶えたい願

いもないのにジュエルシールドを欲するのか？

この答えは至極単純、フェイトは自分以外の誰かの願いのためにジュエルシールドを欲しているのだ。

「誰のため…」

「邪魔を…」

「!？」

なのははその「誰か」を聞き出すために質問しようとしたが、フェイトはわずかに視線を落として石鎚形態のウコンバサラを強く握り締めると…

「するなあー…!!」

「きやあつー!」

なのはへ電撃を撃ち込むのだった。

「ジュエルシールドは渡さない…。絶対に!」

「フェイトちゃん…」

間一髪でプロテクションを発動して防御したなのは。反射的に目を覆った腕を下ろして目をあけると、そこには仇敵を見るような瞳でなのはを凝視するフェイトの姿があった。

「わかった。今はもうなにも聞かないよ」

「……………」

「その代わり…」

「…!」

意を決したなのははレイジングハートを前に突き出し…

「あとで絶対ちゃんと聞かせてもらおうから!!」

「!!」

その意を示すために「言葉」ではなく「行動」で伝える準備を始めるのだった。

認め合う二人

「羨の時間だぜ犬っころー！」

「ほざいてろ人間が！」

互いに正面から突撃すると、一瞬にして互いの手が相手に届く距離。

「フッ！」

「ふん！」

「!？」

一合目。

アルフは痺れた左腕ではない、魔力で包み込んで強化された右拳を振り下ろし、優は相撲のかち上げのように左腕を振り上げてぶつけ合うと、力負けしたアルフは右腕を大きく跳ね上げられて懐がガラ空気になる。

「はあっ！」

「フッ！」

二合目。

隙を作った優は続いて踏み込みつつアルフの腹部へ水平に右手刀を打ち込むが、アルフは間髪入れずに左足で優の右手刀を蹴りつけ、防御と同時にその反動で後方宙返りしながら着地する。

「……………」

(こいつ…。咄嗟の判断といい、片足でオレの腕を跳ね返す脚力といい、やるじゃねーか。もしかしてこれがユーノの言ってた魔力による身体能力の強化ってやつか？それにあの体勢からあんな動きを…)

優はアルフの即断力・瞬発力・脚力に感心していたが、本当に注目していたのはそれらではない。

アルフは優に腕を打ち払われた勢いで足がわずかながら浮き上がっており、通常ならば足を振るなど不可能なはずであった。しかしアルフはそこから足を振り上げて優の右手を蹴るという、物理的にあり得ない動きをしてしまったのだ。

(そっくいゃこいつ……………)

そのあり得ない動きを可能にした要因を推測して一つの仮説に辿り着く。

アルフとのタイマンより前のこと……すなわちフェイトとアルフのコンビとの戦いの時に2人の同時攻撃を去なした際のことだ。優は涼しい顔をしてはいたもののアルフの攻撃はフェイトより重く、あと少し手加減していれば優は力負けしていた可能性があった。

どんなに身体能力が高くとも、地に足を付けていなければ踏ん張りが効かず本来の力を発揮できない。だと言うのに空を飛んでいたアルフは優を驚かせるほどの重い一撃を放った。……ということは、アルフは空中でも地上にいる時と遜色ない格闘能力を持っている可能性が高い。

それを踏まえて先程のアルフの動きを見てみよう。

アルフは優へ接近する際、そして打ち合った瞬間までは間違いなく地に足を付けていた。そこから腕を弾かれ、足がわずかに浮き上がり、足を使うことは不可能なはずだったにも関わらず足を使って優に回避行動を行なった。

この事実が示す答えは……

(まさか……飛行魔法を格闘戦に組み込んでやがるのか……！)

その仮説は見事に的中しており、優もそれを確信していた。

アルフは魔法も使えるが、それ以上に格闘戦を得意としている。

空中では変幻自在の動き、地上では空中より素早い動きが可能で、それらを組み合わせた多角的かつ立体的な格闘戦を可能としているのだ。アルフの動きは謂わば三次元の動き、優の動きは二次元の動きと言えよう。

つまり先程のアルフは、優に浮かされた瞬間に飛行魔法を発動して反撃の体勢を整えただけに過ぎないのだ。これによりアルフは空間全てを足場として体勢に関係なく格闘戦を行うことが出来るのである。

(ちいっとばかりめんどくせーことになったな)

A・Mスーツの防御力のおかげで生半可な物理攻撃も魔法攻撃も通らないが、アルフはまだ本気を出していないようで、底は見えてい

ない。

今のところはアルフは地上に張り付いているが、もし今までより素早くなり、空中戦も織り交ぜられた場合には苦戦する可能性がある。

(こんなことになるならヘッドギア持つてきとくんだったぜ)

そうしなければいずれ弱点である頭部を狙われることは間違いない。人目を気にしてヘッドギアをかぶってこなかったことを優は少しばかり後悔することとなった。

一方のアルフは優を一瞬睨みつけた後、痺れの取れてきた左腕と殴りつけた自分の右手を握って開いて、握って開いてと何度も繰り返しながら見つめていた。

(今の…)

考えていたのは力負けした自分の右拳のこと。

実は右拳が優の腕に触れた瞬間、拳に込められていた魔力が掻き消されてしまったのだ。

(…そういうことかい)

先程のアルフの攻撃は拳を魔力で覆って固定して攻撃力・防御力を高めただけで、魔力を塊にして撃ち出す魔力弾と並んで魔法の「基礎中の基礎」と言える、魔法とも言い難い初歩の技法だ。

それが直接A・Mスーツに触れた途端に分解・霧散してしまった。

以前に説明した通りA・Mスーツには非常に高い霊気・妖気耐性があり、近日では魔法の耐性もあると判明した訳だが、今回の一件によつて魔法と言うよりは魔力そのものに耐性があるということが発覚したという訳だ。

更には…

(しかも魔法を使ってないのにあのパワー…)

魔力を掻き消されてパワーダウンしたとは言え、自分の力は人間など遠く及ばない：越えられない壁がある。ところがそれを魔法による強化すら行わずに純粋な力のみで打ち負かすという信じ難い方法で打ち破られた。

この秘密も以前に説明した通り、A・Mスーツ機能の一つである

「筋力増強」だ。人間を殴れば豆腐のように砕き潰し、本気で殴れば岩をも破碎するパワーを発揮するそれは、たとえ人外の怪物が相手であろうとも互角に渡り合える、主力とも言える極めて重要な機能だ。

(こりやあちよつと厄介だね…)

既に優を「只者ではない」と認めていたアルフであったが、A・Mスーツの特性に気付いたことで「強敵」と考えを改めざるを得なくなり…

(フェイト…。悪いけど、加勢は遅れるかもしれないよ)

一刻も早くフェイトの元へ駆け付けるべく、早急にその対策を迫られることとなった。

油断

「そろそろそろあー！」

(ちっ、やっぱり弱点を見抜いたか)

アルフは優の頭部を狙った爪撃のラツシュに加えて時折下半身を狙った足技も繰り出すが、フェイントもない馬鹿正直な攻撃を簡単に喰らう優ではない。アルフの動きを見切り、手すら使わずステップとスウエーだけで的確に回避する。

しかしアルフも先程の優の見切りと動きを見て警戒心を強めており、自分が攻撃しながらも反撃を警戒していつでも反応できるように心を構えているため、一方的に攻撃していながらもなかなか隙を見せない。

(だったら…！)

「!?」

「隙がないなら作るまでだ」とばかりにアルフの猛攻に無理矢理割り込みをかける優。

(そこだ！)

(いっ!?)

そこへアルフの次なる一手が繰り出され、馬鹿正直にひたすら手数で押していたアルフが突如として搦め手を使ってきたのだ。

「埋まりな!!」

「…!!」

碎ける地面。頭部に走る衝撃。歪む視界。

優は自分の意識が遠のいていくのを感じ、アルフはその手応えから明確なダメージを与えたことを確信した。しかし…

「がっ！」

「なっ…」

優は即席の気付けで己の意識を覚醒させた。

「はあ…はあ…」

「おまえ……」

A・Mスーツによる筋力と各種耐性に加え、勘の良さと天性の見切りをも兼ね備えた優は正に金城鉄壁と言っても過言ではない防御・回避能力を持つており、攻撃魔法はほぼ意味を成さないため近接格闘以外の攻め手に欠けるアルフは相性の問題で不利と言わざるを得ず、優の唯一の弱点である頭部に狙いを定める以外に勝ち目はない……：と思われていた。

しかし、それは正しい答えではなかった。

(くっ…やつてみたらメチャクチャいてーじゃねーか…！)

(あの状態から意識を取り戻した!?なんてヤツだ…！)

アルフは今までは意識を取り戻して素直な攻撃を行なっており、優の頭からフェイントの類いを消し去ったと見るやここぞとばかりにパンチの寸止めからの足払いで優を転ばせつつ同時に足を掴んで跳び上がり、アーチを描くように優を振り回して地面に思い切り叩き付けたのだ。

それに対して優は両手で頭部を守ったものの完全には防ぎ切れずに意識が飛びかける程のダメージを受けてしまい、アルフも確かな手応えを感じて勝利を確信した。

だが優はそのまま倒れ伏せるどころか、自分の足を掴んだアルフの手に蹴りを入れて無理矢理離すとそのまま即座に立ち上がって構えを取ってしまった。

(…けど、おかげでバツチリ目が覚めたぜ！)

(…いつ、舌を…！)

優を仕留めきれなかったこと、そして感じた手応えが思い違いだつたことに焦りを見せるアルフであったが、口元を吊り上げる優の口から流れ落ちる真紅の筋がアルフに優の復帰の謎を如実に物語っていた。

舌は人間の身体の中でも触れやすい箇所にある割には多くの神経が集まっているという重要な器官である。それ故に舌に傷を負うと激しい痛みに襲われてしまう。またそうなれば多量の出血や収斂しゅうれんによる呼吸困難を伴う場合もあり、舌を丸ごと噛み切つてそれらを意図的に起こして自殺するといったケースも存在する。しかし、優は咄嗟

に舌の端をわずかに噛み切ることで舌へのダメージを最小限にして
気付けに利用したのである。

(できればこのままもう少し休みてーとこだが…)
(でもそれなら…!)

アルフはそれを悟って自分の攻撃は決して間違っではないなかつた
と胸を撫で下ろし、むしろ「今こそ攻め時だ」と一気呵成に優を攻め
立てるのだった。

本能

「どうした人間！さつきよりだいぶ鈍いんじゃないか!？」
「……の……!」

地面を蹴って突進からのラッシュ、跳び上がって自重・落下速度・重力を加えた振り下ろすような蹴り、空中を飛び回って四方八方からの一撃離脱。アルフはA・Mスーツで無効化されることなぞ何処吹く風と優の身体に絶え間無く打撃を打ち込んでいく。そして時折織り交ぜる組み付きグラップルは、先程の攻防のイメージが後を引いている優にとっては精神を擦り減らす厄介な攻撃だ。

優は目が覚めたとはいえダメージがキレイさっぱり消えたわけではなく、脳震盪のうしんどうを起こしていたため反応が遅くなっている上に身体に力がうまく入らないため、ほとんど反撃もできずに必死にアルフの猛攻を捌いていた。

(…なのに仕留めきれない!なんてしづとい…!)
必死な優とは裏腹に、アルフはこのようにダメージを受けて動きが悪くなった優を自慢の格闘戦で仕留めきれないことに焦りを募らせていた。

(…できれば使いたくなかったが、こうなりや…!)
劣勢を覆す手段はこれしかない、とこの瞬間までは封印していたあらゆる手段を行使することとなった。

「ちいっ!」
「!?!」

突如鳴り響く破裂音。音は1回だけではなく、2回連続で2人の耳を叩く。

(痛ったあ〜!)
(あぶねえあぶねえ……っ!かこれで貫通しねーのかよ)
直後に互いに距離を取ると再び睨み合いとなる。

アルフの両腿からは血が滴り、優は頬から血を流しながらも涼しい顔をしているが、アルフのそれを見て緊張感を高める。

「…そういうやこの世界の人間はそういう武器を使うんだったね」

「そういうことだ。悪く思うなよ」

そのように言う優の左手にはいつの間にか拳銃が握られていた。優はアルフの爪撃を受ける瞬間、アルフの太腿ふとももに銃弾を撃ち込んだのだ。ところがアルフは咄嗟に魔力を集中させてそれを防いだという訳だ。

もっ尤も、それは自分の攻撃中という完全に無防備な状態からの反撃だったので魔力を集めるのが間に合わず、防御を貫通してわずかに減り込んでしまった訳ではあるが。

「はっ！ちようどいいハンデさー！」

「そうかよー！」

「だからもっを見せてみな!!」

「!？」

優に吠えるアルフはダメージを受けて怯むどころか逆に気分を高揚させて弾丸を筋肉の収縮で押し出し、足のダメージなど無いかのように一足飛びで急接近し、大振りの爪撃を繰り出す。

複数の重なった金属音と共に駆け抜け、突進の勢いを止めるべく踏ん張りを効かせて両足で地面を削ってブレーキをかけると間髪入れずに優へ振り返る。

「やっぱりいろんな武器を使わないとあたしには敵わないってわかったみたいだね！」

「このヤロー…!!」

対して優の手には今度は精神感応金属製ファイティングナイフが握られていた。

優は足にダメージを受けたアルフを見て「これで地上での機動力は落ちる」と踏んでいたせいでアルフの一足飛びに反応が遅れて拳銃では狙いが付けられなかったため、咄嗟に拳銃を捨ててナイフで間一髪防御に成功したという訳だ。

「もっただーもっを見せてみる!!」

バトルジャンキー「戦闘狂かよてめー!!」

誰もが知っている…いわゆる常識の一つに「手負いの獣は凶暴で危

「険」と言うものがある。

手傷を負った動物は、その状態で敵対すると自分の命を守るべく必死の抵抗で時折信じ難い力を発揮すると言うものだ。アルフの場合には手負い故の抵抗というよりは単なる闘争本能の昂りではあるが、ダメージを受けた結果の暴走という意味では共通点があるのだ。

目を血走らせながら迫るアルフは正に悪魔の如き形相。

優は先程のダメージによる身体の不調に加え、次第に強くなるアルフの圧力と気迫に押し込まれていくのだった。

救援

「オオオオオオ!!」

壁面から跳ね返って辺り一面に響き渡る獣の咆哮。

「ぐううっ……!」

その咆哮によって掻き消される、弱く小さい呻き声。

優は既に一切の反撃が無くなり、アルフの攻撃が数発ほど頭部を掠めるとますます動きも思考も鈍ってしまい、隙を窺うことさえ考えられなくなるほどに追い詰められていた。

(やべっ……!)

「ガアツ!!」

ついにやってしまった致命的なミス。優は足がもつれてよろめいてしまい、アルフはその隙を見逃さずに迷いなく優の足首をガツチりと握り締める。

(わらい、なのは…)

「アアアツ!!」

アルフは握り締めた優を力任せに振りかぶる。

優は自分の頭部を両手で守りつつも「この一撃で自分は意識を失う」と覚悟して、心の中でなのはに自分の役目を果たせなかったことを謝罪するしかなかった。

「……………」

おかしい。来るはずの衝撃が来ない。それどころか衝撃音もなにも来ない。そんなことはありえない。

本来ならば先程と同じく防ぎ切れなかった衝撃を頭部に受けてそのままK・O・されるはずだったが、今こうして衝撃も痛みもなく意識をはつきりと保っている。

地面に叩き付けられる瞬間、上半身に感じた不思議な感触となにか

関係があるのだろうか？疑問を抱いた優は衝撃に備えて閉じていた目を直ぐ様見開いて現状の確認を行った。

「グッ…アツ…!!」

「早く離れて!!」

「…!!」

聞き覚えのある声による一喝で我に帰った優は、自分の足を掴んでいたアルフの手を振りほどいてその場を離れるのだった。

「いま回復します。そのまま動かないでください」

「…助かったぜ、ユーノ…」

声の主…ユーノの元へ退避するとアルフを警戒しながらも片手・片膝を突いて脱力し、その間にユーノは左手を優に向けて治癒魔法を使い始めた。

「遅れてすみません。危ういところを間一髪でした」

「いや…」

ユーノは優がアルフに地面へ叩き付けられる瞬間、空中に足場を生成する結界魔法「フローターフィールド」によつて衝撃を吸収する材質の足場を生成して優へのダメージを防ぎ切り、同時に捕獲魔法「チェーンバインド」によつてアルフの動きを封じ、続けて空いた手で治癒魔法を使つて優を回復して現在に至る。

「謝るのは…こつちの方だ…」

「？」

ユーノはなぜ優が自分に謝っているのかわからなかったが、理由は至極単純なことだった。

優はユーノに対して態度が悪いことが多く、特に戦闘においては補助以外にユーノに劣っている部分はないと思っていた。ところがなには指摘されて態度の悪さを反省していたことと、今回の失態を助けられたことによつて若干の負い目を感じてしまった…という訳だ。

「それよりもこの相手は…あの子の使い魔ですか？」

「……………」

ユーノは優のそんな気持ちなど露知らず、現状把握を優先する。

「本人は…そう言つてた…」

「さつき二人に話しかけても応答がなかったから心配してたんですが、やっぱりまだジュエルシードは確保できてないみたいですね。……ってことは今はなのほも戦ってるってことですね？」

「…そのはずだ…」

「じゃあこっちは二人になったんだし早く勝負をつけてなの…」

「こんな…もので…!」

「!?」

優とユーノが会話を始めて間もなくアルフが奇妙な音を立て始め、気付いた2人はアルフの方向へ振り向くと……

「あたしを…!」

（あの犬女、拘束を解こうとしてやがるのか…!）

（使い魔があんな高度な魔法を…!）

「止められるかッ!!」

「!?」

アルフの怒声と共にチェーンバインドは砕け散ってしまった。

拘束を解いたアルフは息を切らしながらも2人を睨み付け、呼吸を整えながら再び戦闘態勢に移行する。

（この使い魔、思った以上に厄介だぞ…!）

（拘束魔法を力任せに破ったのか…）

ユーノはアルフの能力に驚きを隠せなかった。何故ならば、アルフの実行した行為はただの力技ではないからだ。

（バインドブレイクができるならきつとバリアブレイクも…）

（ユーノのやつ…なにを焦ってやがるんだ?）

アルフがユーノの拘束を解いた技を「バインドブレイク」と言う。

これは自身を捕縛する拘束魔法を解析して解放処理（干渉して拘束力を弱める）を行いながら、一定値まで弱体化させた時点で魔力を送り込んで破壊する技法のことだ。

この技法は消費する魔力は少ないものの、魔法の解析が必要なため難易度が高く、実戦では可能な限り高速で実行する必要があるため使い手が少ないのが現状である。

対して「バリアブレイク」はバリアタイプの防御魔法の生成プログ

ラムに介入して行うので多少の知識や技術は必要だが、最低限の干渉ができればあとは送り込む魔力の量次第で強引に破壊することが可能だ。

魔力の消費量はバインドブレイクよりは多いものの極端な差はなく、バインドブレイクを行える者ならば基本的に問題なく可能である。

ちなみにアルフはこのバリアブレイクを得意としているためほとんど一瞬で破壊が可能で、バインドブレイクに関しては時間はかかるもののなんとか実戦での運用に値するレベルには達している。

「御神苗さん、相手は相当な手練れです」

「…ああ」

「ここは協力して一気に決着しましょう」

「……………」

「……………御神苗さん?」

ユーノが協力の申し出を打診するが、優は前を向いたまま口を閉ざしている。

「あ…あの…」

「なのはが心配だ。さっさとやるぞ」

「…!はい!!」

思うところはあるものの、アルフというイレギュラーが現れた以上は他に横槍が入る可能性も考慮しなければならない。それならば片側が早期決着を付けてもう片方を救援に向かうのが理想的と言える。

だがこれはアルフも同様で、彼女もまた優たちどの早期決着を望んで全力で叩きにかけている。優から見れば相性が良いとはいえず、飛行魔法を駆使した戦術に不慣れな優にとっては難敵と言えよう。それならばここは人数の多さと優より魔道に明るいユーノという二つの利を活かして戦うのが最善だ。

(チツ、面倒だね…)

ユーノが参戦したことによってアルフの最大のアドバンテージであった「魔法戦闘の経験値」が帳消しとなった。更には二つの魔法を同時に、そして瞬時に使用できる程の腕を持つ手練れであるユーノは

優とはまた違った強敵である。

「防御は任せてください」

「……しゃーねーか。んじゃ、ミスるなよ」

「……ふふっ」

「……なんだよ気持ちわりー笑い方しやがって」

「ふっ……いえ、なんでもないですよ」

ユーノは先程のらしくない……縮こまったような気弱な印象を受けた優が、いつもの息を吐くように自然と出る悪い態度に戻ったことに安打を感じたが、この時優はなぜユーノが不意に笑ったのかなど知る由もなかった。

「じゃあそろそろ本気でやろうかねえ!!」

「……!!」

そして優とユーノは、アルフの本気の恐ろしさをこの時点では知る由もなかった。

豹変

「じゃあそろそろ本気でやろうかねえ!!」

(…来る!)

「ハアアアア…!」

2人の敵を前にしても微塵の憂慮もないアルフは身構えると全身から黒煙を放出し始め、アルフの姿を視認できない程に身体を覆っていった。更に……

(どこまで広がるんだ!?)

(煙の中で放電してるのか?)

アルフを中心に黒煙が拡がって周囲十数メートルを埋め尽くし、その中で無数の光が弾けては消えてを繰り返す。

「ヒョオオオオオオ!!」

「あ……」

「……この声……!」

アルフがいるはずの黒煙の中から身の竦むようなおどろおどろしい咆哮が鳴り響く。その声を聞いたユーノは途端に身体の震えと共に膝の力が抜けてその場にへたり込み、同じく優も身体が震え出した。

(力が…入ら…)

「ガアッ!!」

「!?!」

「御神苗さん!!」

刹那、中からその黒煙に包まれたなにかが音も気配もなく目の前に出現し、優の顔を強く叩いた。

(な…なんだ今のは…!)

(ぶ、無事か…。よかった…)

優は思うように身体が動かないので全く踏ん張りが利かずに派手に吹っ飛んでしまったが、辛うじて両腕で顔をガードして事無きを得たため、地面で背中から一回だけバウンドしてから即座に体勢を立て直す。だが当然そんなことに安堵している場合ではない。

(黒い煙に包まれてて姿は見えねーがこれは……妖気、だな。つてことはこいつ妖怪か?)

襲撃者の姿はその身を包む黒煙によって視認することはできないが、直前の状況を鑑みればその正体がアルフであることは明白だ。今まで感じていなかった妖気を突如感じ始めたのは、恐らくはこの時まで他の者に悟られぬように抑えていたのだろう。

……が、先程とは気配がまるで別物になっており、優はその違いに戸惑いながらも懸命にアルフの正体を探る。

(攻撃を受けた感じだとアルフと似ちやいるが、パワーば段違いだ。それに妙に低い立ち姿は四足歩行になってるように見えるし、怖気おぞけの走るような不気味な鳴き声、身体から出てきた黒い煙……)

喉まで出かかっているものの、そこからなかなか出てこない。優はこれ以上考えても仕方ないと割り切って目の前の敵(恐らくアルフ)に集中することにした。

へユーノー! こういう使い魔は手足ぶった切っても平気なのか!?

へそ、それは危険です! 切っても治すことはできませんが当然痛いしダメージが大きいと命に関わります!>

へちっ、めんどくせーな!>

優にとつては単純に命の奪い合いなら即必殺の攻撃を加えて終わらせられるが、今日の前にいる相手はフェイトと深い絆で結ばれた者であるため、フェイトの心境に悪影響を及ぼさぬよう極力傷付けずに戦闘不能状態にしようとしている。

「ヒョー!」

(くっ、またこの声……)

(あのスフィアは……)

当然のことながらアルフは(思念通話なので聞こえはしないが)2人の話し合いを待つ理由は全く無い。

突如4個の黄色に輝く光球を頭上に出現させ、先程と同じような不気味な咆哮と共に光球からナイフ程度の長さの槍のようなものを撃ち出し始めた。

(我ながらよくこんな面倒な条件を設定したもんだな……)

(気をしっかり保てば……！)

優はステップで回避し、ユーノはアルフの攻撃を先読みして出現させた魔法陣から発生させたバリア型防御魔法「サークルプロテクション」で完全防御。しかし着弾時にその槍が炸裂し、小規模とはいえ多数の魔力の爆片により視界が悪くなっていく。

優は胸中では自分の甘さとハードルの高さに悪態をつきつつも、先程より暗転した状況で如何に目的を達成するかを必死になって思案を巡らせる。

対してユーノは先程自分を脱力させた謎の咆哮に負けぬよう己を奮い立たせている。

〈ユーノー！さっきあいつを縛った魔法はいけるか!?!〉

〈チェーンバインドのことですね！あれは動きが止まってる相手に対しては有効ですけどあんなに早く動き回られたら役に立ちません!〉
(これもダメか！だったら……)

回避に専念しながらまずチェーンバインドで牽制して(仮に捕らえられなくても)一瞬でも隙ができれば全力で仕留めるという作戦を立てたが、肝心のチェーンバインドが役に立たずに御破算となり……
〈んじゃ、さっき……〉

代案として考えてあったもう一つの作戦のためにユーノに確認を取ると……

〈よし、やるぜ!〉

〈は、はい……〉

こちらは見事採用となった……が、採用となった喜びが顔に出てしまったのか、決まった途端に優への攻撃の割合が極端に増えていった。

〈……〉

〈なんか不満でもあんのか!?!〉

〈い、いえ！全然ありません!〉

〈だったら集中しろよ！お前が要なんだからな!〉

〈りよ、了解!!〉

アルフの射撃を凌ぎつつも上の空になってしまったユーノに対す

る優の一喝で我に帰るユーノ。作戦開始と同時にアルフへ突撃して
いった優を見届けつつ……

(たった一度見ただけであんな作戦を考えつくなんて信じられない……！)

優の発想力に思わず舌を巻くのがだった。

信頼し合う二人

「おおおおおー！」

「ヒョオオ……！」

自分に向かってきた優を迎え撃つアルフは先程の射撃をやめると同時に優に向かって地面を蹴り、黒煙の中で明滅する雷を更に激しく輝かせる。

「飛燕……！」

「！」

優は機先を制するべく、同じく地面を蹴って低空を飛び……

「疾風脚!!」

「……ッガアア!!」

接触するか否かの瞬間、渾身の力でアルフの顔面を蹴り飛ばした。

「いてっ！」

「アアアア!!」

しかしアルフのパワーとスピードは予想と期待を裏切るものだった。A・Mスーツを起動させた状態で全力で蹴り抜いたにも関わらず、優は反動で弾き飛ばされて軽く頭を打ってしまう。

だが流石のアルフと言えどノーダメージというわけにはいかず、その巨軀をよろめかせ、震える身体に鞭打たんばかりに頭を大きく振るわせ、己れを奮い立たせようと咆哮を上げる。

(このヤロー、下手すりや以前に戦ったジュエルシードの暴走体なみのパワーだな。しかも顔面蹴り飛ばしたつてのにあんまり効いてなさそうな手応え……つてあれは……！)

またダメージを受けたせいか黒煙の薄くなったアルフの姿を見て優は驚愕するが、2秒ほどで黒煙は元通りあの身体を覆い隠してしまい、漆黒の煙の中で双眸から光を放つアルフは間髪入れずに優へ接近戦を仕掛けていった。

「ヒョアッ！」

「ちっ！(さっきの大量の落雷はフェイトじゃなくてこいつの仕業だったみてーだな……！)」

前足の振り下ろし、噛み付き、全身に張り巡らされた雷によるショートレンジの射撃、突進チャージからの頭突きや、その勢いで後方に回り込んでからの後脚蹴り及び尾撃と四足歩行とは思えないほど多種多様な攻撃でアルフは優を攻め立てる。

更には動きを見せないユーノを警戒しつつ、優を攻め立てながら少しずつ誘導し、自分の射撃の射線上に二人を置いてまとめて掃討しようと思っていた。

(まだだ……。もつと魔力の制御を……。そしてタイミングを……)

ユーノもそれに勘付いてはいたが、優を信じて微塵も気に留めることなく機を窺っている。その間にもユーノへ牽制射撃は飛んできてはいたが、優は意図的に距離を遠ざけるよう誘導しつつ、優からも牽制を行うことでユーノへの集中力を削いで被弾を防いでいた。

そして同じような攻防が続くこと数秒後、その機は訪れた。

「あつー！」

「!!」

優の上擦った声に対して、号砲を聞いて飛び出す短距離走のランナーのように反応したアルフは、不意にユーノへの道が開いたことを察して目の前にいる優を無視しつつ猛然とその道へ飛び出す。

(頼むぞアンドヴァアナウト！)

だがそれは二人の作戦の一環であった。

↳ 優の作戦説明

「じゃあさつきオレを守った魔法はなんでA・Mスーツに触れたのに消えずにオレを助けられたんだ？」

「フローターフィールドのことですね。魔力の密度を上げたんです。たとえば攻撃や防御向きでなくても、魔法によつては魔力を多く注ぎ込めばその分攻撃性能や耐久性を上げることだってできるんですよ。」

A・Mスーツの場合は不安だったので効果を強めたものを三重にしたんですけど、それぞれ一秒も維持できませんでした」

「……なら密度をもつと上げた硬いのを同時に五つ出せるか？」

「アンドヴァラナウトの力を使えばそれくらいは…」

「よし。んじや、それを一部だけ遠くに出すのはどうだ？」

「…コントロールに集中すればなんとか…」

「やっぱり難しいのか？」

「やらないことはないですが、集中している間は多分動けなくなりま
す」

「上等だ、作戦を伝えるぜ…」

~~~~~

作戦の第一段階「敢えてアルフをユーノに向かわせる」は見事成功。  
作戦に気づかれた様子もなく、アルフは脇目も振らずにユーノを目標  
している……とは言え、アルフは並みの相手ではなかった。

「ヒヤアッ!!」

「!?」

アルフもまた策を練っていたのだ。

優と打ち合いを演じながらも「決め手は魔導師の方にある」と睨ん  
だアルフは一瞬のチャンスをもノにするべく、密かに魔力を練って脚  
力を最大限に強化しており、そのパワーはユーノまでの距離数十メー  
トルを1秒とかからずに詰められるものであった。

(くっ…い)

ユーノはもともと戦闘向きではない。

優ならば難なく反応して回避や防御どころか反撃のオマケまで入  
れられるほどの余裕のある時間であったが、ユーノにとっては見える  
だけで精一杯。反応はできても身体を大きく動かすほどの猶予はな  
かったのだ。

つまり、ユーノが選択すべき行動はただ一つ。

「迎撃」のみだ。

↳ 優の作戦説明2↳

「…で、アルフがお前に向かってきたら、さっきの魔法をアルフの正面  
に三重で貼って防御しろ」

「え？フローターフィールドですか？」

「あいつは多分、バリアじや簡単に破つちまうだろうし、お前を仕留め



るために全力で攻撃してくるはずだから重ねとかねえとあぶねーしな」

「あ、そういえば！……でも御神苗さんはなんでそれを？」

「今思えばなんだが、ユーノの拘束を破ったアレ……ティアのデイスエンチャント解呪っぽかったからな。あとその時のお前の驚きようも判断材料だ」

「また例の魔女の女性ですか……」

「では残りの二枚は？」

「正面に三重で貼ったら……」

くくくく

「はあっ!!!」

「!!」

予定通りユーノは一瞬にしてフローターフィールドを三重に展開し、防御態勢に入る。アンドヴァアラウトによって強化された三重のそれは、並みのバリア系防御魔法を遥かに上回る防御力だ。

アルフは反撃を覚悟はしていたものの、それがバリアではなく先程の特殊な結界魔法。バリアではないためバリアブレイクのように一瞬で破壊するのは困難だった。

しかしアルフの反応速度はそれをいとも容易く乗り越える。

「ギッ!!」

「……」

アルフはとっさに身体に纏わせていた雷を一点に集束。それを射出することで貫通力を高め、ユーノの三重の防御を一瞬で破壊したのだ。

これによりユーノの正面はガラ空きとなり、絶好の攻撃チャンスが訪れたアルフは間髪入れずにユーノへ猛然と襲いかかっていく。

その間わずか1秒にも満たないごく短時間。ユーノの命もこれでかと思われた……が、しかし……

(今だ!!!)

く 優の作戦説明3く

「……一瞬遅らせて正面にもう一枚貼れ。そうすりゃアルフはそれにぶ

つかって確実に動きを止められる」

「三枚は破られる前提ですか!?!」

「A・Mスーツにも耐久性があるくらいのもんが三重ならあいつの攻撃くらい防ぎ切れるはずだ」

「それでも!あとの一枚だって破られるタイミング次第じゃ役に立たないですよ!」

「お前ならできる。オレはそう確信してるぜ」

「(御神苗さん……!!)……わかりました。じゃあ最期の一枚は?」

「『上』だ」

くくくく

「!?!」

動きも取れずに隙だらけのユーノへ襲いかかったはずのアルフは突如として目の前に出現した壁に顔面衝突し、ダメージは無いものの何が起こったのかわからずに一瞬だけ思考が停止してしまう。

「猛虎……!」

「!?!」

同時に頭上から被さる影が一つ。その影は瞬く間に巨大化し、気付いて上を向こうとしたアルフの耳に裂帛の気合いが込められた声が鳴り響いた。

「雷神刹!!!」

「……!!!」

この声と頭部への衝撃と同時に、アルフの意識は断ち切られることとなった。

## 芽生える黒き意志

「猛虎雷神刹!!」

「…!!」

高高度から高速落下しつつ後頭部へ手刀を振り下ろす優。衝撃のあまりアルフの頭部は凄まじい勢いで地面に叩き付けられ、辺りに粉塵が舞い踊る。

「ア…ア…」

「……………」

呻き声を上げながら全身を震わせつつゆっくりと起き上がるが、目の焦点が合わずに立ち尽くすアルフ。その様を無言で見つめる優だったが、2秒ほどでその身体が揺らぎ、一切の抵抗なく地面に倒れ伏した。

直後、先程まで黒煙に覆われていた身体が目映く輝き、黒煙が晴れると四足歩行の獣の身体から変身前の獣人型に姿を変えた。

「…エ…イ…」

「ん？」

不意に耳へ飛び込むアルフのか細い声。今にも消え入りそうな小さい声に耳を傾けると……

「ぐ…め…」

(こいつ……)

アルフは双眸から二筋の液体を滴らせながら眠りにつくのだった。

「終わった……みたいですね」

「だな」

「それじゃあ早くなののところへ…」

静かに眠るアルフを見下ろしながら話す二人。ユーノはいち早くなのはの元へ向かおうと意気込むが……

「…」

「御神苗さん、なにを？」

突如そのアルフを腰に片腕を回してぶら下げるように持ち上げる優。ユーノは優がなにをしようとしているのか分からずにその様を見て驚くが、その理由はすぐに判明した。

「よっ…と」

「え!？」

優は持ち上げたアルフを無造作に茂みの中へ投げ込んだのだ。

「じゃ、いくぞ」

「ま、待ってください!」

「なんだようるせーな」

「い、いや…」

そのままにも言わずになのはの元へ向かおうとした優を慌ててユーノが引き止めるが、優の心底面倒そうな睨みに気圧されてしまう。

「でも…気絶してる相手を乱暴に投げるなんて…」

「はあ?」

ユーノの言うことは尤もである。

傍<sup>はた</sup>から見れば駄目押しにしか見えないのだから。しかし、優は気怠<sup>けだる</sup>そうに反論した。

「アスファルトの上に寝かせとくよりいいだろ」

「あ…」

「それにあそこに置いときゃもし結界が破れて一般人が戻ってきてもすぐには人目につかねーしな」

(この人、そこまで考えて…)

優は駄目押しどころかアルフの身を気遣って居場所を移したのだ。しかも投げ方にしてもただ無造作に投げたのではなく、落下時に怪我を負わせないために尻から落ちるよう計算して投げるといふ配慮付きだ。

自分はいち早くなのはの元へ駆け付けることしか考えていなかったが、優は相手の身の安全を考え、万が一の事態まで想定していたのである。

自分はそのつもりがないとは言え、つい先程まで命のやり取りをし

ていた相手に対してそこまで配慮した行動を起こせる者がどれだけいるだろうか？そもそも暴走直前のジュエルシードの回収という危急の事態を前にしてそれ以外のことには気を割くことができるだろうか？ユーノは少なくとも自分には到底出来そうにないと考えた。

この優の行動を目の当たりにしたことを機に、ユーノは改めて御神苗 優という人物の為ひととなり人を目の当たりにするのだった。

(でもそれならもうちょっと優しく置いてあげれば…)

やり方には若干の疑問を感じながら……

優たちとアルフの決着より数十秒前、彼らの位置からジュエルシードを挟んで反対側ではビル群の合間を縫って高速で舞う二つの光が火花を散らしていた。

(この子、前よりずっと動きがいい…)

一つは眩い金色に輝く光に包まれた少女。

(フェイトちゃん、やっぱりすごく速い…！)

もう一つは柔らかな桜色の光に包まれた少女だ。

時には射撃魔法を撃ち込み、時には己の武器を打ち付け、時にはひたすら回避に専念する。互いに隙を窺うが、互いに最大限警戒しているせいか共にその隙を見出せずに膠着状態に陥っており、使う魔法の差異はあれど同じような攻防を延々と繰り返しているのだ。

しかし、その膠着状態がついに終了する時がやってくる。

「!？」

突如として表情を変えるフェイト。

『マスター』

〈どうしたの？レイジングハート〉

同時になのはへ語りかけるレイジングハート。

『現時刻をもって敵性存在「アルフ」の魔力反応消失を確認。御神苗氏が勝利を収めました』

レイジングハートがなのはへ、淡々とした言葉で優の勝利を告げたのだ。

へ…そっか。さすがはおみなえさんだね。もう終わっちゃうなんて〈『現場へ駆け付けたスクライア氏の協力もあつて早期決着したようです』

へじゃあもうすぐこっちに来るってことだね。だったら…〉

(そんな……)

そう、今から間もなく優とユーノがこちらに駆け付ける。

そうなればジュエルシードはユーノが回収してくれる。なのははそれが終わるまでフェイトを引きつけて時間稼ぎをしなければいい。

つまりフェイトはユーノが到着するまでにジュエルシードを回収できなければ自身の敗北が決定してしまう。更には縦よしんばジュエルシードを回収できても、敗北して野晒しにされているであろうアルフの救出も行わなければならない。

フェイトは今まさに進退窮まる苦境に立たされているのだ。

(こんなことって……)

予想していなかったアルフの敗北、そして自慢のスピードでも速攻で倒せないどころかいまだに攻撃を直撃させることもできない程に腕を上げたなのは。起こってほしくないことがほぼそのまま現実になるという絶望的状况だ。

取るべき選択肢は二つ。

一つはジュエルシードを諦め、アルフの救出を敢行して撤退。

もう一つはジュエルシード回収だけに全力を注ぎ、アルフの救出を諦める。

だが、とうの昔に覚悟を決めていたフェイトには撤退という選択肢は存在しない。

(ねえ、アルフ……)

サポートに長けたユーノ、人間としては異常な戦闘能力を持つ優、それに加えて短期間で急成長してしまったのは、このまま放っておけば間違いなく今後の脅威となる。それに加えて戦えば戦うほど手の内を知られ、対策を練られてしまう。対して自分は大きく成長することは見込めず、味方はアルフしかいないため練られる対策は大きく限定されてしまう。

(教えて……)

このままでは誓いを果たせなくなってしまう。ならばその脅威を払拭するにはどうすればいいのか？

(わたしは……)

否、そんなものはどうの昔に決定している。

(もう……)

今までずっと考えていながらも一度も実行できずにここまで来てしまった。何故ならば実行しなくても済んでいたから。けどそれでいい。実行しなくて済むならそれに越したことはないのだから。

でも、たった今、それをやらなければ未来は閉ざされてしまうだろう。

(どうすれば……)

頭で考える前に身体が動き始めた。

(……ちがう……)

気付いた時には既に実行していた。

(もう、決まってる……)

今まではそうする必要がなかった、そうすべきではなかった、そうしたくはなかった。何故ならば……

(やるしか……ない……！)

たった一度でもそうしてしまえば二度と引き返すことができなくなるから。

それでももう止まらない。躊躇ちゆうちよしない。省みない。全ては誓いのために。

「お前は……！」

「!?」

ウコンバサラを強く握り締め、ハンマーに変形させ、閃光のような放電を発生させ、大きく振りかぶる。

それは最後の最後まで踏み止まり、躊躇し、取りたくなかった最後の手段……

「死ねええええ!!!」

そう……「殺してでも奪い取る」ことであつた。